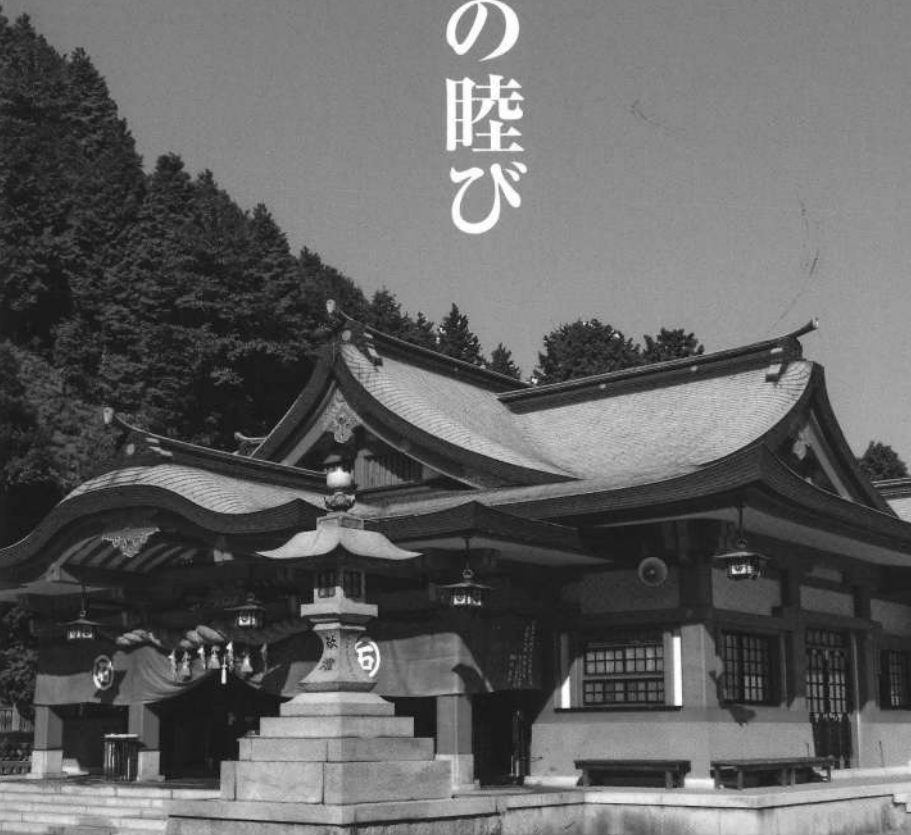


愛比賣の睦び



講話集

愛比賣の睦び

第二十八回神道講演全国研修大会・愛媛大会

目次

御挨拶

序

記念講演「日本の国柄と石鎚信仰」

絆（きづな）と舳（もやひ）

日本の原点 畏怖と畏敬の念

社会と神道

河童の話

地神さんちじんについて

儚きゆえに

お国自慢

こころの絆を

析る

玉串料

日本三大祭のひとつを経験して

神社本庁総長

石鎚神社宮司

石鎚神社宮司

田中 恆清

十亀 興美

十亀 興美 1

玉井 利明 9

寺本 正徳 17

山崎 浩司 22

小林 晴美 27

河野 誉嗣 32

畠田 明彦 37

社 信大 42

佐々木 美津子 48

武智 正人 54

今井 一雄 59

丸茂 広知 62

靖国さま・護国神社を「国民総氏子運動」に

私の奉務する鹿児島神社のこと

一年目の神職として

神宮大麻と氏神さまのお神札をおまつりしましょう

御霊について

会社年始安全祈願祭

お宮について

修理固成すと云う事
つくりかためな

神社とは

式年遷宮にこめられた日本の心

大震災の中にありて

登拝

躰と教育

尊き命

佐古 建彦 66

池上 晃平 71

近藤 大仁 76

塩崎 昇 80

小松 毅 85

梶田 辰則 89

根石 俊明 92

中木屋 豊 96

村田 力 100

後藤 大志郎 105

永野 雄大 112

山下 裕嗣 117

大野 一省 122

矢野 忠臣 126

日本人の魂―一杯の水―

御利益とは

人としての生き方

日本人の大発明 まつり

社殿建築と日本文化

「女性宮家」創設は女系天皇導入の隠れ蓑

小さな一村社の記念事業

日本人のこころ

ご英霊十三秒の思い

神社の森で心に潤いを

皇居勤労奉仕を終えて

鈴鹿七福神大祭を終えて

神道講演構成法

愛媛大会の記録

鈴木 明子

別役 重幸

宮本 優子

金倉 卓彦

山元 義清

石塚 智康

村田 和之

佐古 一洌

河本 文夫

村瀬 佳子

芦原 高穂

山本 行恭

神道講演全国協議会役員名簿

全国大会の歩み

あとがき

愛媛大会実行委員長 佐古 一 冽

214 212 211

御挨拶

神社本庁総長 田 中 恆 清

本日茲に、第二十八回神道講演全国研修大会が開催されますにあたり、一言御挨拶申し上げます。神道講演全国協議会の皆様には、常日頃より神社本庁の諸施策に対し、格別のご理解とご協力を賜つてをりますことに、心より御礼申し上げます。

東日本大震災から一年以上が経過致しましたが、被災地には未だ多くの問題が山積してをり、復興には長い道程が予想されます。これからも斯界を挙げて被災地支援に努めて参りたく存じます。被災地および罹災神社が一日も早い復興を遂げられますやうご祈念申し上げます。

さて貴会は、長きに亙り、神道講演を通じて斯道の興隆にご尽力頂いた石井寿夫先生・佐古幸嬰先生の貴い御志を継承発展させる場として、昭和四十六年より本研修会を開催されてこられました。爾来、直接に両先生の教へを受けた方々のみならず、全国において多数の参加者を得て研修を重ね、互に研鑽されたご成果を、それぞれの奉仕神社の社頭にお

ける教化活動において実践されてをりますことは、斯界にとりまして洵に心強い限りであります。

昨年は東日本大震災をはじめ、台風による豪雨災害など、自然の驚異を改めて痛感した年でした。我が国は戦後、「物の豊かさ」を求めて、経済的發展を遂げて参りましたが、未曾有の大災害を機に、物事の価値観を問ひ直さうといふ声が高まってをります。そして、自然への畏敬の念や祖先への感謝の心など、日本人が悠久の歴史の中で培ってきた普遍的精神の大切さが見直されつつあります。この時にあって、鎮守の森を教化の場として充実にさせるためにも、神道の精神をわかりやすい言葉で伝えてゆくことは益々重要性を増すものと確信致してをります。

どうか皆様には、教化活動の第一線に立つとの自覚のもと、本研修大会の成果を広く斯界に伝へ、国民精神の昂揚を以つて、斯道の興隆と我が国の發展を図るため、尚一層の御尽力を賜りますやう、切に願ひ申し上げます。

結びにあたり、貴会の愈々の御隆昌と、参加各位の益々の御活躍と御健勝を祈念致しまして、御挨拶と致します。

序

先づもつて第二十八回神道講演全国研修大会の開催おめでとうございます。当社といたしましては、平成十二年の第十六回大会に次いでの開催をお引き受けし、こうして全国より志篤き神職各位をお迎えして開催できましたこと誠に光榮に存じました。

我が国は戦後六十七年、今だ占領政策の後遺症は癒えず、むしろその重圧が国難となつて、この国の根幹に大きなダメージを与え人心の荒廃は重大なる事態を迎えており、徳育の如何に大切かを思い知らされるところであります。この国情を考えます時、神社及び神職の使命は非常に重要であります。

国家国民の安寧、氏子崇敬者の弥栄のため祈る祭祀の厳修は第一義であります。神々のご神徳や生活規範を伝える教化育成のためには、社頭講話の果たす役割は両輪であります。特に核家族化によつて、先祖のいのちの継承、祖父母の生きた知恵が伝わらなくなつたために家族崩壊が深刻化する現代社会に家族の絆と青少年の育成の大切さこそ、国づくり、人づくりの礎なればその教化育成に尚更のことと存じます。

どうか、本大会が皆様にとりまして実り多き研修として今後に生かされますことを念願し、ご挨拶いたします。

愛媛大会会長・石鎚神社宮司 十 亀 興 美



第28回 神道講演全国研修大会・愛媛大会

平成24年8月28日～30日（石鎚神社）

第二十八回

神道講演全国研修大会・愛媛大会

とき 平成二十四年八月二十八日～三十日
ところ 石鎚神社

日本の国柄と石鎚信仰

石鎚神社宮司 十 亀 興 美

山即神、神即山、頂上社御造営の感動

私こと、

平成七年十月に石鎚神社宮司を拝命、同年一月十七日、かの阪神淡路大震災の年でした。翌平成八年三月、宮司就任初の事業が、ご神体山霊峰石鎚山山頂の、当社奥宮頂上社の御造営を中心に、神札授与所、避難小屋兼社務所の新築、そして進み行く境内地の崩壊防止工事という、大事業を実施すべく復興奉賛会を設立、総工費十億円を計上いたしました。

しかし当時、バブル崩壊という社会状況の中、果たして御浄財が集まるか危惧を抱えての出発でした。而も国定公園の制約の中、先年の愛媛県による、石鎚スカイライン開通工事が自然破壊を生じ、保護団体の訴訟に県が敗訴。為にその影響を受け、反対運動にも遭遇、標高一九八二メートルの高山故、登山ロープウェイ終点の中ノ宮に当たる成就社、並びに石鎚スカイライン終点土小屋遙拝殿、双方共に同地より頂上社へは徒歩約二時間半、資材

運搬はヘリコプターに頼るしかなく、神山の聖地に、如何にふさわしいご神意に適うものとなるかの見極めは、自然環境にいか合致するかでありました。

その自然の摂理を知るには、山小屋経験者や、頂上奉仕者の意見を尊重、保護団体の反対運動も天の声と聞き、自然界の風雨のすざましさにも遭い、全ての現象が神様の声であり戒めか、工事関係者と共に、霊山の崇高さを思い知らされる尊い教えを体験致しました。

そうした襖を受け、一旦その許しが得られるや摩訶不思議、台風も避けて通る程のご神慮を拝し、奉賛会結成以来約六ヶ年を要し、工事関係者の並々ならぬご苦勞、信徒崇敬者のご支援と奉賛、そして篤い祈りをいただいて、神山にふさわしい頂上社の御造営が見事完成、しかも無事故で成し遂げることができました。

何と申しまでも最高の感動と極めつけは、御遷宮の日の夕刻、見渡せば雲の海、莊嚴なる雲海が四方一面遙か彼方の地平線まで、絨毯の如く敷きつめられた姿は、これぞ高天原の姿の神業、流石霊峰石鎚の神のお慶びの姿かと思え、役の行者開山千三百年の歴史と伝統に培われた石鎚信仰の真髓、ここに見たりの感一入、感涙にむせびました。

更に危惧された御奉賛、全国氏子・崇敬者、石鎚山を心の拠り所とされる皆様の篤志をいただき、石鎚の神の偉大さ崇高さを肝に銘じさせられました。

右六ヶ年の体験、石鎚信仰のただならぬ教えと共に、神の道・人の道、この世に生を享けた使命、そしてままならぬことの数々等、人生を凝縮した尊い教えをいただきました。

日本の国柄再興への祈りをこめて

さて、日本の国の国柄のことであります。

師と仰ぐ石井寿夫先生が講演で、常に日本の国柄の根幹とそのすばらしさをご教導いただきましたことが、平成の大御代の初めより、東日本大震災に至る二十余年に、次々と起こった事象こそこの国柄の大切さとは何かを語り、国民よ目覚め、守りぬけと、神々の雄叫びか教示と考えるのであります。

占領政策のボディーブローの恐怖を今に

日本は昭和二十年の敗戦による占領政策により、国教であった日本神道が一宗教法人とされ、ために信教の自由、憲法の義務責任なき自由・平等、政教分離政策、極めつけは神道指令により、皇室の尊厳は希薄化、宗教の乱立を招き、主体性なき政治、しかも国民道徳の根幹、教育勅語・修身教育が排除されました。

更には明治時代の近代国家建設は、太古よりの日本の歴史の中に培われた伝統文化を集約した日本の国是を語る、その近代史や地理が教えられなかったために、国づくりの根幹

の教育、特に徳育の欠如、更には家族制度が、個人の権利尊重と財産分与の平等化により、先祖の大切さ、その心と命を正しく伝える生きる知恵が伝わらなくなりました。

そのため家族崩壊が進み、遂には老人の孤独死、子供の虐待死という無縁無情社会を生み、自主独立心なき若人を生み、人間社会は人と人が支えあつてこそ成り立つ世が遂に崩壊し、今日の人心荒廃の様は、道義国家日本の栄光は消え失せたに等しくなつたのであります。

今こそ明治の教訓に学ぼう

故に私達は、今こそ占領政策の非を正し、日本本来の姿に立ち返るために、道義国家日本の礎を示された、あの明治天皇のご聖断を基として活躍された、明治の先人群像達の崇高なる精神に学び、神様が生み賜った豊葦原の瑞穂の国、神々の幸ふ国日本は、天照皇大神を中心とした八百万神々の天の岩戸開きの時、日本精神文化の根本を成してきた神道精神を、国政の礎とした祭政一致の国づくり、人づくりこそ、日本再生の鍵であると申し上げます。

何故なら、戦後日本は経済至上主義を進め、世界第二の経済大国となった。この快挙の根には、戦後の焦土と化した祖国日本再興に、明治の群像達が残した明治魂がまだ生きて

いた。

しかしながら、五十五年体制といわれる、呉越同舟の自民・社会両党連立内閣誕生という、信じられぬ体制の時、「物で榮えて心で滅ぶ」と案じられた危惧は、大和魂の根の教育をしてこなかった人間づくりが枯渇し、遂に昭和五十五年頃より、左翼的社会政策が、日本の国体という根を失ったまま、国民の欲望に迎合し、坂の上の雲ならぬ、坂の下へころげ落ちてしまったといつて過言ではないのであります。

日本の国柄忘却への天の声、神の教示か

さて、右より空白の二十年、平成の大御代を迎え、次々と吉凶あざなえる縄の如しの教示される事象は、日本の国柄とは何かを問われる事ばかり。それは、

一、平成五年第六十一回神宮式年遷宮は国家の重儀を皮切りに

一、同五年の米飢饉、翌六年の水飢饉（松山市ではデッドウォーター問題）

飽食への警鐘、自然の恵みへの感謝の忘却、生きるために何が大切な基の教え

一、平成七年阪神淡路大震災、震源地が国生みの基、漂える国の修理固成の警告か、あわせてこの時期、空気飢饉と思えるダイオキシン等大気汚染深刻となる。

一、オウム真理教のサリン事件、国内に激震、宗教の乱立は百鬼夜行的姿、聖職と言われ

る宗教界への不信を招く。

一、日教組主導の学校教育、倫理、道德教育なき教育の崩壊、学校教育の崩壊は核家族化に連動し、家庭崩壊深刻化

一、平成十六年、かつてなき計十回の台風が日本列島を縦断、以来自然災害の急増顕著、更に天孫降臨の高千穂峰に連なる、新燃岳の噴火は身代りかの声。

日本国柄の基 皇室尊厳護持の教え

平成十七年十一月、小泉首相の諮問機関、皇室典範に関する有識者会議の答申、女性天皇、女系天皇、長子優先の皇位継承が国会に上程の時、皇室の伝統の護持のため、平成十八年一月十九日、全国より八百名の神職が東京憲政記念館に集結、上程阻止の陳情の様は、天照皇大神、天の岩戸隠れの天の安の河原に神集える、八百万神の神議りの姿に似たり。

戦後占領政策の重圧に、天の岩戸隠れの中にあつた神社界が、天下国家の一大事として立ち上がり、目覚めさせられた端緒となり、本気で国家再生への道を歩み始め、一般国民へのアピールともなりました。

されど、小泉首相がいざ国会に上程せんと登壇した時、係官が耳うち、秋篠宮妃殿下ご

懷妊の報にて上程が見合わされ、そして当然の如く、悠仁親王殿下がご誕生になられた様は、神様のご意志、畏くも神秘なる感動の世界を見せられ、これぞ八百万神々の祈りの成就であり、この快挙により皇室の尊嚴護持の大切さ、日本の国柄の基を思い知らされました。

然もこれにより、日本の国の国家観、生命観、歴史観等のすばらしさが、渡部正一上智大名誉教授、桜井よし子ジャーナリスト、藤原正彦お茶の水女子大教授を始め、数多くの憂国の士が登場して執筆、或いは論陣を張り、日本会議が「日本の息吹き」、産経新聞が「正論」を発行して世に知らしめた努力によって、歪曲され、捏造され、自虐史観に縛られた重圧を払拭し、解除の方向に導いて頂き、日本本来の正論へ歩みを進めていることに感謝であり、斯く申し上げる私をも、目覚めさせていただいたことに感謝であります。

東日本大震災の教訓

そして人心荒廃と思想混乱の、誰もとめられぬ現代的戦国時代に、織田信長の登場が待たれる時、東日本大震災は、日本列島に激震と共に尊い犠牲をもつて、日本再生への教訓を示されたと思うのであります。

今年は古事記編纂一三〇〇年、神宮大麻全国民奉斎勅許一四〇年、明治天皇崩御一〇〇

年祭という尊い節目の年、日本誕生の原点、天照皇大神の三大神勅を基軸とし、明治天皇の教え示された祭政一致の国づくり、そして人材育成に意を尽くし、この国難の中にある日本の再生に神社界の使命に努力していかうではありませんか。

合掌

絆（きづな）と舳（もやひ）

玉井利明

このたびの研修大会に参加の申し込みを致しましたときには、社頭講話のつもりで構想を練ってまいりました。ところが八月十五日前後ころから、それまでの構想を、すべて考えなおしました。で、社頭講話でなしに、ここにお集まりの、神道人である皆様方を対象に、やむにやまれぬ気持ちをもって語りかけるといふ、まこと大それたことを思い立つてしまったのです。どうか、お許しください。

たかまのはらにことはじめたまひし、すめおほかみたちのおほみはかりのまにまに、あまつひつぎ、ゆるぎなく、あめのした、たひらけく、よものうみ、なみしづかにおだひなれと、きみ・おみ・たみ、ひとしくねがひ、はふりども、やしろやしろのおほまへに、かなべて、ねぎごとまをし、ひたぶるに、つかへまつりてありふるがほどに、いにしふづきのみつか、ロシアのメドベージェフ首相、国後島に上陸し、はづきのとをか、韓国のイ・ミョンバク大統領、鳥取県の竹島に、上陸の強行をなしたるのみならず、すめらみこ

との、かのくに、おとづれたまふにつきて「韓国を訪問したいのなら、独立運動で亡くなった方々に対し心からの謝罪をする必要がある」などと、ことあげせり。あはれ、うれたきかも。かくもゐやなき。かかるまではづかしめ。くにとして、いかでか、ゆるすべかりける。さらに、はづきのとをかあまりいつか、香港の活動家ども尖閣諸島魚釣島に上陸せり。あはれ、いきどほろしきかも。あが日本外交、つたなく、をぢなくして、うたてあり。その、をぢなきをこそ、とつくにぐにの、あなづるなれ。かくてぞ、くにの威信をそこなひ、領土保全さへ、あやふきさまに、なりはつるなる。ときあたかも終戦記念日。靖国神社には、内閣総理大臣をはじめて、つかさづかさのひとどち、とつくにをおちて、おほやけに、まゐをろがみまつること、あへてなさず。かかるさま、みくにのために、いのちささげたまひし、みたまたち、いかに、みそなはしますらむ。

事ここに至つてなお、テレビの人気キャスターなど、「韓国と日本、中国と日本、どちらも歴史的にも文化的にも切っても切れない絆があるんだから、もっと仲良くできないもんですかねえ。相手が強硬に出たからって、こっちも同じじゃ、せつかくの絆が……」などと、したり顔で言いつのっています。

「絆」という言葉、東日本大震災以来、復興の合言葉にもなりました。

いい言葉です。いい言葉ですけれども、どんないい言葉であろうと、使いようでは粘あ
くくなつてきます。臭あくくなつてしまいます。

そもそも絆という言葉。その成り立ちから考えてみたいと思います。

どこかで掲げた標語「きつと、ずっと、なかよし」で「き、ず、な」というようなのに、
なるほど、うまいこと言いよるわい、——などと、皆さん、感心なさいますか。

違うんですよ。

言葉というものは、言霊といわれるように、靈妙で神聖なものです。お笑い芸人ならと
もかく、われわれ神職は、神社本庁憲章の第十一条の2に規定されているとおり、社会の
師表たるべきことを心掛けなければならず、いいかげんな思いつきなんぞで、言葉という
ものを、いじくつてはなりません。

では、絆という言葉の、もともとの意味は、どうなのでしょう。『梁塵秘抄』に

御厩の隅の飼ひ猿は 絆離れて さぞ遊ぶ 木に登り 常磐の山なる檜柴は 風の吹

くにぞ ちうとろ揺ぎて 裏返る

というのがあり、馬の守り神として飼われているお猿さんが「絆」を離れて遊ぶさまを歌
っています。ということは、その「絆」なるものは、猿を拘束して遊ぶことを妨げていた

ものです。

現代の仮名書きでは「きずな」ですが、本当は「つ」に濁点の「づ」で、「きづな」なのです。つまり絆という言葉は「き」と「づな」から成り立っています。

そこで、古語の「き」は、上代特殊仮名遣いで甲類か乙類かという問題から考えねばなりません。

むろん、われわれは神職であり、皆様がた同職ですから、古語については専門家であつて、こういうことは先刻ご存知の筈。上代特殊仮名遣いは、本居宣長先生の指摘から解明が始められたものです。古代の表記で、同音なのに字が使い分けられていることから、二十一の音節について、古くは母音の違いがあつたのがわかり、音が違うのであれば当然、意味も異なるというわけです。

で、この場合、「きづな」の「き」は乙類です。「きざす」（兆す）「きはふ」（競ふ）などの「き」と同類で、持続的な限定を意味します。ですから「きづな」は元々、生きものを繋ぎとめるという、持続的かつ用途を限つた「つな」（綱）という意味でした。それが、人と人との繋がりなどを意味するようになったのです。

登山用の綱を、ドイツ語でザイルといいます。登山者が、互いにザイルで結び合うこと

を、アンザイレンといいます。この、アンザイレンが、目に見えるかたちでの、人と人の絆の典型でしょう。

アンザイレンの、いちばん基本的な結びかたをプーリンといいます。こうです。(実演)これを舐むすびともいいます。舟と舟とを繋ぐのも、同じ結び方なんです。

登山者が岩場で転落あるいは氷雪で滑落したら、アンザイレンしているパートナーが止めます。(実演)

そのときには、ズンツと大きな力がかかり、結び目が締まってガチガチに固まってしまふのです。

けれども、この舐結びですと、どんなに固くなっても、ほどくことが出来ます。ほかの結び方ですと、そうはいきません。

絆というものは、切れてはならん。勝手にほどけてもならん。かといって、結びっぱなしでは困ることもあります。

絆とは、いい事づくめのものじゃない。よい絆と悪い絆があるんです。

悪い絆は、ほどくべし。耳あたりのいい言葉や、きれいごとの概念のために、自縄自縛のがんじがらめになつては、つまらんです。

韓国と日本、中国と日本との歴史的・文化的関係など、「えにし」ではあっても「きづな」ではありません。

絆は、甘ったるいもんじゃない。もともとの意味は、生きものを繋ぐ綱。ですから、持続的で限られた繋がりであって、アンザイレンした登山者のように、お互いを拘束し、とくに危険を分かち合うこともある、それが本当の絆です。国と国との関係というなら、日露戦争のときの日英同盟、第二次世界大戦のときの日・独・伊三国同盟、そして戦後の日米同盟などが絆です。

絆とは、むすぶものです。また絆は、ほどこものでもあります。

結び目が締まってしまい、ガチガチに固まったとしても、ほどこべきときには、ほどこなくてはならん。そのための紡むすびです。

けれども、ほどいてはならん絆もあります。

われわれ日本国民にとりましては、家族の絆や、氏神様・ご先祖様との絆、そして臣民として皇室との絆というものは、高天原に事始め給いし皇大神たちによって、はじめから結ばれています。自分で結んだ絆ではありませんから、自分勝手にほどいてはいけません。ところが、昭和二十年十二月にGHQが日本政府に発した神道指令、昭和二十一年、あ

たかも明治節を塗りつぶすかのように十一月三日公布、翌年五月三日から実施された日本国憲法と、それに基づく民法や教育制度の改革などによって、ここ六十年あまりのあいだに、その、大事な大事な絆が、じわりじわりとむしばまれ、そこなわれてきています。

はいい話が、絆という言葉。「きづな」であるのに、戦後の現代仮名では、「す」に濁点の「きずな」なのです。これでは、言葉本来の意味が、見失われてしまいます。

家族の絆、氏神様・ご先祖様との絆、そして皇室との絆といったものが、このままほうっとおいたなら、いつのまにか朽ちて切れるか、緩んでほどこてしまうか、というような、まことに、まことに憂慮すべき危機的状況にあります。

だからこそ、言葉本来の意味に立ち返り、絆が朽ちてきたのなら、補強するなり取り換えるなりしなければなりません。緩んできたのであるならば、しっかりと結びなおさねばなりません。

そのために、どうすればいいか。ものごとには、出来ることと出来ないことがあります。けれども、いかに無力であろうと、何も出来んということは、絶対にありません。

やむにやまれぬ憂国の思い。われわれ神道人は、その思いを神明奉仕に盛り込むことが出来ます。

つたないながらも私は、朝夕の神拝で、いつも憂国の思いをこめた辞別の祈願ことわきをしています。時局に関することですから臨機応変。あつく、はげしく、ひたぶるに奏上するのです。

神前に、うそいつわりの無い言霊をほとばしらせる。そうすることで、力が与えられます。だから人に対し、信念をもつて語ることが出来るのです。

日々の祈願と教化活動。われわれの使命は、ことのほか重いと思います。

どんないい言葉でも、ネチネチとやっては鼻もちならん。せつかくの絆という言葉。粘くて臭あゝいものになってしまわないか、心配です。

神職たる者、いつも新鮮で正しい言葉を正しい意味に使い、すがすがしくシャキツとしていたいですね。

以上「絆と舳」と題し、同職の皆様がたを前にして、つたない話。ご清聴ありがとうございます。

(愛媛県 高縄神社 禰宜)

日本の原点　畏怖と畏敬の念

寺　本　正　徳

今年は、古事記が撰上されて一三〇〇年の記念すべき年です。この事を念頭に、今年の賀状は、日本の原点、畏怖と畏敬から『畏敬』と墨書きし、心ある同志に届けました。

日本列島に生きとし生ける大和民族は、太古の昔より「森羅万象」に神が宿り、神の力を信じ、自然界に集落共同体に異変を感じるたびに神を呼び神に祈り、カミ祭りを繰り返して、一切の悪霊を持ち去っていただき、感謝の誠を捧げてきた心優しい民族なのです。

残念ながら、この民族にも時の流れでしょうか、合理主義の波が押し寄せ、自然に対する畏怖と畏敬の念を失いかけてつつある現状を嘆くのは私一人でしょうか。

このたびの大災害といい、世界に起る大災害といい、学者先生の仰るとおり「想定外」の出来事だったのでしょうか。あれだけの犠牲を出しながら、果たして想定外だったと断言出来ることなのでしょうか。

因みに、広辞苑で畏怖と畏敬を調べてみました。

畏怖とは……恐れおののくこと

畏敬とは……かしこまり敬うこと

と定義してあります。

つい最近、ある新聞のコラムに日本を去られる韓国の有名大学教授が、日本人を斯くのごとく評しておられました。

「日本人が劣化しているように思う。自分の知る限りの日本人はどこを見ても読書をしてきた。だが今はどうだ。携帯電話、スマホの変換操作に夢中であるだけでなく、自己中な人種が増えすぎた。それだけならまだ我慢もしようが周囲に一切無関心なのが気にかかる。日本の思想文化をこよなく愛する隣人として、日本人の劣化が気になる。日本の将来が心配だ」と結んでおられました。

この心配が無駄であつて欲しいと思ひながら、当を得ているのが残念に思ひます。

奉務する稲荷神社でも老木の伐採によつて、祈祷所入り口の壁に「白いキツネ」が現れるようになりました。その現象は日時限定、しかも短時間なのです。物理的に証明しようとの声も上がりましたが、自然が恵んでくれるもの、神様が与えて下さった恵みを敢えて証明しなくてもとの合意があり、不思議現象として現在に至っております。（ホラ、この

新聞がその時の瞬間をとらえた記事です)

そこまでは、話題としてありがたいことですが、話が広がるにつれ、自己中族が蔓延し大変です。白いキツネの写真を撮ろうと混雑し自己中族になるのです。人様が呼んで迎えキツネ、まではありがたいことですが、天下無敵は困りものです。これは神社だけでなく、周りのお寺さんでも自己中族被害があるそうです。

ここで一寸だけ話の視点を変えますが。

私、縁あつて農学校で青春を謳歌いたしました。皆さんにも経験がありました。私どもが学んだ当時は、厳しさと楽しさが同居しておりました。忘れもしませんが旧校歌に「国のもといは農業と、代々の帝のみことのり、国開かれし大神の高きみ功績仰ぎつつ」と青春を謳歌し、闊歩したものです。

どこの学校でもそうでしょうが、名物先生と仰ぐ先生が多数おいででしょう。私の青春時代にも忘れ得ない名物先生にM先生が居られました。

自分の本業はそちのけ、西洋の思想文化と大和民族の思想文化ついてに昏々と熱弁をふるっておられたM先生を、卒業以来六十年余たつた今でも忘れられません。

先生の第一声は「いいか諸君。これはおれの自論だがな」と前置きして、「自然に対する

西洋の思想文化はな、人間様が自然より優位に立ち、自然を支配することなんだ。それに反して、大和民族の思想文化の根底はだな……森羅万象に神の宿りを感じ、神に祈り自然と共存共栄をすることなんだ。どうだ理解できたか。これ農学校に学ぶ者の原点だよ」熱弁に熱弁を重ねられていたのを忘れません。神に仕える身になって改めてこの教えを噛みしめている今日この頃です。

今年の賀状に、古事記撰上一三〇〇年、併せ先生の熱弁を思い起し墨書きしたのが「日本の原点『畏敬』」であります。

年賀状を受け取って下さった多くの同志から返礼が参りました。

檄文もあり、揶揄もありましたが、長老の返礼は「貴殿の心配する通り、今や大和民族は、合理主義の波に侵されすぎている。宗教界を含めて目覚めよう。互いに後期高齢と申す仲間入りをしているが、まだ遣り残したことがある筈です。頑張ろう」……とエールを頂きました。

太古の昔より天変地変は世の常、だが人類は知恵を絞り「備えあれば憂いなし」を信じ、実行し、日本列島を守ってきました。

自然は、人類に計り知れない恵みと知恵を与えてくれますが、甘くみると思いもつかな

い竹篋返しをする。このことを肝に銘じておきましょう。
これが心ある同志に届けた賀状に込めた一念です。

(大阪府 稲荷神社 撰宣)

社会と神道

山崎浩司

様々な人種がこの国で暮らし、多種多様の物が世の中に溢れ、精神面を重視する事よりも物理的な面で心を満たそうとしている。

世情は物欲的な商品が町を飾り、金銭を出せば、ひとまず何でも手に入れる事の出来る社会へと様相を変えている。さらに個人主義・核家族が進み、人と人の大切な心の絆の繋がりがさえ希薄化してきている。この例には、高齢者の孤独死などがあげられるであろう。またこの世情の変化は、徐々に人の心にも変化を与えている。特に最近よく耳にする、モンスターペアレントの出現である。これは学校などに自己中心ともいえる理不尽な要求をする親を指している。今回このモンスターペアレントを通して講話を進めさせて頂きたい。ではなぜこの様な人達が出現したのであろうか。

ここでモンスターペアレントが増えてきた原因の一つを考えてみると、初期の段階で、学校と保護者間のコミュニケーションの減少があるのではないだろうか。人は互いに会話

する中で、相手のことを知ろうとし、自分のことを知ってもらおうとする。そして多く会話をする中、多く触れ合う時間をもつことで関係が深まってゆき、相手のことが自分にとって信頼できる存在となりうるのである。ここで信頼しうる大事な存在となつてゆけば、当然相手からどう思われているかが気になり、自分が相手のことを信頼していると思つてゐるのだから、相手からも当然大事に思ってもらいたいし、信頼もしてほしいのである。だからこそ、相手に対する言葉や態度に気を使うようになると思われる。ゆえにコミュニケーションの減少は、関係性を疎遠にし、相手に対する不平不満へと変化し、要求と苦情になるのではないだろうか。

次に教師と保護者の各々役割から考えてみると、教師という役割は、保護者という役割によつて作られていると思われる。役割には、役割を果たすという義務が付随しているのである。ここで注目すべき点が、役割によつてのみ続けられている関係は、相手に対して義務を果たすことのみを要求するだけとなるのではないだろうか。

つまり、役割と義務によつてのみ規定された教師と保護者の関係の中で、親たちは自分たちと教師の関係は、学費を支払う側と支払われる側に分けて考え、支払っている親たちは、親としての家庭での子育て義務さえ学校側に責任転嫁し、子供の素行さえも教師側に

転嫁し、当然要求の内容に含まれる事であると考え、これらの親たちは要求を満たせないのは、学校や教師たちの義務の怠惰の所為だとし、文句を言える権利を持つ立場であると考えようになったのではないだろうか。これがモンスターペアレントの出現の理由の一つであると考えられる。

現在、日夜問わず様々なトラブルが起こり、テレビや新聞の記事を賑わせていますが、まさにコミュニケーションの減少により、他人との接触を極力避け、個人主義に走った結果、曖昧に物事を処理し、なあなあ主義が個人を物欲主義に推し進めている一因ではないだろうか。これから先もこの状態は進んで行き、私たちが幼い頃祖父や祖母また両親より学び、受け継いだ敬神崇祖の大切な教えも次第に若い日本人の心から薄れてゆくのを危惧している。

何よりもこの事態を收拾する大切な教えは、神道そのものである。神道は、御承知の通り、日本における信仰体系であり、日本固有の一神教ではない宗教である。山や川、滝、高木などの自然や自然現象を畏れ敬い、それらに八百万の神を見いだす多神教である。まさに生かされている個々の命の重みを身で感じ、教えて頂ける信仰である。自然は、一般的に言葉を発しませんが、四季の美しさは、我々の五感に刺激を与え、心を豊かにし、満

たしてくれます。さらに神様への祈りは、古代から現在、未来に亘るまで普遍であり、祈りの場所である神社また磐座では、古代と現在では様態が変われども、共通する純粹な祈りが、変わることなく捧げられています。何気なく、当たり前のような日常生活に根付いている慣習・風習こそが神道であり、今一度再認識する必要に迫られています。生かされている事に感謝する気持ちだが、他人との心の絆の繋がりを呼び覚まし、コミュニケーションの減少を和らげてくれるのではないでしょうか。

私の奉職する石鎚神社の石鎚信仰の教えには、古くから修祓・修行・鎮魂の三つの教えが有ります。修祓は、石鎚山へ登拝する前に、海や河、滝に入り、禊をして心身の不浄を除き、修行は、清浄を意味する白衣に身をつつんで登拝。頂上への参道には、試しの鎖、第一、第二、第三の鎖（合計距離、約230メートル）と御鎖の行場があり、この合計230メートルの御鎖を懸けます。最後の鎮魂は、登拝における命がけの行、無我の境地を過ぎて頂上に達すると、人間は自然と一体となり、神の心にあふれ、神人合一のすがすがしい境地になって心が鎮まります。常に自然の偉大なる氣に触れ、包まれ、しんどうい登拝の中で、改めて感じる自分の命の鼓動、最後に頂上社にたどり着いた時、神様に手を合わせられる喜びがあります。

現代社会に必要なのは、この神道の滾々^{ええ}と溢れる力であり、感謝の気持ちではないでしうか。鎮守の森の大切な意義が、見直されれば、現在の社会を修正し、素晴らしい方向へ導いて頂けると確信しています。

(愛媛県 石鎚神社 権禰宜)

河童の話

小林 晴美

日本の昔話や伝承には、色々な物が登場しますが、私は特に河童に興味を持っています。国学者である柳田国男氏は、「河童伝承は分類上、民間信仰中の霊異、つまり心意現象であり、信仰伝説中の妖怪に位置し、精霊と神と妖怪の諸相にわたっていて、日本民俗学上極めて重要な研究課題である」と発表されており河童研究の先駆者なのです。

河童にまつわる話は、北は北海道から南は沖縄に至る迄、あらゆる地域に残っており、河童の呼び名もガタロー・エンコ・かわら坊主・キジムナー等三百種以上あります。

まず河童と聞いて思い浮かぶのは、以前テレビのコマーシャルでよく見た黄桜酒造のあのユーモラスな河童達ではないでしょうか。しかし何故河童なのか私は不思議に思い、黄桜酒造へ直接電話をして聞いてみましたところ、先代の社長が水泳がとても好きで水泳イコール水、水イコール河童という事で河童が選ばれたそうなんです。当時「カッパ川太郎」や「かっぱ天国」で人気を博した清水昆に描いてもらうまでにはかなり通いつめた

言うお話しでした。

今でも色々な形でコマースシャル等に河童は登場いたしますが、テレビが無かった時代にどのようなして河童の姿を知ったのかを調べてみると、越中富山の薬売りが全国の家庭を巡り薬を販売する時、景品をおまけにつけましたが、子供には紙風船・大人には版画が配られました。版画には美人画・歌舞伎役者にまじって、河童図があつたそうです。各地で捕らえたと言う河童が九匹図入りで紹介されており、噂だけでしか知らなかつた河童の形態を知ることとなりました。この九匹の中には、利根川を本拠にして江戸まで出沒して廻つたといわれるネネコ（柊々子）や、ヒヨウスベといひまして、首から下を毛でおおわれた半人半獣のような形態をしているものや、全身をアリクイのように鎧でもまとつているように見える水虎の図もあつたのではないかと考えられます。この水虎ですが、青森県の津軽地方では「シッコサマ」と言い、河童の神として子供達を水難事故から守つてもらえるよう、あちらこちらに小祠を祀り篤く信仰したとの事で、婦人病にも靈驗があると考えられております。この水虎は、中国の漱水と言う所のほとりにもいて、天氣の良い日には砂の上で甲羅干しをしていると伝えられ、中国でも治水の神として新田開発地の堰のあたりに祀られているとのことです。又「ヒヨウスベ」というのは河童の異称で、奈良県櫻井市に

あります兵主神社の兵主が訛って「ヒヨウスベ」になったとする説があります。この神社の境内に相撲神社があり、相撲用語である「力水」は、力士が取り組みの前に口をすすぐ水で、心を清め力をつけるものとされますが、これは、河童は頭に水がある間は、めつぱう強いといわれることに関係があると伝わっているからです。このように河童と水とは切っても切れない関係ですが、お酒に関する話もありまして、悪さをしては村人に捕らえられ殺されそうになった河童を助けたおじいさんが、いくら飲んでも空にならない大きな酒徳利をお礼にもらったという話や、佐賀県の伊万里には創業三百年という老舗の松浦一酒造が今もありますが、ここに河童のミイラが酒蔵の一番奥の高い所に、透明のケースに納められ、神として祀られております。昭和二十八年に古い酒蔵の屋根裏で見つかったもので、「河伯」と表書きされた木箱の中に大切に納められていたそうで、肋骨は十六本あり両生類の骨組みをしており、頭には皿らしきものもあり、手の指は五本、足の指は三本でそれぞれ水かきのような物があるとのこと。この松浦家では代々後継ぎに恵まれず養子縁組により十六代まで続いてきたが、十七代の時にこの河童ミイラを発見し、大切にお祀りしたお蔭で、双子の男児に恵まれ現在に至っているとのこと、地元の人々も子宝の神として崇めているとのこと。このように河童も神として祀られている訳ですが、実際

に宮城県眞山町赤新田という所には、日本唯一『河童神社』が存在します。昔、喜々として遊んでいる河童に出会った沼左衛門という人が、商売繁昌を願って安政四年に建てたと伝えられており、婦人病に靈験があるとされています。

又、河童の聖地と呼ばれております岩手県は遠野に「かっぱ淵」という所があり、その側には、母河童が赤ちゃん河童に乳を含ませている母子河童像が安置されていて、今でも乳がよく出る事を願って乳房型の供え物をする習慣が残っているとのことです。この河童淵の近くに常堅寺というお寺がありまして、その寺の狛犬が河童なのです。実際に見てきましたが、頭に皿があり水がたまっております。なぜ河童なのか縁起があり、二百五十年程前この寺が火事にあつた時、河童が一生懸命皿から水をかけて消していたそうです。和尚さんがそれを見て「燃えるのも縁だ。そのままでよい」と河童の労を犒って消すことを止めたといひます。それで河童を狛犬にして守役にしたと伝わっております。所変わつて東京は台東区松が谷の曹源寺の境内に「波乗河童大明神」の堂宇があり、商売繁昌、縁結び、安産、芸道上達等に靈験があるそうで、「オン・カッパ・ヤ・ソワカ」と河童真言を二十一遍唱えれば、願いは必ず叶えられるという通称カッパ寺があります。

以上、民間信仰の中に生きている河童の話を主に取り上げてみましたが、他にも人間や

馬に悪さをしては捕えられ、二度と悪いことはしないと誓う。わび証文なるものを書いて許してもらう話、又接ぎ薬や膏薬・煎じ薬の製法を教えて許してもらう話。河童から安産の歌を教えてもらった女性が一生裕福に暮らしたという話。コロポックル（石器時代人のこと）で背丈が一三〇cm前後の小人で童のようでもある）が河原で生き延びていたので河原の童―すなわち河童という語を生み出したのではないかという話や、東南アジアからの渡来人等を河童と呼んだ話等、非常に広範囲に渡って多種多様な話が残っており調べれば調べる程おもしろい世界です。

全国には河童ファンも多くいらして河童の存在を信じ、その発見に努力している方もおられるとか。残念ながら私はそこまではなれそうもありませんが皆様方には、いかがお聞き頂けましたでしょうか。

（兵庫県 三石神社 権禰宜）

地神^{ぢじん}さんについて

河 野 誉 嗣

今日は、徳島県内至る所で見かける地神さんの、祭りの由来や意義についてお話したいと思います。

車で走っていると、神社の境内の片隅や、田んぼの畦などでよく見かけますこの地神さんは、農業や土地を守護する神様で、毎年春と秋の二回、春分と秋分の日から一番近い戊（つちのえ）の日を社日と呼んでお祭りをおこないます。社日は中国古来の祭日で、日本には奈良時代の天平年間西暦でいいますと七四〇年前後には伝わっていたとされています、農業を中心に生活する日本の祭り風土に適合されて広く浸透していったといわれています。従いまして、このお祭りは五穀の土台である土地の神様を祀り、春には苗の成長を祈り、秋には収穫を感謝する行事であります。

地神さんの形ですが、高さ約一メートル、幅約一メートル四方の石を積んだ土台の上に、高さ七十センチ・幅三十センチほどの五角形の石柱を建て、その各面に農業を守護する五

柱の神様の名が刻まれております。正面から天照大神・大己貴命・少彦名命・埴安媛命・倉稲魂命の神様が祀られております。

なかには例外もあるようで、まれに六角柱や八角柱、円柱などもあるようですが、石の品質や細工の違いは建立時のその土地の豊かさなどを表していると言われています。

また先ほど申しました、五柱の神様ですが、

○天照大神は、ご存じの通り伊勢の神宮にお祀りされております最も尊い太陽の神様で農業の産みの祖神。

○大己貴命と少彦名命は農業の発展に活躍した五穀の護り神。

○埴安媛命は、「ハニ」という言葉が古代の粘土を表す言葉で、土や肥料の祖神。

○倉稲魂命は、稲の神霊で、いわゆる稲荷神として民間で最も広く親しまれている五穀の祖神。

としてお祀りされておりますが、それぞれの神格から見ていただいても、農業に非常に係わりの深い神様がお祀りされている事がわかると思います。

徳島県内でも素朴な形での社日祭は古くから行われていたと思われますが、江戸時代に数度の大飢饉（享保・天明）に見舞われたのをきっかけに地神さんが広がることになりま

す。

寛政元年、西暦でいいますと一七八九年に徳島市伊賀町にある八幡神社の早雲家の先祖であります神官早雲古宝（ふるとみ）が、阿波藩十一代藩主蜂須賀治昭公に進言して徳島・淡路（当時淡路は阿波藩の所領）の庄屋に命じて五角の石塔を建立させ祭祀を行わせました。

今では、あまり想像がつかないかもしれませんが、藩の御触書によって農業政策として祭りを行わせていた事になり、それぐらい祭りというのは重要視され、藩の政策と深い関係にあったと思われます。

藩内には、村々に二千基余り建立されたそうですが、最近の調査で千二百八十二基の現存が確認されています。それによると、山間部に数多く、里に移行するとその数は半減し、徳島市内中心部になるとごく少ないといわれています。その理由として村毎に一基とされる地神さんは、山間部は尾根や谷に集落が分断され集落の規模が小さくなり密集度が増え、逆に平野部に移行すると集落の規模が大きくなり密集度が減ると言われております。また、武士の住む屋敷町や商人町、漁村には建立されていないようですので、このことから農村地帯特有の祭りということが分かります。

地神さんは、大飢饉や虫の害などに苦しむ当時の農民の方々の拠り所として信仰をふめながら数百年にわたって継承されてきましたが、現代の人々は何かと忙しく、地神さんも含め様々な祭りや地域の行事に触れる機会が少なくなっていると思います。

私は数年前に兵庫県の神社に勤めていたことがございます。その神社の先輩神職さんに言われた話を、地神さんの様な小さな祭りに来ると何時も思い出します。それは、阪神淡路大震災の話でした。「あの時には家屋が潰れ多くの人々が下敷きになり、一刻を争う状況で、すぐ助けに動けるのは難を逃れた近所の方々だけだった」と教えていただきました。私はこの話を聞いて、神社の祭りや、土地の習慣というのは本当によくできていると思いました。五穀の豊穡を祈り作物の収穫に感謝することは勿論ですが、ご近所の方々とちよくちよく顔を合わせ、お互いの事をよく知る機会を神様から与えられ、この小さな祭りを重ねることによって、様々な災害に力を合わせ、地域で対応できるシステムを知らず知らずに作っている。常日頃の何気ない出来事であっても、昔から継承されている事には非常に深い意義があり、神様の恵みと先人の知恵が沢山詰まっています。

この地神さんや神社の祭りを始め地域の伝統や習慣など、是非とも大切に続けていただき、一人でも多くの方に参加いただきたいと思います。

(徳島県 大御和神社 禰宜)

儂きゆえに

畠田明彦

最近パワースポットやパワーストーンという言葉をよく耳にします。大地の気や石が宿す波動が人間を浄化しパワーを与えるらしいのですが、その科学的分析はさておき、先人達が岩石に対して、可視的或いは理念的に何か不思議な力を感じ、そこに「神」を認め信仰してきた事は確かです。今日はこの岩石に纏わるお話をさせて頂きます。

我が国は、国土の約七〇％が山岳地帯であります。私たちの祖先は、この「山」を神々が天降る神奈備として崇めて参りました。そして山には依代である無数の樹木や岩がございます。中でも大きな岩は神がお座りになられる「磐座」として信仰の対象となってきたのです。

私の奉職致しております松尾大社にもこの磐座が現存しております。本殿の背後に標高二二三メートルの松尾山があり、その山頂付近に幅約二〇メートル、高さ約五メートルの巨石がございます。当社は勅命を奉じた秦忌寸都理により、大宝元年、西暦で申しますと

七〇一年に創建されましたが、それ以前はこの磐座が信仰の場でありました。松尾山は神体山ではありませんが、麓から尾根までは境内地で、平成十六年以前は神職しか立ち入れない禁足地でした。しかし、篤信の方々の要望もあり、御鎮座千三百年の記念事業の一環として「山開き」をする事となり、平成十五年六月、磐座登拝道整備工事を着工致しました。着工といっても業者に委託した訳ではありません。神輿の青年会や氏子青年会にもお手伝いを頂きましたが、殆ど神職の手作業で行いました。標高はたいした事はないのですが、獣道を人が通れるようにする訳ですから大変でした。用材にする枯れ木を伐採し、スコップで山肌を削り、急勾配の要所に土留めを造り、延べ二百数十段に及ぶ階段の基礎となる、重いコンクリート柱を担いで峻路を登るといった、肉体労働が得意な当社神職たちも、何時しか無口になるきつい作業でした。夏ならば、作業を終えると体重が二キロ近くダウンしていました。通常の社務の合間に作業日を決めて行いましたので、完成までほぼ一年を要しました。そして平成十六年七月十日、漸く山開き祭を斎行できました。以後年間千名前後の方が登拝されていますので、神職は月に一度、登拝道の巡視が義務付けられていますし、定期的に全員で補修作業を行っております。巡視はブローヤや熊手で清掃をしながら行いますので、少なくとも一時間、長い時は二時間を要します。しかし、息を切ら

せて磐座に到着したときの充足感と爽快感、まさに神の息吹を感じるその瞬間に心が安らぐのは私だけではないと思います。

このような磐座をはじめとする岩石信仰の場は全国にたくさん残っています。また内外の神話に、岩や石に纏わるものがありますので簡単に紹介します。

まず、古事記の石長比売神話です。

「降臨した天孫瓊々杵尊に国津神である大山祇神が、娘の木花咲耶姫とその姉の石長比売（磐長姫）を嫁がせる。しかし瓊々杵尊は醜い石長比売を帰してしまった。そこで大山祇神はこう言った。『私が二人の娘を嫁がせたのには意味があるのです。木花咲耶姫を妻にすれば、花が咲くようにお栄えになったでしょう。また石長比売を妻にすれば岩のようにビクともしない永遠の命を持つ事ができたでしょう。つまり、木花咲耶姫は繁栄の象徴として、石長比売は不変・長寿の象徴として嫁がせたのです。しかし、石長比売を送り帰したことにより、天孫の命は花のように儂いものとなるでしょう』。そして人は短命になった」というお話。

もう一つは、バナナ型神話と呼ばれるインドネシア・トラジャ族の神話。

「初め、天と地の間は近く、創造神が縄に食物を結んで天空から下ろしてくれていた。そ

れによつて人間は命を繋いでいた。ところがある日、創造神は石を下ろした。人間は『この石をどうしたら良いのか？何か他のものを下さい』と神に叫んだ。神は石を引き上げて、バナナを代わりに下ろしてきたので、走りよつてバナナを食べた。すると『お前たちはバナナを選んだから、お前たちの生命はバナナのようになるだろう。バナナの木が子供を持つと親の木は死んでしまう。そのように、お前たちは死に、お前たちの子供が後を継ぐだろう。もしもお前たちが石を選んでいたら、お前たちの生命は石のように恒久不変であつたらうに』と天の声がした』というお話。

何れも究極の二者択一であります。「短命の起源神話」と呼ばれる双方のお話、愚かな人間は本能のままに「美しい」或いは「美味しい」という「欲」を選んでしまい、永遠の象徴である「石」を失つた、つまり華やかで欲望を満たす「文明」を手に入れた事によつて、大切な命の源である「自然」を失つた、そう解釈ができるのではないのでしょうか。

インドネシアの神話は、決して凌駕してはならない唯一絶対神の永遠性と、愚かな人間の宿命を説いているだけのように入思えます。しかし日本の神話には、更にその奥に何か論ずるものがあるように感じるのです。瓊々杵尊は何故石長比売を帰したのか？「永遠は決して美しいものではない。いつか散る、その儚さゆえに人間は美しいのだ。限りある命だか

からこそ一生懸命に生きる。完璧でないからこそ、それを目指して努力する。限りある一つの肉体が減び、魂即ち心が次世代に受け継がれ、また次へと受け継がれる。これが繰り返され、一つの心を共有する民族が永遠となり、国が永遠となる。つまり人間は永遠なる神を仰ぎ、永遠なる自然を仰ぎ、永遠なる民族と国を築くために、その命ある限り精一杯生きる。それが人間に課せられた運命だ」反対にそう教えているように私には思えます。

機会があれば是非皆様方も、当社の磐座に登拝して、まずは心を洗い、清々しい気持ちで、儚い人生をどう生きるべきか、神様と対話されては如何でしょうか。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

お国自慢

社 信 大

四年に一度のスポーツの祭典、オリンピックが閉幕しました。柔道・水泳・体操・サッカーなど注目の競技が連日行われ、寝不足で辛い思いをされたのは私だけではないと思います。今大会では様々な競技で日本人の活躍が目立ち、メダル獲得総数三八は日本オリンピック史上最多という快挙であったようです。私も同じ日本人として誇りに思いますし、同じように感じた方も多いのではないのでしょうか。

しかし一方、開催国イギリスの週刊誌で三年前に書かれた記事の中に次のようなものがありました。

『母国への誇り、最も低い国は日本』

主要三三カ国中の調査で、自国への称賛・尊重・誇りが最も低いとされたのが日本であったようです。国を誇る気持もオリンピックの期間中だけというのでは大変残念であり、また外国からそのような評価を受けること自体が大変悲しいことではないのでしょうか。

ところで、私は滋賀県の出身です。近畿の方にとって滋賀県と申しますと、東海道が通っているながら京都・大阪・神戸のような大都市はなく、琵琶湖が有名、ゴルフ場とキャンプ場が豊富：「近場の田舎」といったイメージでしょうか。田舎者扱いをされることも多々ありまして、滋賀県民を指して「滋賀作」といった表現まであるくらいです。

東日本の方にとっては、実は滋賀県は「覚えにくい県ナンバー1」だそうです。九州の佐賀県と混同しやすい、大都市に紛れて忘れがち、全国的に有名な町がない、といったことが理由にあるようです。

滋賀県の地名、皆様はいくつご存じでしょうか。まず琵琶湖。そして県庁所在地大津。「ひこにゃん」でおなじみ彦根：これくらいではないでしょうか。

私の故郷はそれらからもほど遠い、琵琶湖を見るまでに車でも一時間かかります、日野町という町です。滋賀県の中でも特に山深く、滋賀作たちの間でも「田舎」と揶揄されるような土地です。

- ・人より猿をよく見る。

- ・駅を降りたら見渡す限り田んぼだった。

- ・道路は車よりもコンバイン優先。

・電気が通っていない。

・スッポコ谷。

…などなど、根も葉もないことばかりですが、誠に酷い言われようであります。

しかし、そんな日野町にも良いところがあります。

元々日野町は中世以降、近江日野商人の活躍によって繁栄した商業の町です。多くの日野商人が天秤棒一本での行商から財をなし、大阪や江戸に出て菓の行商や醸造業で店を構えました。「儉約と勤勉と先祖崇敬が商いの道である」との信条は、今に続く日野が誇るべき精神であります。

また、毎年五月三日に行われる「日野祭」は、八〇〇年以上の歴史を持つ町一番の祭礼です。早朝、各字が所有する十六基の「曳山」と呼ばれる山車が神社へ巡幸してまいります。全ての曳山が揃った頃に御本殿にて祭典。その後、百名あまりの袴姿の警護を付けたお稚児さんを先頭にして三基の神輿と神職がおよそ二キロ先の御旅所まで巡幸します。

巡幸道に当たる大通りの家々には表座敷に面した塀に「棧敷窓」と呼ばれる大きな窓があり、祭りの日にだけそれを開放し、親類を招いて行列を見物できるようになっています。実はこの巡幸、過去に一度中止が検討されたことがありました。大正時代、日野にも電気

が通り、電線が大通りにも張り巡らされて、曳山が通れなくなったのです。一時は渡御の中止と曳山の売却まで考えられたようですが、結局は曳山に対する愛着が厚く、電線のできる限り高くして、電柱も道路ではなく通り沿いの家屋の敷地内に設けることで、巡幸が可能になったそうです。

（この話の通り、日野に電気が通っていないというのは全くのデタラメです！）年に一度の祭りのために作られた町並みは今も変わることなく残っています。この祭りも町並みも、私は大好きですし、日野が他の市町村に誇る伝統と思っています。

また、先程は悪口を並べましたが、滋賀県にも良いところはたくさんあります。琵琶湖は近畿の水がめと称され、関西の約一四〇〇万人がこの水を利用しています。歴史遺産も数多く残っており、重要文化財以上の建築物保有数は全国第三位、国宝保有数は全国第五位であります。良質な近江牛を出荷し、米作りも盛ん、もちろん地酒も大変美味しゅうございます。

私自身、自然・歴史・文化にこれほど恵まれた県はないと自負しています。また、そんな滋賀県で育ったことを大変誇りに思っています。

どんなことにせよ、悪いところを見つけて非難するのは簡単なものです。しかし、それ

ばかりを気にして全体を卑下する必要はありません。むしろ良いところを見つけて、それを自信にして伸ばしてゆくことこそ大切なのではないのでしょうか。

一部報道を見ますと、日本の負の歴史ばかりを殊更にクローズアップするかのようなものも見受けられます。しかし、もちろん日本にも、他国に対して誇るべき点はたくさんあるはずです。

日本には、四季折々の変化に富んだ美しい自然があります。緑と水資源に恵まれ、地方ごとの風土に合った文化があります。自然を神として畏れ敬う「まつり」があります。

また、建国以来絶えることなく連綿と続く皇室があります。千年以上に亘って一つの御家が変わることなく一国を守り続けている、そんな国は日本以外にはありません。

さらに、日本人は『古事記』『日本書紀』に記された神代の時代から、「和」を貴んできた民族であります。昨年の東日本大震災の混乱下においても、被災された方々がパニックに陥ることもなく理性的に行動していたことは諸外国が称賛した通りです。

「愛国心」という言葉を用いると些か大袈裟に感じる方もおられるかも知れません。しかし、自分の生まれ育った土地への愛着「郷土愛」は誰しも感じておられると思います。幸いにもこの会場には、様々なご出身の方がいらっしやいます。まずはそれぞれ、「お国自慢」

をする中で、生まれた町を誇り、育った県を誇り、そして延いては日本を誇る気持を育てなければと思います。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

じじろの絆を

佐々木 美津子

私の故郷、陸前高田市は昨年三月十一日 二時四十六分に起きた東日本大震災により、八月二十五日現在死亡者一千五百五十五名、行方不明者二百五十五名と多くの人々が犠牲になりました。家族や親戚、友人知人を失い住むところもなく、市街地の全てが消え、失意の中にいました。「夢であってほしい」「夢であってほしい」と何度思ったことでしょうか。そんな絶望的な中で、先人達が残して下さいました、陸前高田市のシンボルだった白砂青松の景勝地として親しまれました高田松原、七万本の松の中で、津波に耐えた一本の松、その感動的な「生命力」と「幸運」は私たちを勇気づけて下さいました。

「奇跡の一本松」「希望の一本松」と名づけ陸前高田市の復興のシンボルになりました。

奇跡の一本松、あの日の出来事は生涯忘れることはないでしょう。

大地が大きくゆれた。

突然海の方こうの水平線が大きく盛り上がり、黒いけむりのようにもくもくと波が海辺

の松林をめがけておそいかかってきたのです。黒い大きな波は轟音をたてながらおそいかりました……。

どれ程時間がたったでしょう……。

海辺にあった松は、波でたおされ、流された松の木は折り重なり、あちこちに横たわり、七万本もあった松の木は、すべて死に絶えてしまったのです。

たった一本残った松の木は、どこを見ても仲間の姿は見えません。淋しい、悲しい気持ちでいっぱいだったでしょう。

私も死にたい、私もお父さん、お母さんのところに行きたい、友達のところに行きたいと泣いていたにちがいありません。

でも私を見た市民の皆さんは、「奇跡の一本松」「希望の一本松」として喜んでくださいました。

「そうだ私は仲間のみなさんから命をいただいた一本松、みなさんの分まで生きよう」命を伝えることに目覚めたのです。

そして、私を守ろうと市民のみなさんが立ち上がったのです。

まず、私を海水から守るために、根もとの囲りに水が入らないよう、大きく穴を掘り砂

を入れ替え、まわりをコンクリートで囲ってくださいました。

次に私の体の一部をとり接木がほどこされたのです。今、七本のかわいい子供が育っています。

又、仲間が残してくれたまつぼっくりが県の農業試験場の皆様の力により、かわいい芽を出し育っています。この五月には高田にもどり、高台の畑に植え替えされ、すくすく育っています。

この瓦礫の海岸をもう一度、あの美しい緑の松原に変えたいと、かわいい松の木の子供達が頑張っています。

でもこの頃、私の体は、だんだん元気がなくなってきたのです。あの震災によって大波を体中にかぶり、そして地盤沈下により海水まじりの水にしばらくつかったために根が弱ってきたのです。この春に新芽が茶色に変色し、立ち枯れになってきたのです。市民の皆様が一生懸命に、私を助けようと努力して下さったのに……。悲しい、悲しい、もう私の体は、これ以上生きるとは、むずかしくなってきました……。

死にかけて私を再び市民のみなさんをはじめ、全国のみなさんのあたたかい力を頂き、残してくれることになりました。

「奇跡の一本松」「希望の一本松」として・・・。

あの時、たおれた流木の松は多くの人々の力により、ふたたび生きています。

京都の清水寺に「高田松原流木松、大日如来坐像」として安置されています。この大日如来像は流木を合わせて制作され、全国各地を巡回、一万人を越える人々がノミを入れ最後に京都伝統工芸大の学生により仕上げられたものです。

長野県の善光寺の協力を得て、大人二体子供二体の「親子地藏」を犠牲者の慰霊とともに「行方不明者が一日も早く家族のもとに帰れるように」と願いをこめて、東京芸術大の学生と市民が心をこめて作りました。地元の普門寺に三体、善光寺に一体が安置されています。

その他木札、表札、しおり、ペンダント、数珠、等々いろいろ加工されて生まれかわっております。被災しても残った奇跡の一本松、多くの市民、全国の人々の絆により生まれかわった流木の松・・・。

海は「怖い」「憎い」多くの尊い命を奪い、陸前高田を一瞬にしてのみこみ・・・とあの日の海を憎みました。海を見るのもこわかったのです。海の近くを通ることもできませんでした。

ところが、ある日、高台の道から見た海は波が静かでキラキラ輝いており、一瞬にして私の心に震災前の高田松原が甦ったのです。

● 小学校の夏おばや姉達と泳いだ海水浴

● 中学校、松を題にして描いた市内松原展での金賞

● 高校、マラソンコースの松林を歯を食いしばって走った大会

● 桜貝に願いをたくした青春時代

● 家族で、地域の人々、友人と出かけて楽しんだ松原

たくさん、たくさんさんの思い出の松原、あの時の美しい松原は、今はないけれど人生と共に歩んだあの美しい松原は、私の心の中にくつきりと生きています。

たった一本残った「奇跡の一本松」「希望の一本松」と共に生きています。

水と空との連なれる

高田の海の八重の汐

轟とひびく松原に

はまなすの花 ほの赤し

(岩手県立高田高等学校 校歌)

（岩手県 天照御祖神社 宮司）

祈る

武智 正人

〔私にはもう、祈る事しか出来ません。ただ、今はもうそれしか出来ないのです。〕

ドラマで、困難に直面した主人公がよく言うセリフです。

しかしよく考えてみると、これではまるで「祈ること」とは何も出来ないが人がする事、出来ることの最後の最後に、出来ることが無くなって仕方ないから祈るとも感じてしまいます。

果たしてそうでしょうか。順序が違うと思うのです。祈るとは最後の手段ではないのです。

東日本大震災。未曾有の大災害でした。まさに、日本の国難でした。

そのとき、世界中から、祈りが奉げられた。

先ず最初に祈りが捧げられた。

PRAY FOR JAPAN

〔日本の皆さんが大変なときだから、我々は一生懸命に祈ります。今、日本が大切な時だ

から、心から祈ります。日本の為に祈ります。我々の祈る心を届けます。」

若い方も年配の方も、世界中の人が祈ってくれました。そのメッセージと写真。思い思いの姿とあり方で、真摯な視線で、その表情はとても美しく、その本を見て、またインターネットで世界中から送られる日本へのメッセージを見て、私は息を呑み、思わず涙が出ました。

男のくせに泣くとは何事かと自分を叱責しましたが、涙を止めることはできませんでした。

祈ることの素晴らしさ大切さを、この人たちは当然の事として知っている。

世界の人々が、日本に東北に友人が居たわけではないでしょう。

全ての人が日本へ東北へ来たことがあるわけではないでしょう。

知らない赤の他人へ知らない土地へのまったく素直な祈り、善意のエネルギーです。

この善意の祈りが届かないはずは無い。見返りを求めぬ祈りが、届かないはずは無い。

心からの善意の想いが、世界中から日本中から、彼の地へ届けられた。

目に見えない、しかしすさまじいほどの力の光の束が、届けられたように思うのです。

祈ることの当たり前さと素晴らしさ。世界中の人はそれを知っている。日本はどうなの

でしょう。目に見えない、具体的に成果が現れない、祈るといふ行為。

我々日本人は、祈る心を疎かにしていたのではないのでしょうか。

一時、日本は経済大国でした。物と金が溢れていた時代が有りました。

その時、全ての価値は、物と金。価値とは、それが全てでした。人の心さえ、お金で動かせると思ったかもしれません。

目に見えるもののみ価値を認め、見えないものには価値を認めなくなったのではないのでしょうか。

一つには戦後教育なのでしょう。神話の勉強は無く、宗教への説明も無く、神社仏閣は歴史の産物。見学は良いが参拝は信仰の自由への憲法違反。

信仰とは、年寄りがするもの。年寄りとは退職し暇な人のこと。元気な若い者は、働いて金を稼いで使って。バブル時期はそんな時代でしたし、現にその発言を何度も聞きました。

今回の講演大会にて村田先生の講義の中にも、まず祈れとお諭し戴きました。

石鎚神社の大先達からも「あんたらの祈りが足りん」とお叱りを戴きます。

祈ることの大切さを、大先輩たちはご存知なのに、それを受け取る側の心足らず

なのではないでしょうか。

人は、自身の幸せに鈍感な時があります。幸せに気が付かず、幸せが当たり前の事として捕らえられず、金と物に恵まれた人と比較し、まだ不十分だ、まだ足りないという周囲に不平不満を撒き散らします。

それでも或る時、自分が恵まれている事の幸せに気が付きます。しかし自身の幸せは自分で気付いて当たり前かも知れません。反対に、一番わかり難いのかも知れません。

人に訪れた幸せを、ああ良かったね、と素直に喜べることは、もつと幸せな事のかも知れません。なぜなら自身の損得ではないのですから。何より自分が幸せな状態だから。

ならば、人の幸せを作ることが出来たら人はもつと幸せになれるのではないのでしょうか。自分の利益にならないことを、人の喜ぶことを、人の幸せを、心から祈ることが出来たら、物や金よりも大きな、本当の幸せではないでしょうか。

陛下のお勤めの第一は日本と世界の平和を祈ること。それ故、世界で最も尊い方は天皇陛下とローマ法王とされ、血筋を受け継がれる皇室が尚も尊いとされる由縁ですが、これこそは誰であろう日本人が一番知らない事実でもあります。この説明には、特に若い方がきよとんとされます。

祈ることの重さ、大切さを、一人でも多くの人へ伝えていかなければならない時が来ているのだと思います。

東日本大震災の後、日本中そして世界中から寄せられる当地への「祈り」の姿。これによつて教えられた、祈りの素晴らしさ、崇高さを自分なりの言葉でお話したいと思いました。

（愛媛県 石鎚神社 権宮司）

玉串料

今 井 一 雄

（実際に玉串を手にして講話します。）

本日は、玉串料や初穂料の所以について申し上げます。これら何々料と申しますのは、この他に幣帛料、御供料、御榊料等がございます。神への御供え物の代表は、やはり初穂料や幣帛料でございましょう。

初穂とはその文字の如く初収穫された実りの稲穂であります。これら野菜や果物等全て初収穫された物は、実りの感謝を神に献上するという所以から神前に供えられて来ました。後に物から金額に代えて初穂料といい神社独特の総称となっております。

共に何々料と書くからには、そのものの使用料とか、そのものに代わるものと解釈していいかと思えます。

次いで玉串について説明致します。玉串奉奠とも申しておりますが、玉串は奉納、つまり神様に献上する物ではありません。神様に心を繋げる、神様からご神徳を頂く、その橋

渡しの役目を担うブリッジ、橋になつてもらう道具だと考えてください。

しかし、玉串は、単なる道具ではありません。修祓された物でなければ成りません。皆さんもご存知の通り、玉串には、紙の垂れと書いてシデと読みますが、この紙垂がつけられています。紙垂には、垂れる数から二垂、三垂、四垂・・・七垂、八垂とありますが、玉串にはこの四垂が使われております。そしてこの紙垂は、潔斎を勤めた神職が三カ所に鋭い刃物で切り口を入れ、左上から内回りで手前手前と折り重ねて四垂にして調製されます。これを紙を裁つとか神が立たれるということからカミタチといっております。この紙垂が櫛（飛驒では、櫛に似たショウゴという木の枝）の葉先に取り付けられ玉串となります。

それでは、これら清められた玉串の取扱い方、玉串の心について申し上げます。私達の氏神さまの前では、玉串を正面に立てて「お祈りの言葉」を称えて右回りで寝かせながら根本を神様の方に差し出す様にして備え、二礼二拍手一礼でお参りします。

神様のご神徳は、玉串の根本から紙垂の四垂、三垂、二垂、一垂、と階段を登る様に手元に伝わり、玉串の葉先から私達の心身に宿られるのです。

以上のことから、玉串の取扱いで大切なことは、玉串を積み重ねすぎたり、紙垂が垂れ

下がったままでは、ご神徳が伝わってこないということでもあります。

最後に一言、先ほど「お祈りの言葉」というお話をしましたが、祭礼は修祓にはじまり献饌、祝詞、玉串、雅楽奉納、撤饌と進められます。メインはやはり祝詞と玉串であります。玉串を備え、皆さんはどの様な思い、気持ちでお参りされているのでしょうか？お祈りの言葉、仏教には、「南無阿弥陀仏」とか「南妙法蓮華経」等とあります様に、神社にもお祈りの言葉というのがございます。皆さんもご存知の通り、「祓へ給へ清め給へ、守り給へ幸ひ給へ」でございます。本日は、お参り有難うございました。

（岐阜県 朝日大神宮 宮司）

日本三大祭のひとつを経験して

丸 茂 広 知

私は京都の八坂神社に奉職致しております。本日は八坂神社の祭礼であり、日本三大祭のひとつでもあります。祇園祭の奉仕を通じて、私の祭りに対して感じておりますことをお話しさせていただきます。

祇園祭は貞観十一年（八六九）に京の都に疫病が流行し、その際祇園の神を迎えて厄災の除去を祈ったのが始まりです。室町時代になりますと、町々の特色ある山鉦がつくられ、盛んな賑わいを見せてきました。応仁の乱（一四六七）により祭りも一時中絶しましたが、明応九年（一五〇〇）には再興し、現在まで千百余年の伝統を有する神事や行事が繰り広げられています。

祇園祭の特徴は七月一日から始まり三十一日までの一カ月に及ぶ壮大な祭礼です。その一カ月の間に山鉦巡行や稚児社参等、多くの神事が執り行われ、中でも神輿の神事が祭りの中核になります。私はこの神輿神事の迫力を通して毎年貴重な体験をさせていただいて

おります。

祭員として奉仕致します時は、三基の神輿と白法被を羽織った担ぎ手数百人の光景に感動し、祭りというものを肌で感じます。また、祭員以外の時は境内や御旅所で事故が起らないように警備を行うのですが、その際多くの参拝者や観光客とともに神輿振りの迫力に心打たれます。このような感動は日本全国どの祭りにも同じことが言えると思います。祭りを奉仕される方や携わる方は、先ほど述べました私の気持ちと同じ感動を得るのではないのでしょうか。ただ、唯一異なる点が日本三大祭のひとつであるということです。

日本人は「三大」と、よく色々なものを三つあげることが好きなようです。ですがこの「三大」の基準も定かではないようです。調べてみますと、「日本三大祭」にも同じことが言えるようでして、あげられる祭りも人それぞれ異なるようです。しかし、祇園祭は大抵名前があげられます。歴史があり、京都という地の利もあり、知名度は高いようです。そのようなことから、日本に数多くある祭りの中でも代表となる祭り、「日本三大祭」のひとつとしてお話をさせていただいております。

このような代表的な大きな祭りを経験したいと思っても、なかなかできるものではないと思います。私もご縁をいただいて、このような贅沢な体験をさせていただいております。

実際に経験致しますと、日本を代表する祭りだけありまして、大変過酷であります。京都の夏は暑く、況してや炎天下の中での奉仕になります。さらには一カ月という長い期間と事前の準備等も考えますと、人間どうしても憂いてしまいます。しかし、実際に祭りが始まり神輿の神事を目の当たりに致しますと、祭りというものは多くの人々の協同によって成り立ち、それぞれの役割に応じ、協力し合い、支え合っていることがよくわかります。日本人の祭り好きの心、祭りに対する心意気がマイナスの考えを吹き飛ばしてくれます。そして、何より千数百年続いている祭りに自分が携われているということに非常に喜びを感じます。

神道には「中今を生きる」という大切な教えがあることを学びました。私には親がいて、その親にも親がいるという、際限なく過去から現在まで繋がり、そして私の子供、孫へと続いていく、まさにその過去と未来の真ん中に位置するのが「中今」でございます。次代へ託す「中今」として奉仕すること、責任を持って生きること、今を大切に「生きる」とことが重要であるという教えです。とても素晴らしい考え方だと思っております。私も祇園祭を奉仕する際、連綿と続く長い歴史の中の、まさにその「中今」として参加できていることに有難さを感じます。

ただし、次世代への先導、祭りの異議や文化伝統の継承が課題や使命と考えたと、私如き一個人には大きな問題でございます。ですが、この古き良き風習を守りながら新しい時代を迎えていくことの大切さを感じ取り、迎える未来へと続くひとつの部分が私自身である意識しております。現在の私の奉仕ひとつひとつが、未来へと受け継がれてゆき、その先は無限に繋がっていく、そう考えただけでも熱い気持ちが入み上げてきます。

神輿が蔵の中におさまる際に、祭りの終る寂しさとともに、心して祇園祭を懸命に奉仕していきたい、いかなければならないと、思うところでございます。

この「中今」を意識しながら皆様も氏神様のお祭りに参加されますと、また違った感動を得られるのではないのでしょうか。

ご清聴ありがとうございました。

(京都府 八坂神社 権禰宜)

靖国さま・護国神社を「国民総氏子運動」に

佐 古 建 彦

今年の五月出雲市で開催された中国地区講話研修会に参加した時の事です。

松江護国神社禰宜工藤智恵さまの「命日祭」の講話に甚く感動致しました。彼女は遺族会、戦友会の方達の高齢化により、今までの様に組織で守りすることが難しく成って来た現状を淡々と心を込めて、訴えられたのです。

その日の懇親会で一言挨拶することになりましたので・・・工藤様のお話を拝借して、全国二万人の神職がまず英霊に「感謝の誠」を捧げるべき、そして氏子崇敬者の方々に靖国さま・護国神社は国民のみなさんで守りする「国民総氏子運動」の必要性を力強く申したのです。すると講師で出席されていた宮田修（元NHKアナウンサーで神職）さんが「同感です」と合いの手を入れて下さったのです。

宮田宮司と意気投合し、「言挙げ」しなければなりませんア・・・と美味しいお神酒で一献傾けながら、靖国さまに「言挙げ」の奉告に正式参拝に参りましょうと成ったのです。

六月二十日、当日は快晴、靖国さまの参道で待合、体を清めて社務所に通され、いよいよ念願の正式参拝。拝殿に入る前に手水舎で再度清めて、拝殿に参進「修祓」を受け、回廊をゆっくりと進み、本殿に恭しく厳肅に参進し、本殿前の正中に直立して、厳かな参拝。そして一分間の黙とう・・・「国民みなでお守りいたします」と「言挙げ」宣言を致しました。すると、私の人生で今まで感じたことの無い、表現の出来ない感動を受けたのです。

岩国に戻り、靖国さまの沢山の授与品を祖霊舎にお供えして、「父上、靖国さまにお参りしてきました」と奉告して、一息ついたところで『英霊の言の葉』の本を開いたのです、すると山口県東和町出身の城山光生さんのページに目が停まったのです。

朗読いたします。

「恩返し出来ず残念です」

陸軍主計中尉 城山光生命

第一四九飛行場大隊

昭和二十年七月一日

比島マニラ東方八洲山にて戦死

山口県東和町出身 二十四歳

前略、近く南方戦線飛行場大隊附けとして赴任の予定であります。素より生還は期して居ません。私の為には、先日あの降雪の中を面会に来て下さった日が最後となるかも知れません。

尤も軍人たる私は、決して淋しくはありませんが、只皆の胸中を察すると断腸の思ひで一杯です。これまでは我儘を何とも思はず過ごして来ましたが、身に沁みる愛情をもつて、育てて下された御両親の御苦労をしのべば、恩返しも出来ず残念です。

苟も皇軍将校たる者は、死すべき時は潔く死することを武人の嗜みとして居ります。

譬、遺骨の還らざる事あるとも、非難することなく、日本人としての矜持きやうじを持って下さい。

国の為命捧しますらをの 至誠をつけや一億の民

草々

実はこの東和町は周防大島で古事記に出てくる大島です、地元では屋代島と申して、神様やしろのお社の島なのです。私は四年前からこの東和町の有志の方たちと昔の大島を取り戻す

プロジェクトを立ち上げ、循環型農業・有機栽培の指導をしている所なのです。

地元の筏八幡宮の星野宮司さんに城山光生さんのお墓を探して下さいとお願いいたしました。するとその日に見つかり「先生私も一緒にお参りさせて頂きたい、実の弟さんも一緒に参りますので・・・」六月二十四日は周防大島総代会総会で講演をすることに成ったので、午前中にお墓参りをと考えたのです。当日は土砂ぶりの大雨でしたが、お墓参りの数分間は雨がピタリと止んだのです・・・不思議な事が起こるモノですね。

私は城山さまが私を東和町に呼んで下さったのだと思うのです。亡くなられた七月一日は私の誕生日なのです。その上何と、お墓は私が応援している畑、ミカン畑がすぐ側なのです。

循環型農業で海を綺麗にして、昔の様に美味しい魚を育て、安全な美味い特産品を作り、都会出た人達を呼び戻す運動をしている所なのですヨ！ 私は本当に驚きました！。

そろそろ時間がまいりました。皆さんにお願いがあるので、良く聴いて下さいネ。

昭和天皇・皇后さまの靖国さまへの最後の御親拝は昭和五十一年秋です。何故にお止めに成られたのか・・・？ A級戦犯がどうか・・・、中国・韓国が政治利用し騒ぐからとか・・・、ではない、と私は思うのです。

国民の大半が思想的に分断され二極化し、政治に利用され、国民が靖国問題で争う事を一番恐れられての判断と想います。それから、十年後の昭和六十一年終戦記念日に次のように歌われています。

この年のこの日にもまた靖国の　みやしろのことにうれひはふかし

日本には昔から「かむながらの国　事挙げせず」と争い事を避ける為に「言挙げ」しない美しい伝統があります。天皇・皇后さまはこの道をご選択されたと私は思っています。日本国民の半数以上が靖国さま、護国神社を正しく認識し、理解して、英霊に誠を尽せば、中国・韓国からの「イヤガラセ」も消えると思っています。それにはまず神職が実践してまいりますので、国民の皆様で靖国さま、護国神社を総氏子としてお守りしようでは有りませんか。以上が私のお願いです、宜しくお願い致します。

（山口県　宇津神社　宮司）

私の奉務する鹿児島神社のこと

池 上 晃 平

初めの自己紹介でも申しましたが、私は人生経験も少なく、神職歴も浅い人間です。それに加え人前で話をするのも苦手ですから、この課題の社頭講話もまともな内容にならないとは思いますが、つたない経験の中で話をさせて頂きます。

私の奉務する鹿児島神社は、地域の氏神様です。氏子区域内には、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校がいくつかあります。その中の小学校が総合学習の時間に、神社の話を聞きに來たり、個別に地域の事を調べたいと言って來たりしますが、その時の内容に近い話を少ししたいと思います。

まず、神社と言えば、南向きか東向きにたてられていることが一般的ですが、この氏神様は、真北を向いて建てられています。それは、神社が建てられた当時の地形にあったようです。今から千年以上昔のことを記した書物や地図によると、浦戸湾（高知市に入り込んだ湾）は現在よりずっと奥深く広く入り込んでいて、湾の中程の東に、山地が岬として

西側に突き出し、鹿兒の崎と言われていました。

神社は鹿兒の崎の西の端の方に建てられて、南側は高い磯で舟着場はなく、北側は入江になっていて舟着場が作られていたようです。ですから北の舟着場へ向けて建てられたと言われています。

まともに読んでいないので、恥ずかしいことですが、土佐日記の初めの方の「二十七日、大津より浦戸をさして」の段に出てくる大津は、現在の高知市大津乙の大津小学校のあたりにしく、小学校には「船出の地」の碑が建てられています。そして、「鹿兒の崎といふところに、」の鹿兒の崎とは、まさに大津乙の鹿兒山の鹿兒神社の社殿の近辺であることは間違いないと、史学の先生方の一致した見解です。その当時から現在と同じ社殿がたてられていたのではなく、小さな祠に神様が祀られていたくらいのものであったのではないかとのことです。

現在も神社としては小さな社殿で規模も小さいですが、大昔に海の神様、住吉の神様をお祀りしたのが始まりとされています。大海原へ航海に出る安全を祈り、航海を終えて帰り着いたお礼を申し上げるために海の出入口に、つまり北向きに祀られたそうです。

早場米の刈り取りが終わったばかりの広い田んぼと、密集した住宅や点在するマンショ

ン、今の様相を見ますと、あまり海のイメージはありません。しかし大津という地名、その中の氏子区域の地区名に昔の名残りがあります。例えば、北浦、舟戸、沖ノ前、田辺島、大津の隣で氏子区域の砂地、葛島などです。神社名の「かこ」も船乗り、水夫という意味です。神社の山裾の私共が社務所を兼ねて住んでいる地区も鹿兒と言います。船乗りの人々が多く住んでいた所から付いた地名であるというのが定説です。

神社のすぐ北側を東から西に流れる舟入川は、約三五〇年前に土佐藩山内家の家老だった野中兼山が、物資を運んだり田畑に水を引いたり、また排水路の役目のためにつくった人工の川です。川縁に立つと浦戸湾の河口近くであることがわかります。あまりきれいではありませんが、鯉や鮒に混じって海の河口を生息域とするボラも多く泳いでいますし、浦戸湾の潮の干満が、そのまま伝わってきて川の水位が変化します。海は全く見えませんが、台風で波浪警報が出ている場合などには、社殿の裏になる南側に太平洋の波の音が聞こえる時もあります。

海の底だった場所に何百年もの年月をかけ川が運んできた土や砂が積もって陸地となり、現在の氏子地区が出来ました。鹿兒山にお招きして、お鎮まり頂いた氏神様は、その移り変わりをずっと見守ってきたのだと思います。神社の境内地は、鹿兒山の大半を占めてい

て、色々な常緑樹が茂り、少し離れた所から見ると、こんもりとした鎮守の杜そのものです。それを維持管理していく事が私共神職の大事な務めであるという事も神社へ奉務を始めてから分かりました。年に二度、六月と十一月には、氏子組のある地区の氏子さん方も総出で境内大掃除のご奉仕をして下さいます。もちろん専門の方でないといけないことは、依頼もします。

先程触れました氏子組とは、氏子区域、つまり神様の領きます地に住まいをされている方は氏子さんですが、その中で地区ごとに毎年神社へ奉賛金を納めて戴いている方々の組織をいいます。地区のほぼ全戸の方が氏子組に入っている地区もあれば、そうでない地区もあります。その代表になる方が、地区の総代さん或いは責任役員さんになっていただいています。残念ながら、区域の全地区に氏子組がある訳ではありません。大小合わせて二十地区余りの組織で、小規模乍ら総代会もあります。神社の祭りの日は、責任役員さん、総代さんが参列して下さり、またご奉仕して下さいます。祭典は、宮司である祖父、禰宜職の伯母、そして権禰宜の私の三人でご奉仕します。例祭である秋祭は他に、三名位助勤の神職さんをお願いしての祭典となります。

神社において祭典が第一義であることは当然ですが、氏子さんのお祓いやご祈祷等も大

切です。特にお正月明け頃から始まる氏子さんのお家のお祓い（やぎとうと言っています）は大事な務めです。そのために、氏子さんご本人とお家を覚えることも大切です。氏子さんあつての氏神様です。先は、とてつもなく長いと思います。

（高知県 鹿兒神社 権禰宜）

一年目の神職として

近 藤 大 仁

この三月に國學院大學を卒業して四月から実家で権禰宜として奉職させていただいています。大学在籍中は古典や宗教知識などの坐学や祭典の作法の勉強やそれに加えて実習があり、伊勢神宮や石清水八幡宮などに行かせて頂きました。しかしそこでは研修中の身であるため実務的なことや参拝者と直接ふれあうということはありませんでした。神社で活動することと大学での勉強との決定的な違いは、やはり参拝者、地域の方々とのつながりです。本日は大学で学んだこと、またはこの五ヶ月という短い期間ではありますが神職一年目として感じたこと、そしてこれから何を大事にして神職としてやっていきたいかということをお話させていただきます。

まず朝境内を清掃しているときに参拝者の方と挨拶を交わします。神職として人と接するということは当たり前なのですが、大学では経験できないことであります。相手の顔を見て、ほほえみ、きちんと挨拶をする。何気ない挨拶にも人と人の結びつきがあり、ここ

にとっても大事なことがあるように私は感じました。神宮の研修にいったときに、そこでお世話になった神職さんが「人間の体は臓器などで考えていくと心というものは存在しません。ですが心というものは我々が常日頃から感じるように、目には見えないけれども確実に存在する。人の心と神さまは目には見えないけれども存在するという点で一緒だと私は考えております」と仰っていました。参拝者にまなざしを向け、ほほえみ、挨拶をする。これでは我々には目には見えないお互いの心が通じ合っているように感じます。それはご神前でも一緒で、神様の前に来て祈るということは、目には見えない神様のまなざしに会いに来ているということではないでしょうか。この神様のまなざしを感じる瞬間というのは、人と人の心が通じ合う瞬間と似ていると私は思います。だからこそきちんと参拝者の方にまなざしを向け挨拶をするということは、神社と人とが繋がるためにはとても重要なことであると学びました。

大学での講義で神職の使命とは神道の基本的な教えや考えが人々の胸の中に具体的にしみわたっていくことであると習いました。では一人の神職として神道の教えや考えを人々に伝えるためには具体的に何をしていくべきなのでしょう。

まず私が思いついたのは家庭祭祀が心を込めて行われるよう導くことでした。私の神社

で行われている家庭祭祀の中に地鎮祭や新築のお祓いなどの建築儀礼があります。我々にしてみれば何度も行う地鎮祭なのですが、その人にとっては人生に一度の大事な祭祀であります。だからこそうした一つ一つの祭りが本当に心を込めて行うことが大事であると思います。また神棚を祀っている家庭ではきちんと祀られるための手解きや、毎回家族の方が心をこめて祈っていただくようにしむけることも神職として必要なことであると思います。家庭の中でご両親が毎日神棚に手を合わせれば、子供は何も分からなくてもそれを見つつ成長し、ゆくゆくは神々や祖先や親を大事にする人間に育つかもしれません。こうした細かな努力を欠かさないことが神道の教えや考えを伝え、または神社の更なる発展になるのではないかと思います。

神道信仰を軸にした地域社会の発展も目標の一つであります。そのためには地域とのつながりを大事にしなければなりません。地域とのつながりを大事にするために神職は正しい知識を持つということも必要になります。その土地の郷土史を明らかにすることは、氏神の社が村人の生活にいかに重要な役割を果たしてきたのかを知ることでもあります。きちんとした知識を知るということは、良き文化伝統の保持・発展に繋がります。それだけではなく政教分離に対する知識を持つことも必要となってきます。伝統行事の保持と政

教分離の關係は、学校の子供への指導や神社祭りの在り方など、身近に問題が起きかねません。どこまでなら許されるか、どこから先は遠慮しなければならないのか。そうした許容範囲をはつきり知って活動の仕方を決めると同時に、氏子の人々や、身近な役場、学校などに明確に指導できなければなりません。こういったきちんとした知識を身につけることは、神職と地域の方々、延いては神様と地域の方々がつながっていくために必要であると思います。

お互いの心を大事にする挨拶を欠かさないこと、大学を出た後も自ら学び正しい知識を得ること、神社の発展のために参拝者の方に心のこもった対応をし、細かな努力をかかさないうこと、以上のことを日々大事にして神職一年目として活動していきたいと思っています。

(愛媛県 瀧神社 禰宜)

神宮大麻と氏神さまのお神札をおまつりしましょう

塩 崎 昇

今日は当社、神宮大麻暦頒布始奉告祭にご参列頂き誠にありがとうございました。

今日ご参列のみなさんのお家にはそれぞれ神棚があり、そこにはお伊勢さんの神宮大麻と当社の御神札がお祭りされていると思います。そのほか、お参りして受けてこられた神社の御神札や、破魔矢などの縁起物が神棚に飾られていると思います。しかし最近では、神棚のないご家庭が多くて、一体でも多くお札を頒布するにもその手だてがむづかしく、なかなか大変だろうと思います。

神棚がないご家庭はいったいどういった事情があるのでしょうか。お聞きすると、そこには、神棚をまつる場所がないとか、おまつりの仕方がわからない、毎日のお世話が大変でかえって粗末になるからといったことが理由にあるようです。

しかし、困ったときに神頼みをしたいという心情は誰にでもあるようで、神や仏を信じていないということではないようです。しかし、一方で「困ったときの神頼み」では、か

えって良くないという考えも多くの人が持つているようです。

神社の願い絵馬や七夕の短冊の願い事を見ると色んな物があります。子供の字で「サッカー選手になれますように」（子供のあこがれだし、親にとっても健康で元気に育って欲しいという願いの表われでとても微笑ましい。）「アバレンジャーになりたい」（テレビの戦隊ヒーロー。かわいい願い事だが、神さまにお願いするのはちよつと？）「お金もちになれますように」（子供にしてはずいぶん俗っぽいお願い事だなア？）

短冊に自由にお願い事を書かせると、どうせこの際なら何でも書いてやろうと言うことなんでしょうか、あきれかえるようなお願い事も時折見られます。

しかし、そんなときに親なり家族が、「欲張ってはだめ」とか、「お願い事は一つだけよ」とか、「健康でありますように」とか、「どうかお守下さい」とか、欲のない祈りをしなさいと言うことを教えてやって欲しいと思います。

私が結婚して新居を構えたとき、神棚を新しくしてお神札をおまつりました。これから新しい生活がスタートします。「夫婦健康で幸せに暮らせますように」はじめて家内安全をお祈りしたように思います。今思い起こせば、それまでは自分自身の願望を願っていたが、夫婦となれば自分の願望よりも妻や家族全体のことを祈るようになるものです。やが

て子供が生まれ、子供の成長のことなど日々の感謝の祈りと共に、家族に対する祈りが増えてまいります。「自分のこと以外の何かをお祈りする」。実はこのことによって、自分の心が満たされ豊かになったような気がします。

家に神棚をまつるきっかけは、やはり「祈る」ということではないでしょうか。困ったときの神頼みもきっかけの一つ。結婚しました。はじめて子供が生まれました。病氣になってしまった。子供が高校や大学に受験する。など、いままでおまつりしていなかったけど、この際、神さまにおすがりをしたい。お神札をいただいて、粗末にならないところにそつとおまつりして、日々の感謝と幸せをお祈りしていただきたいと思います。毎日のお供えやお世話が大変とか考えずに、まず、神さまをお迎えしてください。そうすれば、きっとその方は家の中でおまつりするのにふさわしい場所を探し、その場所を自ずときれいに片付けるでしょう。そういう心が芽生えてくるものです。そして、お祭りをしているとやがて良いことが起こります。良いことがあれば、神さまに感謝するし、お水でも供えようかという気持ちになります。そういう心がやがて信仰に結びついてゆくんです。

みなさんには是非「あんたとも、神さんまつんなア。毎日感謝して手エあわせたら、やっぱりええわ、やっぱり違うと思う」と、ご近所の方にお勧め頂きたいと思います。神

棚に手をあわせて拝めば、気持ちの切り替えができます、安心して心が満たされます。そんな暮らしぶりを是非みなさんから教えてあげてください。

神棚におまつりする御札は、伊勢神宮の「神宮大麻」と氏神さまの御神札です。お伊勢さんは、私たち皇室のご祖神であり、日本人の総氏神さま、我が国の守り神さまです。お伊勢さんをおまつりするということは、まずこの国をおはじめになり民と共に世を造り固め成してこられた皇室の御祖神をおまつりし、皆が国の安泰を祈念するという、日本人としての正しい心のあり方を示すということなんです。

そして、氏神さまは地域のまもり神さまです。地域の安泰と家族の幸せ、そして自分の事をお祈りして下さい。私たちの家はみな地域とつながっています。家族のことを祈ると、日々平穏に暮らしていることへの感謝の念がわいてまいります。自分のこと以外に、他者のこと、国のこと地域のことをお祈りすると、心が満たされ豊かになります。

まさに、その志は神の大御心の如く……。お伊勢さんと氏神さまをおまつりすることは、国やふるさとを愛する心と、他者を思いやる心を同時にはぐくみます。そうした清らかな人にこそ、神さまが、みたまのふゆをお授け下さいます。

そして、崇敬する神社の御札をおまつりしましょう。若い人や神棚をおまつりしていな

い人には良いきつかけとなります。受験や就職、縁結びなど、願をかけてお参りした神社の御神札をいただいて、お伊勢さん、氏神様と共にまつりしてください。

そして、神さまに、自分が進むべき道を照らして下さい。お導きください。とお祈り下さい。そして、見事、祈願成就すれば遠方であっても必ずお礼参りをしてください。そうすれば、神恩感謝の気持ちが生えてまいります。

年末にお家の大掃除、神棚の御神札も新しくいたします。そして、清々しい新年を迎えましょう。こうした日本のうるわしい伝統文化を絶やさぬようみなさんと一緒にがんばってゆきたいと思えます。どうか、本年も変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。上げてご挨拶に代えさせて頂きます。

(和歌山県 伊勢部柿本神社 宮司)

御霊について

小松 毅

只今、五十日の御霊慰めみたまなぐめの祭、とどこおりなく御奉仕いたしました。それでは、今日お祀りしております御霊について、解らない方もいらつしやると思いますのでお話をさせていただきます。

高知県は全国でも一番、神道での葬祭が多い所でございます。ですので馴染みのある方も多いと思いますが、最近では仏式も多いですので混同されていらつしやる方もいます。

仏での葬儀は送り出したり、新しい出発であったり、現世との決別であったり、来世を願う儀式であるようです。神道では死は悲しみであり、共に家族、親族、友達が手を取り合い乗り越えて受け止めていく、今生きている人たちとの繋がりによって行う現世の祭りです。

死の悲しみはとても強く、神道では人生において一番の穢れであると考えられております。

では何が穢れるのか？ それは御霊でございます。

神社では様々に神様の御霊、神霊を御祀りしております。あらゆる人間、生物は神様の御霊を分けていただき生まれてまいります。つまり皆、神様の子供でございます。

その神聖な御霊を受け継いでいる我々の生命は、本来清く、明るいものです。

私たちはまず人生儀礼の一つ、出産を経てこの世に誕生いたします。

出産を経験された方は解かると思いますが、一番穢れない綺麗な御霊、神様より生まれ、先祖代々分けあたえ繋がってきた目に見えない御霊の存在をはつきりと感じることができると思います。

私たちの中にある御霊は三歳、五歳、七歳と歳を重ね、生きる間に色々な罪や穢れ、災により御霊本来の清らかさを失ってしまうことがあります。ですから我々日本人は人生の節々に厄を祓い、四季の折々にお祭りなどで祓い清めながら本来の清らかな身に立ち返ることをいたします。

やがて結婚や縁をむすんで自分より分けあたえられた御霊をもって新しい命が誕生し繋がっていくわけです。

そしてやがては誰しもが死を迎えます。死後御霊は分かれて、一つは神様のいらっしや

います高天原に昇られ、一つは現世にとどまります。また一つはお墓に御遺体と共に鎮まります。こうしていくつの分御霊となられて先祖の神になられます。

しかし、先ほども申しましたとおり、死とはとても悲しいものであり、それゆえに死の穢れとはとても強いものです。ですから一年、三年、五年と祓い清め御霊を慰め祀り、ゆつくりと死の穢れを取り除き、五十年を経てようやく先祖の神として昇ることができるようになります。

今日、五十日を過ぎまして、服祓い、忌み明けの清祓いをいたしました。また同時に皆様の御霊を祓い清めて元の身に立ち返りますようにお祈りをいたしました。今日より神社への参拝をはじめお祝い事への参加もいつも通りできます。しかしながら五十日で悲しみが癒えるはずもなく、穢れとは「氣枯れ」氣が枯れるとも書くそうですが、まさしく氣を落とし、枯れてしまうような状態でございますので、一年、三年、五年と続く御霊慰めの祭りを通し、今よりも一層手を取り合い助け合っていく、それが神道の教えでございます。

こうして決まった年に御霊にお越しいただいてお祭りを致しますのは、皆様の中にある先祖代々の御霊に対する敬意と感謝の気持ちでございます。それをお伝えし御霊を慰める祭りでございます。

御霊を大切にし、清く明るく生きること、なによりも美しく生きることが日本人の、あるいは神道の理念でございます。

どうかその気持ちの子孫代々伝えていただきますようお願い致します。
長くなりましたが、以上、五十日御霊慰めの儀とり納め致します。

(高知県 本宮神社 禰宜)

会社年始安全祈願祭

梶 田 辰 則

明けましておめでとうございます。ただ今、一年の無事を願う安全祈願祭を滞りなく執り納めました。御社に於かれましては新しく鳥栖の地をお選びになり、昨年三月竣工式をめでたく終えまして、その後も節目節目の月に御社にて三回、安全祈願祭をご奉仕させていただきます。

さて、当社での安全祈願は初めてですので、ご由緒について説明をさせていただきます。御祭神は中央に大己貴命、右に住吉大神、左に八幡大神、中央の下に春日大神を御祀りしております。大己貴命といってもピンとこないと思いますが、大己貴の「むち」とは、貴いという字を当ててあり八百万の神の中でも三貴神といわれる貴い神、国譲りで有名な出雲大社の大国主大神のことです。御創建年代は不詳ですが、一三〇〇年前の和銅五年（西暦七一三年）頃、諸国に命じて国々の地名や土地の産物などを記して朝廷に奉らしめた地誌「肥前風土記」によれば、長岡の神の社。郡の東に在り。第十二代景行天皇（西暦七一

年即位）高羅の行宮（高良大社）よりお還りの途中、酒殿の泉にてお食事をされた時に、お召しの鎧が光り輝くので占わせたところ、お供の占い師は「この土地の神が御鎧を欲しがっています」と申したので天皇は「実に然らば、神の社に納め奉らむ。永き世の財と為るべし」と仰せられて、それで永世の社となったのですが、後の人は改めて長岡の社と称えています。それから約千年後、永保三年（西暦一〇八三年）梶田信平この方は私のご先祖ですが、山城國男山石清水八幡宮より八幡大神の御分霊を頂き、平安時代に成立の奈良田庄に仮殿を建てて奉り、翌年、藤河瀬、今の九州自動車道鳥栖ジャンクション付近に社殿を建てて遷座し、奈良田八幡宮と改称、明治四年（西暦一八七一年）まで続きましたが、肥前風土記にみえる鎧を欲した「永世の神の社」に倣い、社名を永世神社と改めました。創建後五度も名称を変えている神社は、他にあまり無いと思います。又社地も藤河瀬から、昭和四五年（西暦一九七〇年）現在の永吉町禰宜ノ隈に遷座したもので、私は昭和の国譲りといっております。長岡の神「永世の神」は、通行を管理し国土を開発する神として崇められ、この地域は古代から交通の要衝とされており、北は福岡、南は鹿児島、西は長崎、東は大分への分岐点で、それが旧社地であり、それに目をつけた政府が、日本列島改造論の名のもとに、九州自動車道鳥栖ジャンクションを建設し、国土開発の神である大己貴命

は、致し方ないと社地を国に譲り今では九州の流通都市として発展し、多くの企業が進出し、又当神社にも年始のご参拝を頂いております。御社に於かれましてもそういった意味で、鳥栖の地をお選びになったのではないでしょう。どうか当神社のように永きに亘つて榮えていかれますことを心より祈念いたしまして、ご挨拶に代えさせていただきます。本日は御参拝ありがとうございました。

(佐賀県 永世神社 宮司)

お宮について

根 石 俊 明

社家では無い私が「大社國學館」を卒業させて頂き、二十五年を迎えようとしています。その間、岡山県護国神社・岡山県神社庁に奉職させて頂きましたが、ご縁を頂き平成九年に現在本務の「御崎宮」おんさきぐうの宮司に就任させて頂きました。宮司として十五年の節目に当たり、これまでを振り返りつつ、今後も氏子崇敬者の方々のご協力を賜りつつお宮の発展を期したいと思います。

宮司就任当初は、護国神社も兼務しておりましたので、恒例祭典のみ奉仕させて頂いておりましたが、宮司として十年目の平成十九年に総代と協議して、午前九時～午後四時までの毎日をお宮で奉仕する事となりました。

戦後は宮司がたびたび変わり、本来氏子数も千戸あまりの旧郷社であるものの、私の就任当初はお参りもほとんど無く、ある意味「寂れた感の神社」でした。

私も、就任当初は護国神社勤めなどもあり、恒例祭典のみの奉仕に甘んじており、日供

もおろそかになっていましたが、あるとき護国神社の宮司より「日供」の重要性と、少しでも時間があれば境内の清掃をした方が良いとのご指導を頂き、思いを新たにしております。

不思議なもので、就任当初よりたびたび神社でトラブルが起こり、嫌がおうにも神社に引つ張られていた事もあり、宮司にズバリと指摘された事で「やはり・・・」という、誠に気恥ずかしい思いにかられました。

以来、境内の清掃に始まり、毎日の日供、御幣や紙垂、しめ縄や鈴尾の新調、水が涸れた手水舎の復活、新調、傷んだ箇所への補修などなど、山積していた事をこなし、恒例祭典へのお参りも、近くの子供会十数名が二、三回にわけてお参りされるだけでしたので、「祭祀舞・獅子舞」を取り入れたり、夏祭りには「茅の輪」を作り、正月には甘酒やお菓子の接待をし、境内にテントを建て、バイトの巫女を頼んで各種の授与品を出したり、巨大な干支の張り子を自ら作製もしました。

気がつけば、参拝者も毎年右肩上がりに増えて、初め冷ややかだった周囲の反応も次第に好意的なものへと変わっていたのであります。

神社には、当然神様が鎮座されている。しかしながら、私は神社があっても神様が不在

となつてゐるお宮があるのではないかと思います。まさしくかつての当社がその状態であつたように。熱心に神さまを思う宮司・総代・参拝者の方々の思いがあつてこそ、神様は常にお宮に鎮座されるのではないでしようか？

毎年、近くの用水路脇の灯籠前で「水神祭」が行われています。ある年、その灯籠が交通の妨げになるということで、移転しても良いのか？という相談がありました。

もちろん、移転はやむを得ない事でしたが、「灯籠などはただの明かりをつける工作物だから動かしても罰は当たらない」という話がありました。その事について、世話役の方が本当にそうなのかを相談に來られたのです。

長年にわたつてその灯籠に向かつて水神祭を行つてきたのです。確かに本来は明かりを灯すための単なる工作物でしょう。しかしながら、「木のウロ（穴）にも神宿る」といわれる通り、その灯籠に対する人々の思いは違うのであります。確かに水の神様が宿つておられます。わたしは、移転希望の方にその灯籠はただの灯籠ではなく「神様が宿つた灯籠」である事を理解して頂くように申し上げ、移転の安全祈願祭の折にも地域の人々にその話をさせて頂きました。

つまり、神様がおられるからお祭りをするというのではなく「我々の思いに答えて神様

がお宿り下さるのである」という事が重要なのです。

「念ずれば華開く」と申しますが、どうかこれからも皆様ともどもこの「御崎宮」に思いや願いを込めて頂き、「神様」にしっかりと振り向いて頂けるお宮となる事を願います。

まだまだ、発展途上であります。私も宮司としてこの身を捧げて尽力させて頂きますが、何とぞ皆様方におかれましても、ご理解・ご協力の程節にお願い申し上げます。

(岡山県 御崎宮 宮司)

修理固成すと云う事つくりかためな

中 木 屋 豊

今年三月五日の事です。私は兼務宮司を務める、とある神社の春祭りを奉仕しました。この神社では総代さんに、神饌の献撤をお手伝いいただくことが決まっています。この日も三人に手伝っていただきました。私も含めると四人ですから、三方の向きは当然後ろ向きに置いてあります。この時、表で並べてその後に、後ろ向きにすれば間違わなかったのですが、大根の向きを間違えていました。

修祓・一拝・開扉・献饌と進み、初めて気付きましたが、上に乗っている野菜が多く、向きを変えることができませんでした。続く祝詞奏上の後で、ひたすらお詫び申し上げました。大変恐懼の極みでありました。この後玉串奉奠をして、撤饌・閉扉をしないで一拝をして祭りを終了しました。

祭典後の話として、実は撤饌の省略は、私が大根の向きを間違えた事をひたすら謝っていたと、お話ししました。そして修祓の祓詞の意味について、話をいたしました。伊佐那岐

大神が、橘の小戸の阿波岐原で、なぜ褻褻をされる事になったのか。実は神様も間違いをされる、伊佐那美大神に会うため黄泉の国に行かれた。醜き国に行かれたことを反省されると、その間違いを直す神直毘神、次に大直毘神がお生まれになります。最後に左の眼を洗うと天照大神、右の眼を洗うと月読大神、御鼻を洗われると建速須佐之男尊がお生まれになり、尊い三柱の神を得たと大いに喜ばれます。

神代の時代から、おおらかと云うか寛容と云うか、諸々の罪や穢れを知らず知らずに、犯してしまうので、三貴子の一人須佐乃男尊は、この後高天原で非常に怒られる悪さを、何度も行い地上に追放となります。そして反省して、国生み神話に語られている如く、良い事跡を残され、全国に祀られる事になります。『人間では、失敗や間違いは当たり前のことです。』開き直るのではなく素直にそれを認めることが大事と説いているのです。『常に反省をして清浄を保ちましょう。』そう申し上げると参列の方々は、とても納得して下さいました。内心ホッとして祭りを終了する事が出来ました。

しかしその後、私にはとんでもない事が起きたのです。数日経った日の事です。こんなにも鮮明に覚えているはずの出来事が、思い出せなかったのです。いつものように五時半過ぎに目が覚めました。今日が何月何日なのか分からないのです。「すると五日のお祭りは

したのか」と、妻に聞きました。記憶が戻るまで約四十分かかりました。そういえば、最近道がわからなくて、正確には思い出せない事もありました。認知症の始まりなのか、ひどく心配になってきました。こどもたちも心配してくれました。脳波の診断も受けました。異常はありません。脳外科の先生の診断は、老人性の癲癇だろうと云われました。意識が無くなったりはしないが、記憶が飛んだりするのだそうです。今そのための薬を飲みだしました。症状はあらわれていませんので、一安心しています。

自分では大丈夫だと思っても、心身ともに老化現象のようなものが、進行しているでしょう。夏場の境内の草払いも、年々こたえるようになりました。無理も出来ません。しかし嬉しい事もありました。人間ドックでウエストが六センチも減っていたのです。もちろん体重も五キロ少なくなっていました。二年間刈払機での作業が、多くなった事かなせる業です。それでも悪い長い生活習慣が、脂肪肝や腎のう胞、動脈硬化の疑いなど、様々な指摘を受ける結果となりました。どれもこれも、お酒の呑み過ぎの結果でしょう、と云われました。むべなるかなです。

私の本務神社稲荷神社は、第十三期の教化モデル神社の指定を受けています。国指定の、ヤッコソウ発生の地です。神道の自然観である鎮守の杜に親しみつつ、青少年の健全育成

の活動を進めています。健全な肉体に健全な精神が宿ると云います。少し不健全になった肉体を反省しながら、これからの活動を、進めなさいと云う、神様からの教えであろうと思います。

歳と共に老化が進む体や心、修理が必要です。依って立つ位置を、確認して強固なものにしなければなりません。長年培ってきた技や、経験が支えてくれます。伊佐那岐大神の故事も、これまでたくさん研修会に、参加して教えて頂きました。自ら学び会得する事が、今後とも大切なのではないでしょうか。修理固成すと云う事は、一人一人が実践に努め、少しでもこの世の中を良くすることだと思います。一緒に実践に努めましょう。

(鹿児島県 稲荷神社 宮司)

神社とは

村田 力

私は神職となってまだ一年という新前であります。今日は新前なりに学び感じた、神社とは何かということについてお話し致します。

私の知り合いの中には、神社とお寺の違いが分からない人が時々おります。そんな人達でも正月には神社に初詣でに出かけたり、初宮参りや七五三、夏祭りなど神社に足を運ぶ機会は少なからずあると思います。

そもそも神社とは何でしょう。それは、神々を祀る為に設けられた建物、または施設の総称であり、神様が鎮座する神聖な場所であり、祭りによって神様に祈願したり感謝するところであると思います。

まず神社に来て一番最初に目に付くのが鳥居です。鳥居は神社の神聖な場所と人間が住む俗界との区別、聖域への入り口を示しています。一説には昔、天照大神が天の岩戸に御隠れになった際に、神々が天照大神のお出ましを願って鶏を止まり木に止まらせて鳴かせ

たのが鳥居の起源だともいわれております。

次に神様を拝む前には、まず心と身体を清めなくてははいけません。神道はとくに清浄を尊ぶので、手水舎で手を洗い口を濯ぐことで心身を清めます。略式の禊と言えます。そして参道を通って拝殿に向かいますが、参道の中央は正中といい、神様のお通りになる道なので、この正中を避けて端を歩くのが礼儀となっています。

拝殿とは、参拝者がお祓いを受け様々な祈願をする建物で、その奥に当社では神様に色々な物を供えたり祭祀を行う幣殿があります。さらに一番奥に建っているのが本殿です。本殿には御祭神の御神体が祀られています。

日本には八百万の神がいらっしゃると言われるように、古くから森羅万象、太陽・月・海・川・山・森などの宇宙間に存在する全てのものに神性を認め崇拜してきました。そういった自然信仰に育まれてきたことによって、その形態が今もお、神道の中に色濃く残っています。

神は姿の见えない存在であり、日々感謝の念を持って敬わなければなりません。そこで人々は神様を丁重にお迎えしてもてなす祭を奉仕して参りました。祭りは季節や農作業の節目に行われることが多く、春には豊作祈願をし、夏には流行り病の退散を祈願し、秋に

は収穫を感謝したりします。

私は高知県旧東津野村、現在の津野町に生まれ育ちました。私の村には、それぞれの地域を守護する神社があり、各神社には必ず御神楽を舞う為の約四メートル四方の舞殿があります。延喜十三年、西暦九百十三年から現代まで、千年以上途切れることなく受け継がれてきた津野山古式神楽が今も行われています。私は御神楽の伝統を引き継ぐ舞手でもあります。御神楽はこの世がたとえ一握りの土になろうとも舞い続けるという神様との約束であり、地域の宝であります。毎年、秋祭りには無病息災、請願成就を祈願し、五穀豊穣を感謝して祝い、そして来年もまたよい年であるようにと願い奉納します。御神楽は日本の神話である古事記を劇化しており、その舞手は舞太夫と呼ばれています。面をつけて千年以上伝えられてきた所作をとる姿に、古事記の世界を垣間見ることができます。

私の村での神社とは、地域の人々が舞殿を囲み御神楽の奉納を通じて神様の存在を感じる場所であり、それを通じて地域の先輩方と交流し、風習や伝統を引き継ぐ場所だと思います。

神社の境内に育つ大きな木々や苔むした岩に囲まれ、そして吹きさらしの木造の古いお社の中で、御神楽を観ながら大人も子供も千年前と変わらぬ時を過ごすのです。それは日

常とかけ離れた時間、神様の存在を感じる時間でもあります。神様を感じる、それは畏れを感じるといふことと私はとらえております。

生活の中には人智では及ばない事が沢山あります。昔の人々は、自分たちを取り巻く自然や、その自然を創っている目に見えない大きな存在に畏れを感じる機会が多かったと思います。現代の人でも地震や津波など、人間の力ではどうすることも出来ない天災には畏れを抱いています。しかし自然は猛威を振るうだけではなく、人間が生きていく上で大切な、豊かな恵みを与えてくれます。

良質のお米を作るならば良質の水が必要であり、その良質の水を得るにはそれを蓄えることの出来る山が必要であるように、全てのものが自然の中で生かされ、深く関わり合う中で、その恵みに対して常に感謝しつつ私たちは生きています。かけがえのない自然があってこそ我々の生活は成り立っているのです。この自然が織りなす森羅万象全てを神と呼び、讃えてきました。また同時に荒ぶる神を畏れ、鎮めてきました。私達は今もなお、神と共に生きているのです。

日本の神様はどのような宗教を信仰する人であっても全てを受け入れてくださいます。神社に行けば、心が和む緑があります。また以前に参拝した伊勢神宮の豊かな自然、穏や

かな空気、あの清々しさを忘れることができません。まさに神社は日本人にとって大切な「心のふるさと」と言えるのではないでしょうか。

日本人にとっての神社は、人々が抱える不安や心配事を祓い清め心を落ち着かせてくれる場所であり、昔からのしきたりや伝統を守り、地域独特の慣わしを受け継ぐ場所、そして生かされているという感謝をする場所ではないかと思えます。

ご清聴ありがとうございました。

(高知県 高知大神宮 権禰宜)

式年遷宮にこめられた日本の心

後藤 大志郎

本日は八幡神社の朔日祭に御参列いただき有難うございます。

大変さわやかな季節になって参りました。今月も神社の諸運営にご協力をよろしくお願い申し上げます。

さて本日は、かねて奉賛にご協力いただいている伊勢神宮の式年遷宮についてお話をさせていただきます。

1 式年遷宮

式年遷宮は二十年に一度、天照大御神のお住まいである御社殿や御装束神宝を造り替え、大御神さまにお遷りいただくお祭りです。

その歴史は古く、第一回式年遷宮は持統天皇の御代（西暦六九〇年）に始められ、以来千三百年にわたって二十年毎に継承されてきました。

このお祭りは、規模においても内容においても、世界に類のない壮麗なお祭りですが、経費的に見ても、前回の遷宮では三百五十億円、今回の遷宮では五百五十億円といわれております。

そのようなお祭りを、我が国ではどうして繰り返し繰り返し、二十年毎に続けてきたのでしょうか。

2 二十年毎に続けてきた理由

(1) 清浄説

神祇奉斎、神祭りの道は清浄であることを根本とするが、最も尊厳なる神社である神宮においてこそ清浄を第一とする。

(2) 建物様式制約説

萱葺、掘立柱という建築様式からくる木造建築物の耐用年数を勘案してのものである。

(3) 技術伝承説

宮大工・工匠等が次世代に技術を伝承していくのに適当な間隔の年数である。

(二十歳で弟子入り、四十歳で一人前、六十歳で指導者・棟梁)

(4) 時代背景説

七世紀当時、大陸から仏教的感化と学問・文化・技術等の外来的影響が我が国に滔々と流入してきたが、これに呑み込まれないよう、我が国古来の信仰の形を万世に伝えようとしたものである。

(5) 遷座祭祀源説(「御生れ信仰」起源説)

五十鈴川の川上の地に天照大御神をお祀りし奉った時の観念、感激を忘れないよう、常に皇大神宮奉斎の信仰を新たにしようとしたものである。

この外にも幾つかの説がありますが、これらは何れも重要な考え方であり、どれが正しく、どれは間違っていることではないと思われまゝ。

そして、これらの諸説の根底には式年遷宮のもっと根本的な考え方が込められているのではないでしょうか。

それを、「常若」の思想と、「天皇国・日本」の国柄、という二つの点から考えてみたいと思います。

3 「常若」^{とこわか}の思想

「パルテノンの神殿」「バビロンの聖塔」等々、永遠不滅を願って造られた巨大な建造物が、いずれも儚い遺跡と化している厳然たる実例を私たちは沢山知っています。

第一回式年遷宮が行われた頃、日本には既に世界最高の木造建築「法隆寺」を建設する技術がありました。

ところが神宮では同じ技術で社殿を建てる道を敢えて選んでいない。そこには「永遠なるもの」を堅牢な建築物で実現するという考え方とは別の思想が存在すると考えられます。

それは「永遠なるもの」を実現するにあたって、一つの世代が、次の世代へと、技術や伝統、精神や心を伝承し続けることでこそ永遠性が生まれる、という思想であります。

この、受け継ぎ続けることによってこそ永遠性が生まれるという「常若」の思想。正にこの「常若」の思想・哲学が根底にあることによって、伊勢の神宮は廃墟となることなく、太古の姿のままに今も生き続けている。

式年遷宮の大切な考え方の一つに、この「常若」という思想が込められています。

4 「天皇国・日本」の国柄

もう一つ、「天皇国・日本」という、我が国の大切な国柄のことを考えてみたいと思います。

戦前の教科書では、式年遷宮のことがキチンと教えられていました。

そこでは「この神殿は二十年ごとに、改築せらるれども、かつて、そのさまを改めたることなし」と教えられていました。

また、フランスの哲学者アンドレ・マルローは伊勢神宮を参拝し、「あそこに《永遠なるものの祖形》が、遷宮という仮象をとおして千古なお生きつづけている」とその本質を喝破しました。

アンドレ・マルローが「永遠なるものの祖形」と呼んだものの、そして、戦前の教科書に「かつて、そのさまを改めたることなし」と教えられたもの、それは同一のものだと考えられますが、それは一体何なのでしょう。

日本の国の固有の姿というものを考えてみると、それは皇祖・天照大御神の神勅によつて定められた天皇国・日本という国柄を描いて外にありません。

この天皇国・日本という国柄を描いては、伊勢の神宮の御存在もなく、日本という

国もなければ、日本人という民族もない。

式年遷宮の持つ大切な意味の一つに、先ほど申し上げた、受け継ぎ続けることによってこそ永遠性が生まれるという「常若」の思想があります。

そしてもう一つ、この「常若」の思想によって永遠の生命を付与されるべき御本体、それが何であるかと言えば、それは「天皇国・日本」という国柄であり、その礎を定め給うた「天照大御神の御神威・御神徳」であると言わねばなりません。

5 日本の国が永遠に日本であるために

「中今」という言葉があります。

それは「過去から現在、現在から未来へと一貫して流れる時間空間における、真只中の今のこの時」という意味であります。

日本の国が永遠に日本であるために。

日本人が日本人であることを忘れないために。

神と人とが「大いなる生命」に浴するため。

今こそ私たちは「中今」のこの時において、「万古不易のまつり」「式年遷宮」に神習い、日々の神明奉仕に更に徹して参りたいと存じます。

本日は「式年遷宮にこめられた日本の心」についてお話をさせていただきました。

これから爽やかな清々しい季節になります。

皆様の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

本日は、朔日祭に御参列いただき誠に有難うございました。

(鹿児島県 岩川八幡神社 権禰宜)

大震災の中にありて

永野雄大

未曾有の大震災より早くも一年五ヶ月が経過しました。殆ど報道されませんでした。私の住む塩釜も被害は甚大でした。津波により、神社に昇る道路の入り口にまで車が押し寄せてきました。家屋は傾き、町はヘドロの海と化しておりました。

そんな塩釜も最近になって漸く建物解体が一段落しましたが、その整地後に建物が建てられる事が少ないように感じます。整地止まりで空地ばかりが目立ちます。復旧完了とはほど遠い状況であります。社殿が流出した神社も県内には多くあります。鹽竈神社も境内の五十基を越える石灯籠や石柵が、悉く倒れ被害を受けました。地震発生時の恐怖は忘れられないと思います。強い震動の中、社殿倒壊や参道の地割れが頭に浮かびました。恐怖に負けて、避難誘導の役目すら果たせませんでした。授与所の巫女達も、あまりの恐怖に泣きながら外へ飛び出してきました。鳴り響く津波警報をじっと揺れに耐えながら、ただただ聞くしかありませんでした。何も考える事が出来ませんでした。そして後でわかっ

た事です、残念な事に多くの方が津波被害を予想していなかったようです。

鹽竈神社は小高い山に鎮座しておりますので、津波の直接的被害はありませんでしたが、水没した地域の復旧に出た職員より惨憺たる状況を聞かされ、下町に降りる気になれませんでした。本来、地元の神職としてそんな事を言える状況ではありませんが、幸か不幸か神社居残り組となり参拝者受入の為待機しておりました。来る日も来る日も参拝者のいない状況が続きました。ライフライン寸断の為、手水舎の残り少ない水を掬いに来る人もいました。神社より数十^{メートル}進んだ場所に指定避難場所である中学校がありましたので、神社に避難する方はいませんでした、神社駐車場は避難者の車で満ち溢れておりました。

これからどうなるのであろうか。これからどうすべきなのかと、参拝者のいない授与所で自問するような毎日でした。それは一個人として、また一神職としてであります。この震災で親兄弟・子供・家族親族を失った方々。どのような状況で、どのような気持ちで参拝されるのか、参拝に至ったのか、一見してはわかりません。暫くして参拝者も少しずつ増えてきましたが、深刻な思いが伝わってくる様子の参拝者も多くあり、境内にも普段とは全く異なった気が満ちているようでした。

追い討ちをかけるような四月の大きな余震。その後となった花祭の御輿渡御は、境内巡

幸のみとなりました。八月みなと祭の神輿渡御は例年通り陸上巡幸は出来たものの、塩釜の島々を廻る海上渡御は、被災した島々への接岸が叶わない上に、頻発する余震、更には世間の自粛ムードが重なり、控えるべきではないか等という意見が多くあった中でも実行されました。私自身も実際のところ、神輿を出す余裕があるのであれば、その力をもっと震災復旧に役立てられるのではと密かに思っていました。しかしその考えは間違いでした。解体待ちの家屋、道路歩道はガタガタ、復旧真っ直中にも関わらず、どこの御旅所も例年以上の多くの方々にお出迎えいただきました。それは、毎年当たり前のように迎えていた神輿を待ち侘びていたというよりはむしろ、九死に一生を得た事にあらためて気づき、感謝の念をもってお迎えをされたのではないかと思います。

例年、神輿船をお迎えする島の人々は、船の接岸こそ叶いませんでしたが、津波で崩壊した船着場より大きく手を振り復興を誓われているように見えました。

今回の神輿渡御は、島や町の氏子に対する復旧復興の「のろし」、道しるべを示す意味合いがあったような気がします。多くの方々より感謝の言葉を頂戴致しました。

しかし、先にもお話しました様に被災状況は人それぞれ、様々です。親兄弟最愛なる子を亡くされた方々の気持ちを考えますと、本当に胸が締め付けられる思いになります。そ

のような境遇の参拝者をどのような気持ちで受け入れ、どのように対応すべきなのだろうか。中には、「濁流で流れてきた畳に乗り助かった」と笑いながらお話される方もいらっしゃると思いますが、その心中には深い傷があるのではないでしょうか。

震災より今日に至るまで、多くの神棚（御社）がお焚上げの為、持ち込まれました。一日に何社も持ち込まれました。泥まみれのもの、傷、汚れの全くないもの。その数は五〇〇を越えるものでした。「神主さん、こんな境遇の私の気持ちわかりますか？」と、もし問われたら皆さんはどのように答えますか？私には答える言葉が見つかりません。

一人一人、いろいろな境遇の参拝者とこれから接していく事になります。その地域・氏神社にお仕える神職としてのスタンスをよく理解し、自己研鑽に励まなければとあらためて感じております。これは容易な事ではないと思つていたところ、「神社とカウセリング」というタイトルの冊子を見つけました。國學院大學の元学長である上田先生が執筆されたものです。上田元学長は神道学者であり、さらにハーバード大学で心理学を学ばれた先生であります。私は幸運にも学生時分に先生より学ぶ機会がありました。内容は「神道の死生観」でした。神職はカウセリングを学ぶべきだとお話されております。教学の勉強をし、神道に対する疑問に理路整然と答える事が出来る資質を備えた上で、人から信

頼される、頼りにされる、そういった神職を目指すようにと述べています。

我々は、所謂一般の方々と同一の暮らしの上にながら、一線を描く存在であると思います。被災地に鎮座する神社の神主として複雑な心境の中、今現在まで過ごして参りましたが、この震災をきっかけに、参拝者受入、特に精神的救済を意識した応対が必要ではないかと思っております。

復旧真っ最中にして、未だ震災の中にあると言えるのではないのでしょうか。

(宮城県 志波彦神社鹽竈神社 権禰宜)

登拝

山下 裕嗣

こちら石鎚神社は皆様ご承知の通り、石鎚山をご神体と仰ぐお社です。私は白山で神主をさせて頂いておりますので、これも何かのご縁と思い、今回は登拝の心と題してのお話をさせて頂きます。

まず、登拝とは何ぞやという事です。が、「登拝」、登って拝む、字の通りであります。単なる登山ではなくて、ご神体山の中に入り、神の山に直接触れ、その精気・靈気を戴きながら登り、頂上を極めて心身ともに清浄となつて降りてくる、一種の神事とも言える「行」なのであります。

仏教の宗派の一つ「曹洞宗」の大本山は福井県の永平寺です。永平寺は言わずと知れた僧侶の修行道場でもあります。この雲水と呼ばれる修行僧たちは、その厳しい修行の中で必ず白山に登ります。毎年恒例の「白山拝登」まあ何故か永平寺では「登拝」ではなく「拝登」と言っているわけですが、禅宗の厳しい修行の一つであります。雲水全員が黒の作

務衣にわらじを履いて登って来られます。室堂にある白山奥宮祈禱殿前では、白山遭難者の供養と登拝者の安全祈願の読経が行われます。

このように、登拝は「行」なのでありますが、多くの登山者はレジャー目的と言うか、自分へのチャレンジと言うか、白山の場合、信仰登山として自覚されている方は、以前のアンケート調査によりますと、一割に満たないという事ようです。勿論私なども「登拝」を単に厳しい「行」とだけとらえているのではなく、その中に多くの楽しみを見出しているのです。

登拝の楽しみはたくさんありますが、その中でも自然とのふれあいが、一番の楽しみではないでしょうか。まず空気が違います。白山登拝を例に挙げますと、山登りのスタートは、谷川にかかるつり橋を渡るところから始まります。谷を渡る風は爽やかで、いわゆるマイナスイオンが心身を清めてくれます。高度を上げるほどに空気は澄んできますし、涼しく、より爽やかになってきます。

登山道わきには多くの高山植物が目を楽しませてくれます。緑の草木の間に咲く、赤・ピンク・黄・白・紫・青・水色などの花は、厳しい高山の短い夏に咲き誇ります。高度が上れば上がるほど、その花は可憐な姿となり、山頂付近の岩場にさえ咲く花たちからは、

生命力さえいだけるような力強さを感じます。今日は特別に、白山に咲く花の写真をお持ちしましたので、少しご紹介しましょう。

「クロユリ」石川県の県花です。

「ハクサンコザクラ」このように「ハクサン」の名前を冠する花は約三十種類あります。

「チングルマ」花が終わると風車のような姿に変わります。

「ニッコウキスゲ」全国各地で見られます。

「トリカブト」根には猛毒があり、殺人事件も起こりました。

「イワギキョウ」高山の荒れた土地に咲きます。

ほかに「クルマユリ」「シモツケソウ」等々。

今日はほんのごく一部の花をご紹介しましたが、お山には何百もの花が咲き乱れ、我々の心を癒してくれます。他にも鳥たちの声や、蝶の乱舞などが登拝の楽しみでもあります。

しかしながら、楽しい事だけではないのが登拝であります。少なくとも数百メートルから千数百メートルの高度差を、自らの足で登るわけですから、体力的に厳しくないわけはありません。登るにつれ足は重くなり、心臓の鼓動は増して、汗が噴き出てまいります。快晴のお天気での登拝は気持ちの良いものですが、暑さとの戦いもあります。山のお天気

は変わりやすいもので、突然の雨に遭う事もあります。しかし人は、頂上を目指して登るのです。そこに何かがあるのか、何を求めて登るのか。疑問や目標を越えて登拝中は無心となります。つらい中を無心に登り続けます。つらく厳しい中を登る事によって、頂上に着いた時に得られる感動は、言葉に出来ません。登拝によって得られるものは少なくなく、人はそれを求めて登り続けるわけです。

登拝により得られるもの。それは全て大神様の大御稜威、大自然の中にある靈氣が、私たちの心に働きかける、大きなエネルギーなのであります。その力を戴く為に無心で登り続ける、心が無心であればある程、戴けるものは大きいのであります。

ここにもう一つとっておきの写真があります（「御来迎」ブロッケン現象の写真）。現在ではそれが科学的に解明された「ブロッケン現象」の写真です。山で出来る虹の一種ですが、気象条件がそろわないとなかなか見る事の出来ないものであります。目の前の雲に映った丸い虹の中に、実は自分の影が映っているわけですが、昔の登拝者はこれを神仏の姿と仰ぎ、「弥陀の来迎」とも称した現象であります。心が素直であればあるほど、この姿をそのまま大神様の姿ととらえる事が出来るのです。無心で登ったお山で得られるものの最たるものは、大神様そのもののなのであります。

登っている時のつらさは、精神的にも体力的にも普段の生活では得られないものですが、それが自分を無心にさせてくれます。無心の中でふれあう大自然、澄んだ空気、美しい花、鳥のさえずり、高原の風さえも大神様の大御稜威なのであります。古来の登拝の装束は白装束であり、いわゆる死装束なのであります。登拝により人の心は無心となり、一旦リセットされます。そして大神様の大御稜威を戴いて甦り、あらたまって戻ってくる。登拝は人が思う以上に素晴らしいものを与えてくれます。

(石川県 白山神社 禰宜)

躰と教育

大野 一省

さて本日は、躰と教育と題してお話しをさせていただきます。皆様方の中にはすでに子育てを終えていらっしゃる方、現在子育ての方でもいらっしゃると思います。私もこう見えましても現在二十九歳で三歳の長女と六ヶ月の長男の父であり、子育ての真最中でありま

す。

そもそも躰とは、人間社会・集団の規範、規律や礼儀作法など慣習に合った立ち振る舞いができるようにすること。教育とは、ある人間を望ましい状態にさせるために、こころとからだの両面に、意図的に計画的に働きかけること。知識の啓発・技能の教授・人間性の涵養などを図り、その人が持つ能力を引き出そうと試みることでであると書かれてあります。どちらも似たような意味合いがありますが教育に関しては、家庭で出来ることは限られてしまいますので、学校でしっかりと教育していただく必要があると思います。一方躰に関しては、学校では出来ない事が大半なので、親が責任をもって教えていく必要がある

と思います。

現在、挨拶をしても挨拶を返さない・親の言う事を聞かない、善悪の区別がつかない子供が増えていると思います。昔なら親の言う事は絶対に挨拶をされたら返すのがあたり前の事でしたが、現在ではそれが為されていないと私は思います。そこで戦前の日本には道徳教育の修身がありました。その根本規範である、明治二十三年十月三十日に渙発された『教育に関する勅語』には「十二の徳目」があります。すべて大切なのですが、その中でも孝行、子が親を大切に思うこと。朋友ノ信、友達はお互いに信じあつて付き合うこと。遵法、法律や規則を守ること。この事を特に子供達に教えていく必要があると私は思います。

私の家では、両親の言う事は必ず聞くこと。友達と仲良く遊ぶこと、決して殴ったり、玩具をとったりしないこと。靴はきちんと揃えて脱ぐこと。必ず挨拶をすること等、徹底して躾ています。しかし相手は子供です、言っても聞かない時もあります。その時には、手をあげることもあります。妻や両親からは「絶対に手をあげてはいけない」と言われるのですが、本当にいけないことなのでしょう。私は言つて駄目なら、手をあげるしかないと考えております。なぜなら子供にとって親は世界で一番怖い存在でないといけないか

からです。しかし、ただ叱っているだけではなく、ちゃんと言う事を聞いたなら、褒めることも大切であります。叱ってばかりいると、親の手から離れてしまいます。また、褒めているだけでも、子供は甘えてしまいます。ですから、幼少期にしっかりと躾をし、「良い事は良い。悪いことは悪い」と子供自身で判断が出来るように躾をしなければならないのです。

さて、皆様のご家庭には神棚や仏壇がありますでしょうか。私の家には神棚があります。毎朝娘と一緒に神様に食事をあげて、その日の家族の安全と一人ひとりの健康をお祈りいたします。そして夕刻には、食事を下げ「今日も一日お守りいただいて有り難うございました」とお参りをしております。この朝夕のお参りをするという行動は何らかの強い意志を持つていないとできないことで、皆様方も神社やお寺にお参りする時、何らかの意思を持ってお参りすると思います。神棚や仏壇がない家庭では、お参りはもちろん、家族のことを願う。感謝する。という事もできません。神棚・仏壇がまだない家庭には是非とも設けていただき、信仰を通じて他人のことを思う気持ち、感謝する気持ちを持たせる事も、躾の一つではないでしょうか。

家庭だけではなく神社でも何か子供たちに躾や教育が出来ないかと考え、当社では八月

四日・五日の両日にわたり「椿こども塾」を開催しました。各班に分かれみそぎ体験、山登り、弓道・茶道・書道体験といった普段の生活では中々できないことを体験し、礼儀作法や挨拶、さらには共同生活を通じて友達同士仲良く協力して過ごすことを学べたのではないかと思います。神社という家庭とは違った雰囲気の中で子供達の躰と教育を行う事も、現在必要になってきていると思います。

躰と教育は大変難しいことだと思いますが、「親は子供の手本」「子供は親の鏡」と言うように、まずは親が子供達の模範となつて正しい挨拶、礼儀作法等を実践し、さらには『教育に関する勅語』の「十二の徳目」の意味を十分に理解して、子供達に分かりやすく説明をすることが現在大切ではないかと思ひます。当たり前ですが、子供を育てるのは親の責任であります。その事をよく考え、子育て中の方、これから子育てをされる方は子供達を素晴らしい大人へと教え導いて頂きたいと思ひます。

尊き命

矢野忠臣

当たり前の事で、みんな承知ではありますが、再認識していただきたくお話させていただきます。

「命」は素晴らしい。「命」って素晴らしい。日常生活で、時々ですが思う事があります。この人体を造ってくれた神様の存在は尊いです。止めどなく動く心臓に、「心臓、生まれ」などといっても、命尽きるまでは動き続ける。人体の神秘の一つである自然治癒力は素晴らしい。

意志を持ち、魂を授かり、臓器が動く。関節の動きや皮膚の質感。どれもこれも神様が造ったとしか言いようのない「最高傑作」。この世の生物や植物を一から造る事は人間が踏み込んではいけない神の領域。神様からの賜り物である故に感謝をしなければいけないし、大切にしなければいけない。そう思います。

さて、近年に限らず昔からかもしれませんが、メディアで「幼児虐待で死亡」「暴走車が

人に突っ込み多数の被害」「いじめにより死亡」こんなニュースを目にすることが多く感じます。私が親になったから目に付くのか、はたまた人の命を軽くしてしまっているのか。とても悲しく、ニュースから目を反らし、耳を塞ぎたくなります。

もし、こんな質問が来たら、どう答えますか。

「なぜ、自殺をしたらいけないのですか」

「なぜ、人を殺したらいけないのですか」

ふと考えるようになりました。自分ならなんと答え、納得してもらえるだろうか。色々考えました。

まず命というのは、様々な御縁で繋がり成長しています。お父さんお母さんが御縁で結ばれ命が生まれ、出産の時には病院の先生等の御縁により世に出ました。食事・衣服・生活空間に携わっている人との御縁と物品の命。「おめでとう」や「可愛いね」という声をかけてくれた人との御縁。見る聞く感じるの御縁。小さいかもしれませんが、そういう御縁の命を少しずつ少しずつ頂きながら、人は成長していくのです。作った人の顔は知らないけれど、使う物一つ一つに命を吹き込んでくれた人がいるのです。

そして忘れてはいけけないのはご先祖さまの御縁。ご先祖さまが命を繋げてくれたから、

今の自分の命がある。どこかで命が途切れていたら、この命は生まれていないのです。

さらに、体は神様からの頂き物ですが、生まれていたいという意志は自分から発し、自分で父母を選んで生まれてくる、意識の奥の奥で発した意志なのです。その意志によってこの世に生まれてくるのです。

みなさんは父母を選んで生まれてきましたか。私は父母を選んで生まれてきました。父母で無ければ私は私ではない。違う父母であれば当然ながら顔や体、性格も違います。今の私があるのは、父母の元生まれ育ってきたからです。父母の元に生まれ育てられ、そして巣立っていきたいと思い生まれてきたはずです。だから私は父母を選んで生まれて来ました。

命を絶つ、また個人のエゴで人を殺めるというのは、そういう御縁や繋がりを絶つという事、何百何千何万という御縁を。

線を一本断ち切るなどという簡単なことではないのです。絶つたのは命だけでなく、この御縁も一緒に絶つのです。

人を殺めた人は、殺した人が今まで頂いた縁を背負って生きていきますか。ナイフ一本で誤って行動し、裁判で裁かれて、刑期を終えて、全てが報われたなどと考えるのは以て

の外。一生掛けても償えるものではありません。

辛く苦しく泣きたくなることもあるでしょうが、死んでしまえば何もできないのです。死んでしまったら笑うことも、泣くことも、怒ることも出来ません。でも生きていれば何だって出来る。笑ったり泣いたり怒ったり。だから命を大切に、御縁を大切に生きていきましょう。

出した答えです。

私の身近に若くして亡くなる方がいました。「朝、ちゃんと目覚めてくれるかな」そういう不安が時々襲ってきます。夜眠り、朝目覚めるサイクルが変わらず巡って来るとは限らない。太陽が夜沈み、朝昇るサイクルが必ず来るとは限らない。だから感謝があるのだろう。世の中「有り難う」なのです。この「有り難う」が失われると、人の心は穏やかで無くなると思います。たくさん「有り難う」という言葉で、心穏やかに命を輝かせましょう。

日本人の魂——一杯の水——

鈴木明子

岩走る垂水の上の早蕨さわらびの萌出づる春になりにつけるかも

志貴皇子

美智子皇后様がお好きな万葉集、志貴皇子のお歌です。早蕨が春になって生き生きと萌出づることができたのは、岩の上をさあつと流れる清らかな水が、大地を潤していたからだと思います。清らかな豊かな水は美しい自然を育み、その美しい自然は繊細で礼儀正しい日本人の魂を、育んでくれました。今、その水が枯れかかっているのではないでしょう

か。

今年の五月二十九日に百歳で亡くなられた新藤兼人映画監督は、一九六一年モスクワでグランプリを取った作品「裸の島」の撮影時に言われたそうです。「人の心は皆渴いている。生きるために乾いている。それに一杯の水をかけたものだ」と。（京都新聞五月三十

日)

私が中学校の教師をしておりました時、子供達の心が年々渴いていくのを感じました。愛情という水をかけて下さい、という心の悲鳴が聞こえるようでした。

万葉集防人歌に

忘らむと野行き山行き我来れど我が父母は忘れせぬかも

というのがありますが、固く結ばれていた日本人の親子の絆は、どうなったのかと思います。子供の心が渴いていくにつれ、いじめや校内暴力が増えていきました。

今やつとそのいじめが公になりました。やつとといいますのは、もつと早くにそうなるべきだったからです。はつきり言いました、学校にいじめを止める力は全くありません。何の権限も与えられていない教師は、全く無力です。注意をしても親を呼んで謝らせてもかえって悪くなるばかりです。ちくつた(告げ口した)と言ってさらにいじめはひどくなります。だから子供は黙ってしまふのです。親も先生も警察さえも恐れていない子供達をどうしたらいいか。忘れられた日本人の魂をどうやって取り戻していくか。いよいよ神様の出番なのです。即ち一つ目は『小さい時から目に見えないものに対する畏敬の念を教えること』、二つ目はあの東日本大震災で世界の人に感動を与えた日本人の心『人に尽くす、

公に尽くすことの美しさ、徳目を教えること』。二つとも今の学校教育に欠けているものです。

江戸時代各藩の大名達は競って藩校を作り、武士の子弟に論語など四書五経を通して人間としての生き方を学ばせました。

産経新聞の伝統の教えという欄（七月二十一日）によりますと、会津藩では七ヶ条の「什の掟」一、年長者の言うことに背いてはなりません。一、弱いものをいじめてはなりません。一、六歳から九歳までの子に唱和させ、最後に『ならぬことはならぬものです』と締めくくっていたそうです。なんと明確な言葉でしょう。だからこそ白虎隊のような会津魂が生まれたのですね。

それにしても、明治天皇陛下も教育勅語で『徳器を成就し』とおっしゃっておられますのになぜ道德を教えなくなったか。それは戦後、日本人は悪いことをした、戦争を起こした日本人が悪かったのだ、戦前の教育が悪かったのだと徹底的に教えこまれ、私達に戦争について触れたくない、戦前の教育はすべて間違っていたという思いが見事に浸み渡っているからだと思います。

日本人が誇りを取り戻し、一杯の水どころか何杯でも水を与えられる徳の高い日本人

魂（大和魂）を甦えらせるために、戦後六十七年間目を背けてきた戦争の真実を知らなくては、その呪縛から解き放たれないと思うのです。その事を教えてくれたのが、中條高德（アサヒビル名誉顧問）氏の『孫娘からの質問状、お爺ちゃん、戦争のことを教えて』、『日本人の気概』、『誇れる国』等です。

日本を守るために明治の若者は立ち上がったのかと、感動、感動で泣きながら読みました。生きがいを見つけれない若者達に子育て、孫育てをしておられる方にぜひ読んで頂き、未来を担う子供達に日本人の素晴らしさを教えてやって頂きたいです。

インド人の映画監督が日本兵の気品を伝えたいと「インパール作戦」をテーマにした映画を作るそうです。（産経新聞六月二十五日）彼は言っています。「日本兵は気品があり親切で、欧米人が言っているような残酷な兵隊ではなかった」と。

又台湾では烏山頭ダムを築いて尊敬されている八田與一という人や学校を作り熱心に教えてくれた六人の先生（六士）が今なお尊敬されていること、こういう良い話をもっとして日本人の魂を甦らせてほしいものです。

昭和天皇御製

あめつちの神にぞ祈る朝風の海のごとくに波たたぬ世を

いつも世界の平和を祈っておられる天皇陛下のご存在に、日本人としての誇りを持ち、日本人の魂を取り戻したいものです。

(滋賀県 立木神社 権禰宜)

御利益とは

別 役 重 幸

本日はよくお参り下さいました。お参りと御利益という事について少しお話させて頂きます。

御成敗式目をご存知でしょうか？大河ドラマにもなった北条時宗の曾祖父にあたる北条泰時が編纂した式目なのですが、鎌倉時代に制定された武士政権のための法令です。全五十一条におよぶその式目の中、第一条に「神社を修理し、祭祀を専らにすべき事」それについて「神は人の敬ひによつて威を増し、人は神の徳によつて運を添ふ」と記載されております。「いかなる神も、人の崇敬を受けてこそ、その御威光を輝かすのであり、御神威を高めるのは人の敬の力である。しかし、その人が人としての運、人としての生命を与えられるのは、神の徳によつてである」という意味です。全五十一条のうちの第一条です。で、当時の武士を始め人々の考え方がいかに神社や祭りを大切に考えていたかがうかがえます。

人々の信仰によって神様はその勢いを増し、それによって人々は御利益を受けるといふことなのですが、神社へのお参り、御祈願、お賽銭、信仰の形は様々あると思いますし、それによって御利益を受けることがあると思います。

さて、御利益とはどういうことかと思われる方もいるかもしれませんが。漢字で書くことと利益と書いて「りやく」と読むのですが「りえき」とも読みます。二つの読み方で意味がかわってきますので、「ごりやく」の事をお話しします。御利益という言葉は元は仏教用語なのですが、神社でも使います。例えば、御祈願事というと厄年の厄除け祈願ならその厄年の間無事に過ごせることですし、交通安全なら交通事故に遭わず安全に運転できることです。この場合、外から来る災いから守っていただく事自体が御利益ではないでしょうか。少し話は外れますが以前、友人が交通安全のお守りを持っていたのに事故にあったと言ってきました。よくよく聞くと、会社の駐車場ではかの車に接触したとの事でした。さらに問い詰めてみると自分の運転している車で駐車場に駐めてある同僚の車にぶつかっていったようです。さすがに自分から駐車中の車にぶつかりに行つて神様のせいにしてはいけませんね・・・。

さて、話を御利益の事に戻しますが、自分自身が何か得をする事のみが御利益という事

ではありません。

例えば最近ではパワースポットという言葉が流行しているようですが、その場所へ赴き何かパワーを得ようという考え方では御利益ではなく利益を求めるという事になってしまうのではないのでしょうか。

平安時代末期に西行が伊勢の神宮にお参りして「なにごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」と歌を詠んだそうです。どなたがいらっしゃるのかは知りませんが、恐れ多く、ありがたく、涙があふれ出てくるという意味になります。こういった心の持ちようが、昔から我々日本人が持ってきた考え方であり神道の心では無いかと思えます。パワースポット巡りもいいですが、少し考え方を見直して頂ければと思います。

御利益を得ることが信仰ではなく、お参り等をする事によって御利益を受けたと感じられる事、またそれを感謝できる事が大切で、それが信仰ではないかと思えます。

神社にお参りをするということなのですが、例えば、お願い事があって神社を訪れ社頭で御祈祷を受けます。しかし、神様をお願い事があるときだけでなく、日頃からのお参りも大事にして頂きたいと思えます。ついで参りは失礼に当たるので、してはいけないとおっしゃる方もおられるようですが、お宮の近くに寄る機会があれば、神様にご挨拶する形

で、いつでもお参りをして頂くことは決して失礼には当たることではないと思います。また、お願い事が無ければお参りをしてはいけないなどと言うことは決してありません。お賽銭も必ず入れなければならぬと言ふことはありませんので気軽にお参りをして頂ければと思います。もちろん、お賽銭をして頂ければ尚良いですが・・・。

そして、御祈願が叶った事だけでなく、お参りをしたことによつて何も災いが起こらなかった事自体が御利益だと気がついて頂ければ幸いです。何事も起こらなかった事自体をありがたいたと気が付く事は少ないかもしれません。ふと思ひ返したときに何事もなかった事、つまり御利益があつた事を感じて神様に感謝の心を持って、またお参りをして頂けるようお祈り申し上げます。

(高知県 高知八幡宮 禰宜)

人としての生き方

宮 本 優 子

本日は、敬神婦人会の方々にお集まり頂きまして、ありがとうございます。私達のこれから先の老後の生き方に関して考えていきたいと思い、少しお話させて頂きます。

昨年三月十一日の震災より一年半が過ぎ、その間にも各地に大雨をもたらし、水害・土砂崩れなど、不安の材料には事欠きません。又、青少年問題、政治家達の行動、情けなく思う事が多くあります。

昨年は「絆」という言葉が飛び交い、日本人の美しさが賛美されましたが、その一方で「日本民族は、坂道を転がり落ちる様に衰退し、滅びるであろう」との世界の著名人達の意見もあります。

終戦後、骨抜きにされる教育を受けてきたのは、我々六十代・七十代であります。半世紀以上続いている訳ですから、当然その子供達は、良くない結果となりました。中には本当に素晴らしい人達もいらっしやいます。しかし、八割の人達は仕事を満足に出来ない

状態です。

ゾンビの様な子供さんがたくさん育っています。

子育てが出来ないのです。

核家族になって子供達は会話しないで育ち、五才になっても単語がわからないのです。幼稚園では「知恵遅れ」として扱い、元気な子供に対しては「多動症」、扱いが大変だと「適応障害」とされ、親を呼び、小学校は特殊学級がある施設を勧めます。親も自分の考えと違くと、先生に「この子、おかしいんです」と説明する始末。自分が中心で、当てはまらない子は全て病氣扱いなのです。

子育てが出来ない親を作ってしまったのは、私達にも原因があるのかもしれない。

老人クラブの旅行と言って出かけ、隣り近所には、たくさんのお土産を買ってきて配り、自分の孫には千円札を渡す。

「お母さんに何か買ってもらい」

親は、お姑さんには逆らえず、

「はい」

と言って、スーパーで物を買って与える。

合理的ですが、この合理主義が「オレオレ詐欺」を生んだのではないでしょうか。

おばあちゃんは、おばあちゃんの好きな物を選んで良いのです。スーパーには売っていない物を買ってくれば良いのです。

おばあちゃんの好きな物だから、その物におばあちゃんの愛情が入り、思い出として残り、おばあちゃんが亡くなった時悲しみが溢れ、そこで命の尊さを知り、又、自分の子供に愛情を注いでいける人間に成長していくのだと思います。小さなお子さんに感動と思い出を残してあげたら、その子は良い大人になります。

先日、八月十九日、三才から中学一年生までの三十五名の児童とその両親・関係者を含めた七十六名で、伊勢神宮（外宮）、まがたま池水上舞台で子供獅子舞を奉納してまいりました。その折、帰りのバスの中で中学一年生の男子生徒がお礼を言いたいからと、マイクを取りました。

「神楽殿で巫女さんの舞が終わり、神職さんの舞が始まる瞬間、『生きていて良かった』と胸の中から湧いてきて、涙がワーツと出てきたと同時に、生きる事の素晴らしさや意味、生きがいとは何か？みたいなものが一瞬で解ったような気がした。頭の中では『ありがとう』の言葉がグルグル回って何だかわからないけど、『ありがとう』と言いたい。ここにぼ

くを連れて来てくれて、本当にありがとうございます」

魂が神と繋がり、蘇った瞬間でありましょう。神世の時代、神話の時代から延々と続く日本人の魂が目覚めたのだと思います。

戦前はこういう事が自然の中から、季節の食べものからでも感じる事が出来たし、又、親がいろいろな体験をさせてくれ、感動がたくさんあったのだと思うのです。だから、何でもない事を何でもなく、淡々とこなし生きる事が出来たのです。

○ある九十才のおばあさん

「女は仕事の後に食事の支度をしなければならん。漬け物だけは食べられる様にせにゃ」と一生懸命に働く嫁のために、その時だけ動ける身体になる。家族の心配をよそに、「石が足に落ちて、どうせ死んでいく身、足の一本や二本どうってことないわ」と笑う。

○ある九十二才のおばあさん（毎日玄関の横に座っているのが日課）

「人は生きているといろんな事がある。通りすがりだからこそ出来る話もある。グチを言つて、スッキリして、我が家に帰つて、又、元気に働く。近所の幸せは私の幸せや。」と呟く。

私達の今これからの老後の生き方は、こういう人を見習っていくべきではないかと思ひ

ます。自分に出来る事を他人の為にしてあげるといふ事です。

遠く離れた孫にはメールではなく手紙を書き、たまに帰つて来た時、

「おばあちゃん、これ何？」

と言わせるように、リビングに教育勅語を貼っておきます。

「おばあちゃんもわからないから」

と言って、お孫さんにインターネットで調べてもらい、関心を持たせながら勉強させるようにするのです。

―押しつけると今の子供は逃げます―

最後に、

目に見えぬ

神の心にかようこそ

人の心のまことなりけり

いその神

古きためしをたずねつつ

新しき世を定めん

明治天皇の御製であります。

この二つの詠を忘れぬよう老後を生きていきたいものです。

(和歌山県 宮原神社 権禰宜)

日本人の大発明 まつり

金 倉 卓 彦

私の本務社は阿波一宮大麻比古神社ではありますが、御奉仕している兼務社が二十社ほど御座います。本殿・祝詞殿・拝殿、全て併せても十畳ほどのこぢんまりとしたお社ばかりですが、そちらの祭祀も本務社と同じように大切に御奉仕させて頂いております。

ある日いつもと同じように祭祀を御奉仕し、次の兼務社へと向かおうとしておりますと、「おーい、お太夫さーん」（四国では神主のことをお太夫とも言う）

と、総代さんが走り寄って来ました。何だろうな？何かあったのかな？と思い総代さんの方へ歩みよると、やって来た総代さんが小さい声でこう言いました。

「おまつりの数を少し減らしてもらえんだろうか？減らせられんならおまつりを合わせてもらえんだろうか？」

その時は次の神社へ向かう時間が迫っておりましたので、それは出来ない旨を伝えて車に乗り込みました。

車に乗り込んだ私は愕然としました。兼務社は祖父が官司として健在ではありますが、近頃は先の事を考えて殆どのまつりは私が御奉仕するようになっていますが、私が祭祀を御奉仕するようになったため、この様な事を思わせてしまったんだろうか……。まつりを行う意味やそれぞれの祭典の意味など御奉仕の度にお話して来たはずなのに何も伝わってなかったんだ。自己満足してただけだったのか……と。

そこでまつりを行うことの意味やその作用について、基本的なことになるかもしれませんが、わかりやすく伝えるためにはどのように「まつり」を説明すればよいのかについて考えてみたいと思います。



私たちが御奉仕している祭祀の起源は、古代日本人が自然万物森羅万象に感謝と畏敬の念を持ち、信仰が生まれ、そこに社を設け、祈りの形式を整えて儀式化したことに求める事が出来ると思います。我が国日本には他の国にはなかなか例を見ない、はっきりとした季節の移ろいがあり、春夏秋冬それぞれの恵みと恐れがありました。

たとえば春にはこの世の生き物全てに生命力を与える様な暖かな日差し、それに答えるように芽吹く草花や木々があり、夏の日差しは野菜には欠かせないものだそうですが、

我々人間には生命を奪いかねない恐ろしいものともなり、また作物を食害する虫たちの存在もあります。秋には夏の暑さが和らぎ、また穏やかな空気の中に撓わに稲が実り、そして全ての生命活動を停止させるかのような厳しい寒さをもたらす冬。この季節の移ろいに、さらに雨風や台風・地震・干魃など様々な自然現象が絡まり合い時が過ぎていく。この様な多くの表情を見せる自然の中で生きてきた古代日本人にとって、これらは全て神々からのメッセージに捉えられたのではないでしょう。そしてそんな環境の中で生きてきた私たちの先祖は自然を征服する方法を探るのではなく、自然そのものを神と捉え敬い、自然と共に生きるための方法を考え出しました。それが「まつり」ではないでしょうか。自然に身を任せ只々祈る。そして季節毎には恵みの成果たる物をお供えし、神霊を慰め感謝の誠を捧げる事で次の季節、次の年の更なる御加護を祈ってきたわけであります。

そして日本人はそれを個人が行うのではなくムラなどの組織体で行ってきました。自然現象を神々のメッセージと考えた私たちの先祖は自然の成す業が神々の御業だと考え、神の恵みや崇りは個人に作用するのではなく共同体に対し作用するものであり、自分が恩恵を受けるには組織として恩恵を授かる必要があります。つまり「まつり」を行って来た事で、今に繋がる日本人の心理に深く根ざす共同体尊重の意識が生まれ、ここから日本人の

優しさや思い遣りといった豊かな心が育まれていったと考えられます。

仮に古代日本人が一神を崇拜していたとしたら、恐らく共同体に対する価値よりも個人の意思が尊重され、諸外国の歴史に見られる様な改革が起こり、万世一系の皇統を繋ぐ天皇をいただく今の我が国の誇りある姿、また古き伝統が現代にも価値のあるものとして受け継がれていく歴史的に重みのある国柄は全く違ったものになっていたのではないでしょう。また人々には豊かな心も育まれはしなかったでしょう。そのように考えますと我が国の国柄はじめ今に伝わる伝統行事や物事、また私たちの心といった人間の内面に至るまでまつりによって護られてきたと言えるのではないのでしょうか。古代日本人が発明を意識してまつりを行ってきたわけではないでしょうが、今を生かされている事を考え大昔に思いを致せば、まさに「まつり」は古代日本人の大発明であると言っても過言ではないでしょう。

ところが、近年はこの「まつり」が小さな集落では失われようとしています。戦後占領軍の政策によりそれまでの価値観が全て否定され、欧米文化の大量流入により個人主義が善として蔓延し、それと入れ替わるように古代からのまつりを継承することにより培われてきた共同体尊重の意識が薄らぎ、今では若者に限らず多くの日本人が個人優先主義とな

ってしまっています。そしてそれに比例するようにムラの祭祀も質が低下し、酷いところでは失われてしまったところもあります。共同体の人々の祈りの場として伝えられた日本のまつりは個人を優先する事で継続出来なくなってしまうのです。

近年子供達の心の教育を学校で行う必要に迫られていると、よく耳にしますが、本来ならば人の心は親や兄弟、親戚のおじさんおばさん、近所のおじさんおばさんといった様々な人達と言葉を交わし共に生きることと成長するものであるべきはずです。しかしこれが公教育に求められてしまっている理由は、実はムラのまつりが形骸化されその本当の意味を失ったことで、共同体に所属し、まつりを行うことで得られた心のゆとりや心の居場所が無くなってきたからとも考えられます。

今私たちが行っているまつりは、単に前例を踏襲した儀式や行事ではないことは当然のことですが、神々を祀るという大きな目的のほかに、私たちの目には見えなくても必ずそこにある心に作用する何か、この何かとは受け取る人が置かれている状況により表現のされ方は違うと思いますが、この何かを頂くことも「まつり」の大きな目的では無いかなと思います。氏子の減少や高齢化、また地域の過疎化などの理由によりムラのまつりを奉仕すること自体が困難な時代ではありますが、祭祀を伝承すると共に、まつりを通してこ

の心に作用する何かを子や孫に受け伝えていくことが今を生かされている私たちの大きな使命だと思います。

古代日本人の大発明「まつり」の価値を素直な心で評価して、神々のお導きに身を委ねることで私たちは本当の幸せにたどり着けるのではないのでしょうか。

(徳島県 大麻比古神社 権禰宜)

社殿建築と日本文化

山 元 義 清

当社は慶雲元年（七〇四）に平森大杉に神様が降りてこられ、今の本殿は宝徳四年（一四五二）に建てられたものです。屋根は檜皮葺で、明治九年に国の特別保護建造物に指定されました。

さて、全国の建造物で国宝に指定されている件数は二六四棟、重要文化財は四四六八棟です。そのうち、本殿及び摂社末社が国宝に指定されているのは二十一棟、重文は四二六棟です。さらに、近畿地方に絞って調べますと国宝は二十一棟中十一棟が、また重文は四二六棟中二二六棟です。近畿地方の総数は二三七棟に及び全国の五三%を占めています。そして私たちの住んでいる滋賀県内で指定されている国宝及び重文社殿五十七棟の建築された時代と屋根の形態は如何なもので葺かれているかを調査しますと、建築年代は、平安中期から安土桃山時代であり、屋根は檜皮葺や「こけら葺き」が五十六棟に及び、一棟のみが銅板葺きであることがわかりました。一方、瓦葺きは全国的に皆無であります。即ち、

神社建築における屋根は、日本の風土をいかして建てられてきたことが理解できます。山林や湖沼に自生している植物を材料として用い、巧みな技術をもつて建てられてきました。伊勢の神宮は、第十一代垂仁天皇二十六年九月に伊勢の五十鈴川上にお鎮まりになり今年で二〇一六年が経過します。そして、二十年に一度斎行の神宮式年遷宮は、天武天皇がお定めになり次の持統天皇四年（六九〇）が一回目でありますから一三三四年が経ちます。神宮の建物は二〇年ごとによりみがえることから、文化財に指定はされておりませんが、宮大工をはじめ御装束神宝の調製に携わる工匠の方々の能力や技術はまさに人間国宝の超一級品であります。

日本古代、飛鳥時代は、もともと天皇がお変わりの都度に宮殿をお移りになりました。なにわながらとよさきのみや難波長柄豊碕宮から近江大津宮へ、そして飛鳥浄御原宮から藤原京というように。この時代の宮殿は、掘立て造りで伊勢神宮と同様であります。天皇陛下の御代替わりは、新しく生まれ変わらせる。そして、生まれながら継承していくという考え方で、これは日本人の信仰に基づく時間的観念であります。障子を毎年張り替え、新しく替えながら障子という本体を替えず繰り返し返していく、永遠にして永久の文化であり、日本人が農耕生活から得た知恵であるといわれます。太陽の恵みを得て冬に力を失い再び復活させていくという姿は、

種が地に落ちて穀物を実らせるのも一年が周期であり、生活の糧として戴く粃は神様からの授かりものでありますから、最初の初穂を神様に捧げて倉へ大事に収めることが日本の生活の知恵でありました。神宮の建物は、「唯一神明造」といわれ、土台がなく丸い掘立て柱を建てる。その上、床を高くして正面中央の柱間に入り口の板扉を付け、屋根は萱葺きで勾配が大きくなっています。神宮の建物が、粃や初穂を保管する「倉」の原型であります。銅鐸に描かれた高床の穀倉建築が神宮の神明造りであり、弥生時代の人びとは高倉に米を貯蔵し、その下に集合して神籬を立て祭事を営んできた様子がみられます。

神宮式年遷宮が二十年に一回行われる意味は、一つに屋根の用材である萱の耐用年数がほぼ二十年であると言われます。二つ目には、人生六十年にして二十歳で使い走りをし、四十歳で棟梁を務め六十歳にして監督となる。それが技術伝統、継承の合理的な周期であるといわれます。三つ目には、先に説明した天武天皇がお定めになった頃に大陸から先進的な暦が伝えられ、十九年七ヶ月に一回元旦と立春が重なることからそれを採用したとも言います。四つ目には、人生一代は一世の意味で、「世」は「廿」と書くことから。そして五つ目に、日本文化は先に述べたように、稲穀類を最重要なものとして生活してきました。国税や地方税即ち租税に適用させてきたわけで、それらは生活に欠くことの出来ない

行為でもありました。具体的に言いますと、古代国家において法律を制定して制度化した律令制度に見られます。「養老倉庫令」に五穀は九年間貯蔵せよ、蕎麦や胡麻を雑穀といい二年間貯蔵せよ、米を蒸してそれを乾燥させた「糴」^{ほし}は二十年間を貯蔵期間とせよと示されました。税としての穀物を貯えて神宮の造営にあて、二十年ごとの住吉・香取・鹿嶋のために用いよ。神税が不足すれば国家が管理している正税^{しょうぜい}を充てよという制度であります。こうして神宮の建物様式や神社建築は、私たちの生活と密着してきました。

今日、生を受けた私たちは、日本の美しい自然と風土に見守られて息づき、脈々と流れてきた伝統を守る義務を負っています。お一人おひとり元気に過ごしていただき、今あることに感謝して歩んでいきたいと思えます。

(滋賀県 老杉神社 宮司)

「女性宮家」創設は女系天皇導入の隠れ蓑

石 塚 智 康

お話の前に去る六月六日午後三時三十五分薨去なされました

三笠宮寛仁親王殿下に哀悼の誠を表しますとともに御霊安らかならむことをお祈り申し上げます。

「女性宮家」創設は女系天皇の隠れ蓑であります。

昨年十月羽田宮内庁長官が野田総理に「女性皇族の方は婚姻で皇室を離れる制度になっているが、皇室活動の安定性から『女性宮家』を創設した方が良い」と進言したことから、俄かに世を騒がすに到った事は皆様ご承知の通りです。

先ず「宮家」とはどういうものか。

宮家とは皇位継承権を有する男子を当主とする皇族ご一家のことを意味しています。

皇族男子は成人されて結婚等により、天皇から〇〇宮家という宮号を賜る慣わしがあります。

そもそも皇室は天皇を中心とする一大家族であり、宮家の創設は皇位継承の有資格者を確保するために置かれるものであります。

別の見方からは血統、血の伴走者であります。

端的に言えば、いざと言う時に天皇を出す役割を担った家のことです。

野田総理は国会で有村治子参議院議員の質問答弁に「女性宮家」創設は

①天皇陛下のご公務を軽減すること

②皇室活動を維持すること。

の二つを挙げています。

先ず天皇陛下のご公務を軽減することと言うのは嘘です。

天皇陛下のご公務には、宮中祭祀、国事行為、公的行為、その他の行為と凡そ四つに亘っています。八月十五日の全国戦没者追悼式典や外国からの賓客の歓迎行事など天皇陛下固有のご公務もあります。

宮中祭祀を除いて国事行為公務の代行がお出来になるのは皇太子殿下のみであります。

陛下が昨年のご入院の時や今年の心臓バイパス手術をお受けになられた時、陛下のご公務の臨時代行をなさったのは皇太子殿下でした。

特に天皇陛下のご公務の最も重要な宮中祭祀など「女性宮家」を創設しても何も出来ません。宮中祭祀は女性特有の体の仕組みから御奉仕することは不都合であると漏れ賜っております。

ですから「女性宮家」を創設したから天皇陛下のご公務の軽減という野田総理の説明は全くの大嘘であることがお解りでしょう。いや「女性宮家」が解っていないのです。

女性皇族のお方もそれぞれご公務をお持ちですが、それは個別のご公務であつて、天皇陛下のご公務を担っていらっしゃる訳ではありませんから、結婚されて皇籍離脱されたから天皇陛下のご公務にしわ寄せが来るので「女性宮家」を創設しなければ。と言うのは理由になりません。

ちなみに内親王ないし女王が皇籍離脱されてもご公務に準ずる形を残せないかという議論もありますが、例えば天皇陛下の姉君であられる池田厚子様は伊勢の神宮の祭主のお勤めを果たしておられますし、この度の第六十二回神宮式年遷宮に際しては黒田清子様が臨時祭主として池田祭主さまを補佐なされます。勿論ご両方とも皇籍離脱していらっしゃるんですが、これら真にご公務に準ずるお仕事ではありませんか。

今回政府は「女性宮家」創設は皇位継承と分けて議論すると、聞こえは最もらしく耳に

入りますが、宮家創設には必ず皇位継承が付いて回ります。

この「女性宮家」を創設すると困ったことが起こってきます。

それは、皇族と全く関係のない血筋の民間の男性を婿に入れても良いか。入れた場合、次のような重大かつ困難な問題が起こります。

①入ってきた男は即皇族とするか否か。

仮に皇族とした場合、この婿さんの呼び名と敬称をどうするか。

②更に生まれた子供の身分はどうなるか。

皇族とする場合、皇位継承権を付与するか。

もし皇位を与えるならば、神武天皇以来一貫して続いてきた万世一系が崩れるのです。歴史上初めて女系天皇になるのです。

ここが「女性宮家」創設は女系天皇導入の隠れ蓑であります。絶対許せません。断じて避けるべきです。

これまで側室制度があった時代でも皇統の危機がありました。四つの世襲親王家により（伏見宮、桂宮、有栖川宮、閑院宮）本家が途絶える時は宮家から天皇を出して乗り越えた例が四回あります。

①第二十六代継体天皇に継承時十親等から

②第一〇二代後花園天皇は伏見宮家から

③第一一一代後西天皇は有栖川宮家から

④第一一九代光格天皇は閑院宮家から出られて今日まで男系に因る天皇を継承してこられました。

この閑院宮家とは第一一四代中御門天皇の弟宮直仁親王が閑院宮家を創設され、孫に当たる祐宮師仁親王が第一一九代光格天皇に即位されたのです。

この後第一二〇代仁孝天皇、第一二一代孝明天皇、第一二二代明治天皇、第一二三代大正天皇、第一二四代昭和天皇、第一二五代今上天皇と続いているのです。

でありますから、今のご皇室は閑院宮家からの血筋であります。

因みに光格天皇のご生母は大江磐代君というお方で鳥取県倉吉市からお出のお方であります。今年は没後二〇〇年に当たります。

終戦までは十四宮家がありました。が、昭和二二年一〇月GHQは、昭和天皇の弟宮、秩父宮、高松宮、三笠宮の三宮家のみ残して、十一宮家を皇室の財産上のため、との理由から強制的に臣籍降下させました。が真の目的は国民の心が一つになる天皇制をおそれたG

HQの方策でした。これにより昭和天皇のお気持ちを表し、当時の宮内府次長から「万が一にも皇位を継ぐ時が来るかも知れないとのご自覚の下で身をお慎みになっていただきたい」とのお願いをしています。

この言葉を旧皇族の方々は重く受け止められて居られ、その内の武田宮家の作家で慶應義塾大学大学院で教鞭をとって居られる武田恒泰氏はこう書いておられます。

「女性宮家」についてはほぼ全員が違和感をもっています。そして皇統の安定的維持ということについて、皆真剣に捉えており、皇位は伝統に則り男系により継承されるべきと考えている方々が全員です。また、いざ皇籍復帰を求められる可能性もあるということについては、それなりの責任を果たす覚悟をしている方もたくさん居ます。

私の調べた限りでは旧皇族の一族には四宮家に未婚の男子が九人居ます。その内悠仁親王に歳の近い未成年が四人居ます。結婚した若い夫婦も数組居ますので近いうちに何人もお子さんが産まれるのではないかと期待しています。と書いていらつしやいます。

このことから更に必要に応じては、旧皇族の方のご意見を拝聴する機会もあって良いと考えます。

また、三笠宮彬子女王殿下は、毎日新聞のインタビューに「今の議論は女性宮家を創設

するかしないかのみになっていような気がして、そこには違和感があると申しますか、男系で続いている旧皇族にお戻りいただくとか、現在ある宮家を養子として継承していただくとか、他に選択肢もあるのではないかと思います。女性宮家の議論だけが先行しているように感じられます」とお答えになつておられます。

ここに今回の正しい答えがあると思います。

結婚を控えていらっしゃる成人皇族の最年長で、女性宮家の議論の行方に大きく左右される渦中の方の違和発言の意味は大変重いものと受け止めています。

結論は、女系天皇への道を開くことではなく、国民の総意に基づかないで強制的に臣籍降下させられた皇統の血を引いていらっしゃる旧皇族の方々の皇籍復帰ではありませんか。このことこそ急ぐべきであります。

もうGHQは存在しませんから。日本国民の意思で可能です。

従つて旧皇族の方々の皇籍復帰が実現すれば「女性宮家」創設の議論は必要なくなつてしまします。

どうか皆様も賛同していただきまして、それぞれのところでお声を発していただきますようお願い申し上げます、私のお話とさせていただきます。

ありがとうございます。

(鳥取県 山根神社 宮司)

小さな一村社の記念事業

村 田 和 之

自然を崇拝し祖先を崇拝してきた日本民族。祖先の神は自然の中の神に迄通じ、自然の力の恐ろしさを教え伝え来た。今、その教えを軽視した報いであろうか、或は警告を發せられたのでありましょうか、昨年の三月十一日、私達は後世に残り語り継がれる程の大変恐ろしい体験をいたしました。

国内観測史上、最大といわれる三陸宮城県沖を震源とする、マグニチュード九・〇の巨大な地震は想像を絶する津浪を生み、岩手県の港町をなめつくし、宮城、福島と被害を広め、福島県の東京電力第一原子力発電所の爆発事故を生み、一年半を過ぎても未だ放射能におびえる毎日であります。

人間の力ではどうすることも出来ない自然の力、その偉大さは、稲作民族である日本民族は、よくよく承知しているはず。「口元過ぎれば熱さ忘れる」のことわざの如く、長引く被災地の復旧は人災だと言われているようですが、今一度日本の気品のある尊い教えを考えて

みる必要があるのではないでしょうか。

日本の神は全知全能ではなく、時にはあやまちを犯し、改め、よりよく自他を高める神であり、自己反省のできる神であり、又、自己反省をする神でありました。観念で描かれた神でなく、生命そのものが神であり、自分から成長発展し、自ら皮を脱いで成長する神。どの神もどの神も絶えず成長を続け、自己完成への道を歩んで来ました。

平和ボケし、油断した中に、今、ロシア、中国、朝鮮と廻りの国々により、スキあらば自分の領土と虎視眈眈と狙われ、攻めてきているのであります。

一方、今年二〇一二年は人類が全て滅亡するという説がまことしやかに吹聴されているのであります。今、地球の軸がずれている時、マヤ文明、人類滅亡説によると今年の十二月二十一日より二十三日頃、大きな一つの区切りを迎え、地球、太陽、天の川銀河の中心にある、ブラックホールが共に整列し、異常気象が発生し、新しい太陽の時代が始まるといわれています。

又、今から四五〇年前、史上最大の未来予言者、ノストラダムスの予言の中に「太陽が昇り巨大な火が見られる、轟音と閃光が北に向う、球の中に死と叫び声が聞え剣により死、火災、飢えが待ちうける」と二巻の九十一番に、又、六巻の七十番には「全世界の真の指

導者は偉大なチラン（日本）だろう、たいそう敬愛され後、祝宴、その名声と賞賛は空を超えて覆う、それなのに勝利者は称号だけで満足する」と。

人類の滅亡を予言し、その中で人類滅亡の危機を救うのは、アジア民族、チラン（日本人）であると、未来を見つめ人類の英知と愚かさを同時に考え救える道を説いているのであります。

ノーベル物理学者「アインシュタイン」は伊勢にお詣りされ、こう残されました。

「私はこの様に尊い国が世界で一箇所ぐらいはなくてはならないと考えていた。なぜなら、世界の未来は進むだけ進み、その間、いく度か戦いは繰り返され最後に戦い疲れる時がくる。その時、人類は真の平和を求め、世界の盟主を挙げなければならない。この世界の盟主たるものは、武力や金力ではなく、あらゆる国の歴史を超えた最も古く、また、尊い国柄でなければならない。我々は神に感謝する、我々に日本という尊い国を作っておいてくれたことを」と。

日本民族の中心は天皇陛下であり各地域の中心は神社であり、その神社に奉仕しているのが私達神主であります。

神社は地域の皇居であり、司令塔であり、知恵袋であり、リーダーシップを取る拠点で

もあります。私達一人ひとりのローソクに炎を燃やし地域の周りを明るく照らし輝かす司令塔でなくてはいけないのであります。

私は小さいながらも一村社の宮司の息子として生を受けました。戦前のことにて父は公務員として務め、神社には年三回の例祭に奉仕する…神主の常駐しない社でありました。しかし、地域の人々の要望に応えるべく私は一人奉仕することになりました。

何せ今まで誰も居住していない社、一人として参拝者も無く無収入で毎日境内の清掃奉仕で明け暮れる日々でありました。

着任した当時、鳥居には注連縄も付いていない、草ぼうぼうの境内地。子どもの遊び場として近所の人々は考えていた様で、朝夕のお日供の太鼓の音にも響きでガラスが割れるから止めてほしいとの意見が出てくる始末。私は早速三つの誓いを立てました。「朝夕の定刻太鼓、注連縄を自ら作成する、正月の拝殿前の門松飾りを作る」三つです。そして、十年毎に小さくとも記念事業を計画実施致しました。

当初は玉垣、三期に分けて実施、次いで昭和天皇御即位六十周年記念、今上陛下御在位記念、そしてこの度、御鎮座一一四〇年記念事業として社務所を改築完成することが出来ました。貯蓄も無い無傍な計画ではありましたが七月末無事完成。

私は常日頃、百歳を超えても気力と情熱をもつて生涯現役を貫いた、世界最高齢芸術家平櫛田中の言葉を思い出すのであります。

「今やらねば何時できる、わしがやらねば誰がやる」

「無から有を成した神主」として石井寿夫先生に見出され、教え導いて戴いた尊い言葉を思い起し邁進する毎日であります。神に授かった尊い生命。私達は自分から乞い願って生れ出た者ではありません。神の御計らいにより生れ来た生命。この世で思い残すことも無く燃焼するには如何にすべきか、生命を掛けた神明奉仕の中には神霊現象も起こって当然の成り行き。

世界中が、日本が荒れ荒んでいる世の中、小さくとも後世に残し伝える指令を忘れたならばこの日本の国は滅び亡くなってしまうのであります。

成せば成る成さねばならぬ何事も成らぬは人の成さぬなりけり

(広島県 長束神社 宮司)

日本人のこころ

佐 古 一 洌

日本人の長所、美点は数々ありますけれども、敢えて挙げよと言われるならば、神洲清潔の民、誠心の持ち主と断言したいのであります。

『声に出して読みたい日本語』で一躍雄名を馳せ、『美しい日本人』という本を書かれた齋藤孝さんは、日本人の得意技六つを挙げておられます。すなわち上機嫌文化・子供天国・身体から入る・気づかいを育てる日本語・はかなさを愛でる、そして、とにかく流すであります。齋藤氏は「湿度が高くてすぐに肌がべとべととしてしまうからフランス人などと違って日本人の性生活も淡泊で、さっぱりしている」という谷崎潤一郎のコトバに続けて「高湿度地に住む民族はべとべとした体を水で洗い流したい欲求が強くなる。日本人の風呂好きから判るように、とにかく日本人は洗い流す、捨てる、落としていくという行為が大好き。それは肉体的な意味ばかりではない。日本人は精神的にも洗い流したいという欲求を強く持っている」と主張されます。

いつまでもネガティブな感情を心の中に溜めておくのは嫌だ。早く洗い流してさっぱりしたい。それが日本人の精神の基本であります。

余談になりますが、その考えの延長線上として、日本人は最も憎悪心の少ない、又永続きしない国民であります。つまり昨日の敵は今日の友となります。

例えば、日本は戦争でアメリカから全国を爆撃され、かつ広島、長崎には原爆まで落とされていながら、そうした過去をすっかり水に流し、いまやアメリカ文化万々歳であります。

かく考えますと、今日本と中国・韓国の間さまざまな軋轢が生じておりますが、これは日本人と、かの国々の人達との特質の違い――洗い流すと過去にこだわる――に大きな一因があるのではないかと思われます。それは兎も角としまして、ご承知の通り神話の中で、天照大神が山川を動とよませて昇天してきた弟のスサノヲノミコトを待ち受けて「何の故にか上り来つる」と問われました。スサノヲノミコトは「僕は邪あき心なし」と答えそれによつて許された場面があります。

日本人は古来より邪き心なく「清き明き心」を最も大事にして来た民族であります。そして古事記解釈の多くはこの「清明心」が天皇への絶対的随順の心であると説いております。

す。

古代から「私」「私心」は穢と見られ、日本人にとって最高の徳目は「清く明るく直き正しき心」であり、私心を滅却することにあります。

天武天皇は飛鳥浄御原に於いて冠位十二階位を制定なさいました。「明浄正直勤務追進」であります。その意とするところは、官僚役人すなわち為政者たる者常に「明るく清く正しく直く勤め励めよ」とのお悟しに他なりません。

それは中国の最高の倫理徳目としての五倫、「仁義礼智信」とは全く異なるものであります。私を否定し、共同体或いは大君への滅私奉公であるべき「清く明るく正しい心」を持つ、これが日本人の究極の価値観なのであります。

雲ひとつない晴れ上がった空を「日本晴れ」と申します。これも又一点の汚れもない日本人の心境を如実に表わすものであります。

この「清き明るさ」は又誠心・真心にも通じます。

それこそ神代の昔から続く、やまとの感性なのであります。

「清き明るさ」から来る「誠」は最も寛容な教えであり、様々な道徳的教訓の基礎はこの一語の中に含まれると言ってよいでしょう。そして我国古来の語彙の中には「まこと」の

一語を除いて他は所謂倫理的概念を表わす言葉がないと言つても過言ではありません。

日本人の裏表のない素直な心＝明るく直き誠心、これが日本民族の遺伝子、DNAであります。

私達が確実に身体でつかんでいる精神・心、それは文化・文明と置き換えていいかも知れません。

かく考えますと、キリスト教文明やイスラム文明がなくなることがないように、日本文明がある限り、日本人の清く明るい「心の美しさ」もなくなることはないのです。

心身清潔にして、義を見て明決する者は大日本人と称するを得

これは教育者杉浦重剛の言葉でありますが、我々は一人一人「大日本人」として雄々しく生きて行きたいものであります。

(京都府 松尾大社 宮司)

い英霊十三秒の思い

河 本 文 夫

万倉護国神社には元治元年の禁門の変でその責めを負い二十三才で自刃された万倉の領主、国司信濃藤原親相公を主祭神に、先の大東亜戦争までの殉国の志士二百四柱の御霊をお祭りしております。戦後半世紀以上が過ぎ、平和なときが流れております。ところが戦後五十年の平成七年、阪神淡路大地震、そしてその十六年後、今度はサンフランシスコ講和条約から六十年、還暦にあたるその年、またもや眠りを覚ますような自然災害。第三の敗戦とまで言われる昨年三月十一日の東日本大地震。神は我々日本人に何を告げようとしているのでしょうか。

戦後、日本が始めて味わった占領という国難。その占領がサンフランシスコ講和条約によつて解かれ、日本が敗戦で失われた主権を回復し、欧米に追いつけ追い越せと、その経済的發展は目覚ましいものがありました。日本人が持っていた多くの美德を忘れてしまった感じがいたします。

それは忠義、孝行、公に仕えるなど、これらはいかなる時代にあろうとも、人間の美德であるはずでございます。しかも、国を思う、守るといふ崇高な精神も、薄くなり、戦争賛美と結び付けられる自衛隊。しかしその活躍が再認識された昨今でありました。又最近わが国固有の領土でありながら領土問題など近隣諸国が係争を仕掛けてきており、国を国たらしめているものを認識することに及んだのは神のお告げなのかもしれません。

ここに奉り申し上げております御英霊、今の日本をどのようにお思いでしょうか。父母と別れ、祖国を思い、命を掛けて戦い、靖国神社で又会えると散華されたご英霊。あまりにも社会の規範が変わったのに驚いて涙を流されているかもしれません。しかし、先の地震では、日本人の見せた行動に、海外から絶賛されました。日本人には、まだその心が残っております。本日は、この二回の大地震で、災害復興対策に極めて大きな力を発してくれた、自衛隊に光を当てて話を進めてみたいと思います。まさに教育勅語の、「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」であつたといえるでしょう。

被災地の方からは、自衛隊の活動に感謝の声が多く寄せられております。その活動をまのあたりにした、小中高校生は将来自衛官になることを、目標にする子もたくさん居ると聞きます。なくなられた方のご冥福を祈りながら、こんな素晴らしい良い話題があふれる

ことは、希望ではないでしょうか。しかし、マスコミにはあまりこのような話題が取り上げられないような気がします。同じ民族の心を打つ良い話は子供に誇りを持たせます。今回の震災での自衛隊の活躍、又米軍の友達作戦の活躍なども少し報道しても良いのではないかと思います私だけでしょうか。仙台空港などのあの復旧の速さは米軍の力です。一般の力では不可能でしょう。

阪神淡路地震での、あるエピソードを紹介してみましよう。

これはある方が、たまたま旅行先での駐屯地祭の日にあたり、目の当たりにした出来事でございます。その駐屯祭には例のごとく、変な団体が来て見学者はいやな気分させられるのですが、その団体に向かって一人の少女がマイクで怒鳴っているのです。

少女「あんたら地元の人間か？」

団体「私達は全国から集まった平和を守る市民団体で……云々」

少女「で、何しにきたんや？」

団体「憲法違反である自衛隊は戦争賛美につながる……云々」

少女「私は神戸の人間や。はるばる電車に乗って何しにここまで来たかわかるか？」

団体「……？」

少女「地震で埋もれた家族を助けてくれたのはこの部隊の人や。寒い中ご飯作ってくれて、風呂も沸かしてくれて夜は夜でパトロールしてくれたのもこの部隊の人や。私は、その人たちにお礼を言いに来たんや。あんたらにわかるか？消防車が来ても通り過ぎるだけの絶望感が。でもここの人らは歩いて来てくれはったんや……」

最初、怒鳴り散らすように話し始めたその少女は次第に涙声に変わっていった。

あまりにも印象的だったのではっきり覚えている。団体は撤退。

彼女は帰る際、守衛が彼女に社交辞令の軽い敬礼でなく直立不動の敬礼をして送っていったのが思い出される。

この少女の思いは、被災当時、心細かったに違いありません。そこに力を差し伸べた自衛隊に、ありのままの言葉で感謝の言葉のべたかったのでしょう。口だけの平和主義団体の行動がやるせなかったのだと思います。

さて、いまから紹介致します事故、みなさんまだ記憶にあるでしょうか。私はこの事故当日所用で、和光市に出かけており、よく記憶に残っているのですが、平成十一年十一月二十二日午後一時四十五分頃。航空自衛隊入間基地所属のT-三三型ジェット練習機が埼玉県狭山の入間川河川敷に墜落しました。その際、東京電力の高圧送電線を切断し、東

京・埼玉の約八十万世帯で停電となりました。そして二人のパイロットが亡くなりました。電線切断による停電は都市のもろさの再認識となり、マスコミの論調は「税金の無駄使い、住宅街にある基地への非難」的な、冷淡なものであったと思います。

この事故を朝日新聞は、「東京・埼玉の八十万戸で停電がおこった。埼玉の狭山で空自機が墜落して高圧線を切断したからである。これにより交通・ATMも乱れた。空自機の二乗員は死亡した」と、なんとあまりにも、自衛隊に冷淡な報道ではないでしょうか。

さて、みなさん何か疑問をお持ちではないでしょうか。もう一度言いますよ。耳の垢を取り除いてよく聞いてください。一般人の知識でもおかしいなと思うはずです。T-33型ジェット練習機が河川敷に墜落し二人のパイロットが亡くなりました。

ジェット練習機と言えども、ジェット戦闘機の練習機版です。そうです練習機といえども緊急脱出装置は装備されております。何かあったら、機体を捨てて、緊急脱出装置を作動させ、人間は地上に帰還できるのです。

それなのに何故、お二人のパイロットが亡くなったのか？ 気が動転し、脱出できなかったのでしょうか。それとも装置が作動しなかったのでしょうか。

報道によりますと、この練習機を操縦していた中川尋史二等空佐（四十七）と門屋義廣

三等空佐（四十八）は共に飛行時間五千時間超のベテランのパイロット。このベテランのパイロットが、動転するはずはありません。何か、何かがあったに違いありません。

事故後、事故調査委員会の報告からある事実が判明します。この謎を解き明かすため事故の順を追って振り返ってみましょう。T-三三型機は操縦士の技量維持の為基地を離陸しました。そして訓練を終え帰路に就いた同機から「マイナートラブル発生」と無線連絡が入ります。その後「コクピットスモーク」の連絡が入ります。その時機体には異常が発生。燃料コントロールユニット付近で発火し、エンジンは停止していたのです。そして「エマージェンシー（緊急事態）」を宣言。両パイロットは、人間基地への帰還を試みますが、エンジン一基のみのT-三三型機は、推力を失い、落下する鉄の塊と化して、コントロールは非常に難しく、基地への帰還は不可能、しかも安全脱出高度六百メートルを切り、もはやこれまでと二人は基地への帰還を断念、「バイルアウト」と緊急脱出を管制塔に通報。しかし、緊急脱出を宣言したにも関わらず二人は脱出していませんでした。

なぜか？それはできなかったのです。二人は眼下の光景に気づいてしまったのです。眼下には住宅が密集していました。機体を捨てて脱出すれば自分たちは助かります。しかし、住民へ被害が及ぶのは明らかです。「バイルアウト」を通報したときから二人の壮絶な戦い

が始まりました。

空地だ！空地はどこだ！おそらく彼らの頭の中はそのことだけだったでしょう。二人のパイロットにとって、人生で一番困難なミッション（使命）ではなかったのではないのでしょうか。

コクピットには煙が立ちこめ、五千時間を超える経験を持つベテランパイロットでもパニックにおちいってしまう状況下。持てる技術を駆使し必死に機体をコントロール。最低安全脱出高度六百メートルはとくに過ぎ、もはや生還は絶望的でした。しかし、なんとか河川敷に機首を向け住宅地への被害を避けられることを確信した二人はもう一度叫びました「ベイルアウト」と。それは、最初の「ベイルアウト」から十三秒後。このとき緊急脱出のボタンを押されたのです。助かることは無いのが判っていたいながら。

地表が目前まで迫り、機体は高圧電線を切断、入間川の河川敷の北側に広がる狭山ニュータウンの住宅街をさけ、河川敷のリバーサイドゴルフ場コース内に墜落。一人の方のパラシュートは半開き。もう一人の方は全く開かず、地面に叩きつけられお亡くなりなったのです。市街地上空の事故でありながら、一般市民に被害が及ばなかったのは不幸中の幸い、奇跡と言つていいでしょう。

最初の「ベイルアウト」から十三秒後、再びの「ベイルアウト」、その瞬間、彼らの脳裏をよぎったものは、何だったのでしょうか、日々の訓練がこのような事態で終わることへの無念さでしょうか、民家や学校を巻き添えにせずに済んだという安堵感でしょうか。それとも愛する家族の顔でしょうか。

高度百メートルを切って、この高度では助かることは不可能と知りながら、脱出装置を作動させられたお二人のその冷静沈着な行動。それは、同僚自衛官のこの言葉に集約されていると思われます。

「私どもは、最後の瞬間に、わずかでも時間があれば、脱出装置は作動させます。そうしないと、脱出装置を整備した整備員に、要らぬ心配をかけますから」そこまで考えられた操縦。まさに完璧な操縦だったと思われるのです。他人の命と自分の命の二者択一を迫られたとき、迷わず他人を選ぶ、この犠牲的精神の何と崇高なことでしょう。皆さんはどうですか。

昨年の大地震、大きな揺れの後、津波の来襲と高台への避難をひたすら呼び掛け続けた宮城県南三陸町で防災放送の担当職員だった遠藤未希さん（二十四）のことが思い浮かべられます。埼玉県では遠藤未希さんのことを教材として作成、公立の小中高約千二百五十校

で使われと聞きました。しかし、前述の二人の自衛官の出来事はいかがでしょうか、これこそ教科書に載せるべき価値があると思うのであります。私立狭山ヶ丘高校の小川校長は、二人のパイロットの行為を「犠牲的精神」、「英雄的死」という言葉で高く評価され、学校通信「藤棚」につづられ、教科書に載せるべきだと断言しておられます。

皆さんはこのような英雄的死を選ぶことができますか。しかし、おそらく皆さんも同じ選択をされると思います。実は、人間は、神の手によつて、本来そのように作られているのです。しかしそれは教育、志、常日頃の心がけによるところが左右するものではないでしょうか、人間は本来、気高く偉大なものなのです。母は我が子のために、父は家族の為に命を投げ出して戦います。それが人間の本当の姿なのです。その愛の対象を、家族から友人へ、友人から国家へと拡大していった人を我々は英雄と呼ぶのです。その英雄の霊。即ち英霊なのです。

先の大戦で、多くの方がなくなりました。「自分の命を投げ打つことにより、わが国が救えるなら」と、同じような思いではなかったのではないでしょうか。その崇高な、その思いを忘れる事があっては、ご英霊に申し訳が立ちません。明治天皇さまが崩御され百年となります。日本人が我欲になり、公を忘れ、あの教育勅語の「一旦緩急あれば義勇公に奉

じ」が日本を救うひとつのキーワードになる気がするのです。ご清聴有難うございました。

(山口県 宮尾八幡宮 宮司)

神社の森で心に潤いを

村瀬佳子

皆様、こんばんは。今日は社務所建て替え工事、めでたく竣工を迎えられお慶びを申し上げます。記念行事の一つとしてハープ演奏奉納させていただきますこと、光栄に思っております。

先ずは外国の曲でありますが二曲続けて参りたいと思います。

(ハープ独奏)

ありがとうございます。どうして神主さんがハープを弾くのか不思議に思われるでしょう。実は七年前に小さなハープを先生からお借りして弾いて居りました。なかなか自分の楽器を持つという事が難しく中断しました。

それが、二年前平成二十二年に行われた中国地区女子神職研修会に参加しました時、素晴らしい出会いがありました。

講師の山根ひろみ先生は京都平野神社の宮司夫人。プロのハープリストとしてオーケスト

ラと共演されたり神社でコンサートをなさったりと御活躍です。

ハープを断念していた私は、山根先生にこのような年齢からハープをはじめても上達しますでしょうか。とお尋ねしましたら、

「大丈夫ですよ。きっと弾けるようになりますよ」

とのお言葉。先生の演奏に感動、研修を終え自宅に帰ってすぐに加藤裕子先生という以前習っていた先生の門を再びたたきました。

そしてその年の暮れに念願のグランドハープ、自分の楽器を持ちまして、持ったからには氏子の皆様にお社で聞いていただけたらと考えて居りました。

このハープの音色には不思議な力があるのです。私の知人のお嬢様、結婚され御子を授かりました。双子の赤ちゃんを帝王切開で出産。一人はお腹の中で息絶え、もう一人助かった赤ちゃんも重度の障害を持ちました。その赤ちゃんは小学生になったのですが、学校で先生が特別に聞かせてくれるおもちゃのハープの音がすると大変に喜んで表情が豊かになるのです。

ぜひこの子の為にハープを弾いてもらえませんかというご依頼に早速ミニコンサートをさせて下さいと今準備を進めている所です。

人が亡くなる時、最後まで残るのは聴覚だと言われます。脳波が動くことで確認されています。音の響きには人の心を動かす力があります。

さて、今日は雅楽と一緒にハープ演奏奉納させていただきます。うまく合うのかなと思われるかもしれませんが、実はこのハープという楽器は、古代アッシリアですから、メソポタミアの一部（イラクの辺り）を起源として中国、朝鮮半島を経由して雅楽器の一部として日本に入って参りました。

その名を箏くわ篋こと申します。し字型で二十三本の弦を張ったものでした。

この雅楽、一三〇〇年前に日本に伝来し、世界最古のオーケストラと言われます。私達の住む東洋ではこの豎琴は廃れてしまいました。現在復元して演奏して居られる方もいらっしゃるようですが、間違いなく日本に伝わっていた証拠に奈良の正倉院に大切に保管されています。これをお蔵入りと申しますが、正倉院に納められたお蔭で当時の楽器を現在生きる私達が見ることが出来る幸運に恵まれました。まさに天皇様のお蔭です。

また、雅楽は皇室や大きな社寺で伝えられました。しかも千年以上の長きにわたり形が変化しませんでした。

これは日本の国柄をよくあらわしています。時代が変わってどのように力の強い人物が

出て参りましても皇室が一番上、御皇室があつたからこそ雅楽は栄えました。

世界に誇れる尊いことです。

今日はこの社務所竣工の佳き日に、日本で守り伝えられた雅楽器と、西洋で発達した豎琴ハープとが再会し優しく混じり合うハーモニーをお届けしたいと思います。

越天楽幻想曲です、今日は宮司と二人でお届けしたいと思います。

(ハープ・雅楽コラボレーション)

さて、今私が弾きましたのは豎の琴ですが、日本にはもともと和琴という琴があります。雅楽の中でも演奏されとても神秘的な音がします。また、琴というものは大変高貴なもので、神聖なものとされてきました。

「因幡の白うさぎ」皆様ご存じでしょう。その主人公オオナムジの神はこのお話の後、スサノオの命の娘スセリビメと恋に落ちます。恋する男性が女性のお父様に結婚を許していただく為には今も神話の昔も変わらず、関門を突破しなければなりませんね。

このお二人の神様も結婚を許していただくのに、たくさん難題を解決されます。そして最後に

「其の妻須世理毘売を負ひて、即ち其の大神の生大刀と生弓矢と、其の天の沼琴とを取り

持ちて逃げ出でし時に、其の天の沼琴、樹に払れて、地、動み鳴りき。」

妻スセリビメを連れて逃げ出そうとした時、天の沼琴が樹に触れて大地が揺れるほど鳴り響いたのです。

そして父のスサノオの命に許されて、オオナムジの神は大国主の神となって大勢の御兄弟を追い遣つて初めて国を作る事となるのです。

刀・弓・琴の三つが国を治める象徴でもあったのです。

また、第十四第仲哀天皇は、「神依せ」と申しまして、琴を弾いて神様のお告げを求められます。結果を不満に思い、この神はウソをつくと思つて琴を弾くのを止めてしまいます。建内宿禰の取り成しで再び弾きはじめました、とてもいい加減な弾き方をなさつたため天皇は琴の音が聞えないなと思つたら、すでに崩御なさつていたのです。

皆さん、そこで考えてほしいのです。神様はけしてお優しいだけでなく、厳しい一面も持つて居られるのです。天皇様でさえ神意に叶わなければ死に至らしめるそのような存在なのです。

このお話から、琴が神様の御神意を伺うための神聖なものであったことを知ることが出来ます。

これらは今年で編纂千三百年を迎える「古事記」の中に語られています。来月の月次祭で皆様と読みたいと思います。

それでは最後になりました。何といっても皆様の氏神様を思う尊いお心が結晶となつて社務所が立派に出来上がりました。故郷をお届けしたいと思います。ハーモニーを口ずさんでいただけると嬉しいです。

（ハーブにて故郷演奏）

神社の御神徳が増し、神様のお力をさらに皆様がいただかれますようにお祈り申し上げます。本日は本当におめでとうございます。

（広島県 長束神社 権禰宜）

皇居勤労奉仕を終えて

芦原高穂

以前より皇宮警察に勤務する友人より、「俺が勤務している間に、是非皇居勤労奉仕にこい」と云われておりまして、いよいよ彼が定年退職目前となり、思い切って実施いたしました。その時の経験談を御披露したいと思います。

この皇居勤労奉仕は、一団体十五名以上で、年齢七十五才以下との条件で、当たり前事ながら性別による区別はありませんが、健康で作業に十分あたることの出来る体力を求められます。

その歴史は古く終戦直後の昭和二十年十二月、まだ大戦の傷跡生々しい中で、宮城県の団体が空襲で皇居の痛みが激しいことを聞きつけ、その整理のため最初の奉仕を申し出られたのでありました。

国中がいまだに食料不足で、どこへ行くにも食料持参が当たり前、首都東京は焼け野原のなか奉仕をされたと云います。

そのような歴史の中で、時の昭和天皇は香淳皇后と共に必ずこの勤勞奉仕団とご会釈という形でお目に掛かれ、正に皇室と国民をつなぐ大切な紐帯であったといつて過言では無いと思います。

私どもは本務の旭川神社と境内神社で英霊を祀る顕勲神社奉賛会の共催という形で計画し、お陰様で二十四名が参加して下さいました。

いよいよ三月四日、雪深い旭川空港を出発、羽田空港に到着し、直ちに九段に護国の御英霊、殊に故郷の肉親の御霊に奉仕を報告し、勤勞奉仕の無事を祈願するべく靖國神社に正式参拝を済ませ、宿に入つたのであります。この時期天皇陛下は心臓の外科手術を終えられ退院された日に当たり、楽しみにしていた天皇皇后両陛下のご会釈は望むべくも無いと諦めておりました。

翌日は、朝から氷雨、指定の桔梗門前の詰め所に旭川神社顕勲神社勤勞奉仕団であることを告げ、四列縦隊で皇宮警察による人数確認を終え、休憩所である窓明館に並んで参入し、他に六団体が奉仕され、我が団体と併せて百十名を超える人数の奉仕でありました。

初日は、勤勞奉仕に関する説明に引き続き、恒例で宮殿などの施設の見学が予定されておりましたが、宮殿の見学は大公使信任状捧呈式ということで、宮殿に入ることは出来ま

せんでしたが、この捧呈式に使用される馬車と騎馬隊の走行訓練に出会う事が出来まして、四頭立ての馬車二両と前後を警備する馬にまたがった警察官八頭が相当なスピードで隊列を乱さず走り抜けていく姿は壮麗で迫力のあるものでした。

天皇皇后両陛下の若かりし頃、初めてテレビで映された騎馬隊の車列を思い起こしていただければご理解いただけると思います。

正直今でもこのような行列が行われていることに驚きを感じたのは私だけではありませんでした。

二日目には、赤坂の東宮御所に場所を移し、春秋の園遊会の会場となる御苑の清掃を奉仕し、午後、皇太子殿下の御会釈をいただく榮譽を賜り、誠にありがたいことと感激を新たにした次第です。

また、三日目の奉仕作業では、皇居での各種催し物や祝宴に用いられる盆栽を管理している苗舗へも見学させていただきました。

皇居で一番古い盆栽が約六〇〇年前のものであり、その次が徳川家光愛用の盆栽である事など担当者に懇切に説明していただき、多くの盆栽は大切に保管され、それらは、大きなものは大人七名か八名の手作業で移動し、それぞれの催し物に応じて使用されるとの

ことでした。

また、毎年御自らお手植えされる水田や養蚕のための桑畑では草むしりの奉仕をさせていただきますました。

皇居内の様子は、これは陛下のご意志とのですが、修繕なども最小限にとどめ、一般国民の目に触れるような所はさすがに補修や道路も舗装されておりますが、内部の塀などは崩れるに任せているのが現状で、職員には儉約一層のお達しが下されているとのことでした。

一方でそのためか、江戸城を築城した太田道灌の手による道灌堀などもその当時の姿をそのまま残されていて、江戸城が平城というイメージがありますが、丘の上からその道灌堀をのぞきますと、外のお堀とは違って急峻な斜面に囲まれている、正にいくつかの丘陵を活用した平山城であることがわかった次第です。皇居内でこのようなところを歩いておりますと、東京都心であることを忘れてしまいそうで、車の音も耳を澄まさなければ聞かないほどでした。

さて、これは時をさかのぼる初日の事でしたが、雨に濡れながらの見学を終え、昼食を済ますと、宮内庁担当職員より放送がありました。「突然ですが、ご承知の通り天皇陛下ご

病氣のため、大変申し訳ないのですが、今回の奉仕では両陛下のご会釈はできないと思っておりますが、皇后陛下のたつてのご意向で、午後から皆様とご会釈されるとの連絡がありましたので、急ですが、午後一時にこの建物の前に団体毎に御整列下さい。ご会釈は参集所に移動して行われます」との事で、昼食を済ませ、指示に従って整列し、雨の中参集所にむかいました。

所内では、団体毎に整列し、ご会釈にあたっての動作を確認し、担当者からは「間違っても自分から話しかけたり、勝手な発言をしないよう」釘を刺されました。

隊列を崩すこと無く腰を下ろすなどして皇后陛下のご到着を待ちました

予定の午後二時ちょうど、陛下を乗せた御料車が参集所玄関前に到着され、質素なロングドレスを着用された陛下は、直ちに各団体長を先頭に団体員のご会釈が始まりました。はばかりながら手続きのこともあり、宮司の小生が長を勤めた関係で、列の一步前に出てお迎えを致しました。

三番目の団体でしたので、そのように並んでおりましたが、足早に各団体の長に声を掛けられ、いよいよ自分の番がやって参りました。

慈愛に満ちあふれた佇まいで、優しく

陛下 どちらからお出でになりましたか

芦原 北海道旭川市より参りました。

陛下 北海道ですか雪はいかがですか

芦原 今年は一際寒く降り積もった雪が消えること無く積み重なっていくために、この時期にしては大変多く、屋根の雪下ろしでは人が（雪の）下敷きになって亡くなる方がいるくらいです。

陛下 そうですか、（天皇）陛下もその事を大変心配されております。呉々もよろしくお伝え下さい。

芦原 ありがとうございます

とおっしゃって、次の団体へおみ足を運びかけておられたとき

陛下 団体の神社のお名前は

何気なくご下問下さいました、それであらためて

芦原 旭川神社顕勲神社奉賛会として参りました。なお、顕勲神社は戦没者を祀る神社です。

と申し上げましたところ、皇后陛下には、進めかけたおみ足を止められ、あらためて小生

の方へ向き直りました。

やさしさに満ちあふれたお姿の中に、一瞬言いしれぬ緊張のようなものが走られ、その眼差しは慈愛と共に大切なものに触れられたかのように、更に一步私の方へ歩み寄られ静かなお声で

陛下 お御霊のお世話をいただいているのですね。

芦原 左様でございます。

陛下 呉々もよろしくお伝え下さい。

とのお言葉を残されて次の団体に移られました。

拝受した言葉はそれだけです、甚だ不躰な申し上げ様ながら、優しさの中にも張り詰めた緊張感のような、皇后陛下のご様子にただならぬものを感じ、ただただ足の震えが止まらないほどでした。

後で冷静に思い起こしてみると、天皇皇后両陛下のみならず御皇室の方々は、一際御英霊への慰霊の真心は並々ならぬものがあると伺っておりましたが、凡人の小生が認識する以上に深いところで、両陛下には強固な紐帯として連綿とつながっていることを肌で感じた次第です。

このとき、自分を始め、御英霊のためにご奉仕下さる役員は、皆地域に生きるものとしての責務と心得ていると思いますが、今回のことで、これは正に天皇皇后両陛下の大御心を体し、両陛下に成り代わってのお勤めさせていただいていると言っても過言で無いと思つた次第です。

御英霊の慰霊祭の肅行については寄付募集もままならない昨今ですが、両陛下の大御心を思えば正に慰霊祭を行うにあたり「何のこれしき」といった元気をいただいたような心地が芽生えた次第です。

(北海道 旭川神社 宮司)

鈴鹿七福神大祭を終えて

山 本 行 恭

毎年このお祀りを斎行しておりますが、百人位の方々が参列になられます。そして斎場は行満堂神靈殿と言ひ、私どもの神社に多大なるご功績を残していただいた方、例えば松下幸之助翁や岸信介翁、その他大勢の崇敬者が位牌でお祀りをされている御殿を行満堂神靈殿と申し上げております。そこには四百三十体の位牌が祀られてあります。毎日の祥月命日祭を斎行している所であります。

そして行満堂神靈殿の御祭神と言うのが、どうしても、と言われるかもしれませんが、神佛混淆時代の流れをそのまま今に伝えております。こちらに祀られているのは、大日大聖不動明王・大日如来・十一面観世音菩薩・阿弥陀如来・聖徳太子・薬師如来です。つまり六つの仏像がこの行満堂神靈殿の猿田彦大神と併せて主祭神となっております。今日お越し頂きました御崇敬の方々には、あまりこの本意をご承知でないかも知れませんので少々行満堂神靈殿の沿革を申し上げます。

当椿大神社は垂仁天皇の御代二十七年八月紀元前三年に神社として創立をしておる所です。天正十四年に織田信長の一行に攻められまして、神社・境内は全部焼き討ちをうけました。そして下椿という天之鈿女命をお祀りする社の東の所に、大日寺という大きなお寺がありました。そこにはお坊さんが約六百人ご奉仕をしておられました。そして織田勢の戦のベテランいんきに対してまったく祈りしか知らない僧が僧兵に変わりましたが、とても太刀打ち出来ずに遂にここにいた浄円坊・百万遍坊という二人の高僧は即身成仏をされたというお墓がひっそりと残されております。その加勢をもって神社まで攻めてまいりまして、神社の歴史と名のつくものは一切合切無くなってしまうました。そしてそのお寺に祀られていた仏像が今言いました、大日大聖不動明王・大日如来・十一面観世音菩薩・阿弥陀如来・聖徳太子・薬師如来です。

つまり神社において仏像を祀るとは何事かということで神社本庁の方がお越しになれて随分と先代宮司に説教をしていかれたことがありました。ところが先代宮司も負けるもんかという強い姿勢で実は「こうなんや」という事を申し上げましたら、出来たら別途宗教法人にして頂くと我々も助かるんですが。という穏便なる手段に出られたのですが、頑として譲らずそのまま通し続けて行満堂神霊殿といつてまったく憚っていない所なのであり

ます。そしてそこに祀られている神仏の御力を頂いて我々はここに崇敬者共々に日々を過ごさせて頂いておるわけであります。今日はそれに加えて、近隣の六ヶ寺、そして猿田彦大神つまり寿老神という一神六像をこの掛け軸に御霊を遷しましてお祀りをする事になっているわけであります。

本日は雨の中大勢の方々に御参列いただき、誠に有り難うございました。今簡単に申し上げました通り、当椿大神社は赫々そのような事情で仏像をお祀りしておる稀有な神社かもしれません。近年は神社本庁並びに奈良の東大寺も含めて霊浄会を再発足しておりますので、やはり神仏共々の御加護も頂かなければならないのかなということを感じております。

扱、先ほどお祭りをご奉仕させて頂きましてふと氣が付いたのですが、式の中で、予めお配りした大祓詞を唱和致しましたところ、非常に小さな声しか聞こえませんでした。住職様の太鼓に併せての般若心經になると急に大きな声で堂々と心經さんがあげられる。つまりここに日本人の仏様に対しての愛着があるんだなということをもふと感じました。しかし皆様方がこの御縁を頂かれて六ヶ寺の六つの仏様、そして猿田彦大神、七つの御神縁、御仏縁を頂かれて一言余計ながら申し上げておきたいのは、今日の総合的な年齢は七十五

く八十位でしょうか。それ位の老若男女一同が集まってきたのです。毎年来て頂いている方もいらつしやるが、そうでない方も大勢いらつしやいます。折角なので来年も元氣に足を運んで頂けますような事を一つだけ申し上げて御挨拶に代えさせて頂きます。

仏教の或る本に『仏医王経』というのがあります、そこには「仏は医王なり」「仏は医者^いの王だ」「衆生の心を医^いすこと」とあります。医者は病人を救うものだから、仏を医王と思つていましたがそうでなく、昔、人知が発達しないのは、人間が精神的だけではなく、肉体的にも悩んで為す術さえ知らなかった時期がありました。そこにお釈迦様を始めとして祖始たちはいずれも皆、まずもつて本当に医者だったと云うことがこの本に書いてあります。つまり薬師如来という形で我々凡人に、民間では薬師さんと言つて、病氣だったらこれを癒してもらつています。又、社会問題を解決する事を得意とする仏様が十一面観音様でございます。観音様と言うのは、明るさを我々に大いに与えて下さっている仏様であります。又、阿弥陀如来様というと、極楽浄土に往生できるように仕向けて下さるという仏様のお働き。大日如来様は、宇宙の万物に心があると考えられる、中心的な密教の教主様であります。そして不動明王様は、その大日如来様のお使いであつて教化しがたい衆生を救うために怒った形相を持つているのが不動明王様です。そして一つ申し上げておきま

すが、この不動明王様には傷はありませんが、千葉の成田山に行きますと左目が切れています。御存じですか。なぜでしょうか。これは不動明王様が寝ている時に百足が目を噛んだそうです。従って成田山では百足を見つけると鍬で三つに切るといふ事が掟だそうです。あります。（本当でしょうか？）

そしてこの『仏医王経』の中に書かれている一番大事な事は、冒頭申し上げました通り皆様方が来年も元気で楽しい気持ちでお越しいただくにはまず健康を害されない事を我々は真剣に日々願っているのです。そして病氣にならない為の十則。つまり、病氣になるにはこのような十の因縁があるといふ事を一つ簡単に申し上げます。

最初一つは、久しく坐して食わず。修験修行をする者はじつと瞑想・黙想しながら一切動かなくても食べない。ところが今の日本人、或は世界を見ましても久しく勞せず食べる。そしてそれ以外に、何時でも、何処でも、何でも簡単に食べているといふ事が一番大事な因縁の一つに数えられていますのでご注意下さい。そして、二つは好きなものだからといってたらふく食ふること。これが最も良くない。そして肉体的精神的にもある程度の体力の限界を感じたら、それ以上は仕事はしない。という事も書いてあります。因みに孟子の言葉に「綽々乎として裕ゆなる哉かな」この綽綽しゃくしゃくと言うのは状態を表すことでありまして余裕

綽々と言う事であります。全てに余裕がなければならぬ。と言っておりますから、あまり闇雲にどんと胃袋に収めてしまつてはいけななことで、肉体的にも精神的にも大きなダメージを受けてしまいます。そして四つ目五つ目は余り御縁がない、と言えば失礼かも知れませんが、男女の性欲ばかりではなく、すべてに享樂の時を過ごすことと、妙に憂えもだえることで、生理的にも有害だそうですから、その辺りの人たちがいらつしまししたら、あまり無理をなさらないで頂きたい。人間は齡が行くとお互いに器官が少々緩んできます。あくびに屁。これは人前ではばからずやつてはいけないという事が十の因縁に入っているのです。所が皆様方の中には、大きな声で笑うとついお腹に力が入つて、プツと出たり少しモラしたりするでしょ。そういつた事を心して腹を引き締めて人前ではやつてはいけないのだ。という事も健康長壽の秘訣だそうです。そして残り二つは、何があつても小用と大用は我慢してはいけない。これらが病氣をひきおこす十の因縁だと『仏医王經』には書かれております。

よその神社、お寺に行かれました是非皆様方にご覧になつて頂きたいのは、仏教のお寺に行けば鳥居があつて神様をお祀りしている所が多々見られますが神社に行つてもらいますと当社のように仏様が祀つてある所がありますか。あまりないと思います。ここはそれ

だけ神仏が一体となっている。即ち人間には陰と陽、二つがなければ物事が成し得ない、生まれ得ない。という『易経』の教えという物をふんだんに取り入れているという証拠をここに実現して残しているのが椿大神社の行満堂神霊殿なのであります。妻や子、お孫様の心の中には、神様祀り仏様祀りは、お爺さんお婆さんの仕事だ。というように思っている方もいらっしゃる。それでいいのです。あなた方も堂々と私たちの仕事だと言って喜んでお越しく下さい。そこで頂いたパワーを子供や孫に分けてあげて下さい。そうするとお爺ちゃん、お婆ちゃん元氣でいいね。となるのです。おしなべて若い方には閉塞感漂っていて、家でパソコンしてゲームしてうつつをぬかしているから一つの判断ができない。それをあなた方が大いにここにお集まりを頂いて笑う事もあるでしょう、怒る事もあるでしょう、雨だから寒いから云々もあるでしょう。それだつてなんだつて会話に結びついていつて一切の文句をここに置いて行かれ、新たな御導きと御徳を頂かれたらいいのです。

さあ雨も上がったようであります。部屋を替えますが椿会館の大会場にて皆様方の直会を用意いたしております。大したことありません、椿名物鳥ご飯しかありませんが、どうぞお坊様も六人いらっしゃいますので是非、いろんなお話しを聞かせて頂きながら楽しい一時をお過ごしなれますようお祈り申し上げまして、今日の鈴鹿七福神の大祭を終わら

せて頂きます。本日はようこそお参りいただきました。

(三重県 椿大神社 宮司)

神道講演構成法

神道講演の大先達、渡辺武清先生を始め、野村清臣先生、宮地保先生、河本眞澄先生、石井寿夫先生、佐古幸嬰先生など神社界のために一生を捧げられた大先生が神去りまして久しい、先生の教えの万分の一でも恩返しできればと門下生は各地で祈りの庭のひろがりをお願い神明奉仕に励んでいます、講演内容を組立てる構成法を参考迄に佐古先生の「庭のおしえ」より抜粋し、神道講演の手引きにしてみました。

「論」と「証」

一般には序論、本論、結論からなる三分法が主ですが「序」「論」「証」「結」の四分法からなる構成法の必要性を説かれています。

それは、本論をさらに分析して「証」を独立させ「論」の正しさを証明する。

「論」で神道の古典を引用し大綱をしめし、その真実性を証明するために具体的な例話「証」を語る。

内容として

I 何のために語るか（祈願）

1 神命をかしこんで立つ

2 まず祈れ

3 正しい志を

4 まじめな生活を

5 話は生きている

II 何を語るか（内容）

その一 体験を語る

1 体験を語る

2 体験を反省する

3 二つの「門」

① 自然のいのちのなかに神様を見る

② 人間のいのちのなかに神様を見る

その二 講演の内容

1 岩戸を開け、門にとどまるな

2 位に中す

3 講録をつくる

① 話の材料を集める

② 話の材料を選ぶ

③ 話をまとめる

④ 特に切り捨てについて

Ⅲ いかに語るか（表現）

1 わかりやすく語る

① 話はわかりやすく

② 自分の言葉で語る

③ 抽象的な論理よりも具体的な事実を

④ 話には「うねり」を

2 至誠をもって語る

① 主催者にも聴衆にも深い感謝を

② 至誠をもつて語る

③ 遺言の覚悟

3 自然に語る

① 講録をはなれて

② 自然に語る

③ 個性ある語りぶりを

以上、紙面の都合で構成法を簡単に記して見ました。詳細については各地で活躍している門下生、又は、事務局迄お尋ね下さい。

第二十八回神道講演全国研修大会・愛媛大会の記録

於 石鎚神社

神社本庁総合研究所所長 田中 恆清

顧問 金倉 文雄 (徳島県神社庁庁長)

々 松岡 弘泰 (香川県神社庁庁長)

々 山村 稔晴 (大分県神社庁庁長)

々 真弓 常忠 (住吉大社宮司)

々 大野 俊康 (元靖國神社宮司)

々 矢野 憲一 (元神宮禰宜)

大会会長 十亀 興美 (石鎚神社宮司)

実行委員長 佐古 一洌 (松尾大社宮司)

実行副委員長 落合 偉洲 (久能山東照宮)

々 山本 行恭 (椿大神社宮司)

参 与
実 行 委 員

々

村田 和之
(長束神社宮司)

芦原 高穂
(旭川神社宮司)

生寫 經和
(松尾大社権宮司)

々

小串 和夫
(熱田神宮宮司)

々

鍵 三夫
(志波彦神社鹽竈神社宮司)

々

河本 文夫
(宮尾八幡宮宮司)

々

藺田 稔
(秩父神社宮司)

々

谷田 勉
(劔緒神社宮司)

々

長曾我部延昭
(伊豫豆比古命神社宮司)

々

戸内 康雅
(心清水八幡神社宮司)

々

中木屋 豊
(稻荷神社宮司)

々

中野 幸彦
(元多賀大社宮司)

々

塙 東男
(笠間稻荷神社宮司)

々

宮川 脩
(福井県護国神社宮司)

実行委員

山下 裕嗣

(白山神社禰宜)

々

山田 一孝

(靜内神社宮司)

々

山元 義清

(老杉神社宮司)

々

渡邊 知宣

(正野神社宮司)

— 実行委員五十音順 —

事務局長

畠田 明彦

(松尾大社権禰宜)

事務局員

村瀬 佳子

(長束神社権禰宜)

々

鈴木 明子

(立木神社権禰宜)

神道講演全国協議会 役員名簿

— 幹事五十音順 —

顧問	問 真弓 常忠	住吉大社宮司	幹事	谷田 勉 劔緒神社宮司
顧問	問 大野 俊康	元靖國神社宮司	幹事	長曾我部延昭 伊豫豆比古命神社宮司
顧問	問 矢野 憲一	元神宮禰宜	幹事	戸内 康雅 心清水八幡神社宮司
會長	長 佐古 一洌	松尾大社宮司	幹事	中木屋 豊 稻荷神社宮司
副會長	落合 偉洲	久能山東照宮宮司	幹事	中野 幸彦 元多賀大社宮司
副會長	山本 行恭	椿大神社宮司	幹事	塙 東男 笠間稻荷神社宮司
參與	与 村田 和之	長束神社宮司	幹事	宮川 脩 福井県護国神社宮司
幹事長	芦原 高穂	旭川神社宮司	幹事	山下 裕嗣 白山神社禰宜
幹事	生 寫 經和	松尾大社權宮司	幹事	山田 一孝 靜内神社宮司
幹事	小串 和夫	熱田神宮宮司	幹事	山元 義清 老杉神社宮司
幹事	鍵 三夫	志波彦神社鹽竈神社	幹事	山村 稔晴 高知大神宮宮司
幹事	河本 文夫	宮尾八幡宮宮司	幹事・監査	渡邊 知宣 疋野神社宮司
幹事	蘭田 稔	秩父神社宮司	事務局長	畠田 明彦 松尾大社權禰宜

平成二十四年九月現在

神道講演全国大会のあゆみ

大会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第一回 東京大会	昭和四十六年八月四～六日	神社本庁		石沢 久英	久保田 博人	
第二回 広島大会	昭和五〇年八月八～一〇日	塩屋神社		石沢 久英	河野 貞愛	
第三回 伊勢大会	昭和五十四年八月二七～二九日	神宮会館		猪瀬 好一	山本 行隆	五十鈴川
第四回 九州大会	昭和五十八年六月七～一〇日	太宰府天満宮		西高辻 信貞	宇都宮 正元	神国の春
第五回 みちのく大会	平成元年八月二一～二三日	高山稲荷神社	工藤 伊豆	新山 昌孝	平澤 明穂	平成の民の祈り
第六回 伊勢大会	平成二年八月二〇～二二日	椿大神社	岡本 健治	山本 行隆	二橋 一彦	うまし国日本
第七回 東京大会	平成三年八月二七～二九日	全国神社会館	大野 俊康	山本 行隆	青島 清三郎	食国の祈り
第八回 宮崎大会	平成四年八月二四～二六日	宮崎神宮	大宮 四郎	山本 行隆	本部 雅裕	
第九回 愛媛大会	平成五年七月一九～二二日	愛媛県護国神社	大宮 四郎	山本 行隆	小川 純生	天翔るみたま
第一〇回 東京大会	平成六年七月二一～二三日	靖国神社	大宮 四郎	山本 行隆	坂 明夫	
第一一回 北海道大会	平成七年八月三～五日	鳥取神社	山本 行隆	鈴木 瑞彦	奥谷 由起子	大禊
第二二回 広島大会	平成八年七月一六～一八日	三瀧荘	山本 行隆	村田 和之	村田 和弘	
第一三回 伊勢大会	平成九年七月一七～一九日	神宮会館	山本 行隆	矢野 憲一	中村 昌司	神路山

大会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第一四回 京都大会	平成一〇年八月二七～二九日	八坂神社	真弓 常忠	佐古 一洌	嶋田 達久	追憶
第一五回 東京大会	平成一一年九月九～一日	全国神社会館	宮西 惟道	村田 和之	生寫 經和	神国の教え
第一六回 愛媛大会	平成一二年八月三三～二五日	石鎚神社	十亀 興美	村田 和之	生寫 經和	伊予の雄叫
第一七回 石川大会	平成一三年九月四～六日	白山比咩神社	山崎 宗弘	村田 和之	生寫 經和	白嶺
第一八回 鹿児島大会	平成一四年八月二一～二三日	霧島神宮	高橋 弘平	村田 和之	生寫 經和	肇国の誓ひ
第一九回 愛知大会	平成一五年六月二五～二七日	熱田神宮	小串 和夫	村田 和之	生寫 經和	剣のこころ
第二十回 島根大会	平成一六年七月二三～二五日	出雲大社	千家 尊祐	村田 和之	生寫 經和	国引の集い
第二一回 宮城大会	平成一七年八月二三～二五日	志波彦神社鹽竈神社	宇仁 繁儀	村田 和之	生寫 經和	鹽竈ざくら
第二二回 北海道大会	平成一八年六月二二～二三日	士別神社	佐藤 公聰	村田 和之	生寫 經和	朔北のいぶき
第二三回 奈良大会	平成一九年六月一八～二〇日	石上神宮	森 正光	村田 和之	生寫 經和	布留の鼓動
第二四回 伊勢大会	平成二〇年六月一七～一九日	神宮会館	高城 治延	村田 和之	畠田 明彦	神風のむすび
第二五回 茨城大会	平成二二年六月二四～二六日	茨城県神社庁	塙 東男	村田 和之	畠田 明彦	常陸の折り
第二六回 山口大会	平成二三年六月二二～二四日	松陰神社	上田 俊成	村田 和之	畠田 明彦	至誠のかがみ
第二七回 沖縄大会	平成二三年六月二二～二四日	波上宮	末安 大孝	村田 和之	畠田 明彦	魂の鳥から

あとがき

「伝えよう！命を結ぶ共生の心」をスローガンとして、神道講演全国研修大会・愛媛大会が、日本七霊山の一つである石鎚山を神体山と仰ぐ、石鎚神社に於いて開催されました。

参加者は三十九名。例年通り三日の短期間ながら、誠に充実した日程内容で、各自が学びあう鍛錬の場であったかと思っています。

本研修大会は、参加者は必ず壇上に立ち十分間以上の講話を発表し、その講評を受けること。加えて受講生全員が発表者に対して、その出来不出来を率直に批評し合うことが、大きな特色と言えましょう。

「人のふり見て我がふり直せ」とは卑近な諺ですが、お互いが切磋琢磨してこそ進歩が見られる、と申しても過言ではありません。又自分の気付かなかった良い点の指摘を受け、秘かな喜びと自信も生まれて来る場合もあります。

「十年偉大なり、二十年畏るべし、三十年歴史になる」と言われます。本大会も数えてはや二十八回。更なる前進を続けたく存じます。

結びにあたり、石鎚神社の十亀興美宮司様と職員ご一同様、そして御協賛御支援を賜わりました四国各県神社庁のご好意に対し、心より厚くお礼を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

平成二十四年九月

第二十八回神道講演全国研修大会

愛媛大会実行委員長

佐古一 洌

講話集 愛比賣の睦び

— 第二十八回 神道講演全国研修大会 愛媛大会 —

発行 平成25年6月1日

編集者
装幀者 神道講演全国協議会事務局

印刷所 吳市広白石一—二—三四
製本所 株式会社 ユニックス

発行所 神道講演全国協議会

〒六六〇〇四 京都市西京区嵐山宮町三 松尾大社社務所内

TEL (〇七五) 八七一—五〇一六 FAX (〇七五) 八七一—三四三四

落丁・乱丁の場合はお取り替えます

~~7/10/16~~
2013. 6.



7K *Handwritten text, possibly a name or location, written in a cursive script.*

